
非日常は敵ですか？

TS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非日常は敵ですか？

【Nコード】

N6920E

【作者名】

TS

【あらすじ】

平凡な日常を愛する少年と、人外や異能者の少女達との全く羨ましくないカオスなハーレムラブコメ。 全話修正予定のため更新停止中（11/01/27現在）

始まりの夢（前書き）

この小説は一応ラブコメです。

なお、この序章を読まず一話に飛んでもらっても問題はありませんが、読むと逆にノリの違いに愕然とされるかもしれませんのでご注意ください。

始まりの夢

まだ生徒達の登校していない閑散とした時間の学校。

そこには一人の少年がいた。少年は一人窓際の席に座り、頬杖を突いている。

少年の名は はるの 春野 さつき 五月

少年はとある女性との逢瀬のため、ここにいる。

こんな早朝から出会う程なのだからよほど親しい仲なのだろう。

しかし、少年が浮かべていたのは、親しい女性との逢瀬に相応しくない憂いを帯びた表情であった。

少年は一体どのような気持ちで外を眺めているのだろうか？

そんな少年に、背後から少女が現れ話しかけた。

「おはよう、五月。……君は相も変わらず酷い顔をしているな」
少女の鈴のように美しい声が教室に染みわたり、朝特有の静寂が打ち破られる。

しかし少女のそんな言葉とは裏腹に、声にはどこか弾むような響きさえ感じられた。

少年に話しかけたのは、 かのう 叶野 みつき 三月

容姿端麗、文武両道、性格死亡と見事三拍子揃った少女。

この少女こそが少年の逢引きのお相手である。

無表情を装ってはいるが、ほとんど変化のない表情には僅かにだが喜色が見て取れた。

「……おはよう、三月。その酷いという言葉が僕の顔についてなのだとしたら、君に市中引き回しの刑を執行しなければいけないところだけれど、どう？」

それに対し少年は、一見にこやかだが瞳は一切笑っていないという人の不安をかきたてるような表情で返答をする。

「ああ、五月！何を言いだすかと思えば、私が愛しい五月の顔にケチをつけるはずが無いではないか！

酷いというのは当然、私を射殺さんばかりに歪ませている、まだ死んだ魚の眼の方がマトモな

ドブのように濁りきったその瞳に決まっているっ！！」

少女は少年のその恐ろしい表情など見ていないかのように芝居がかった仕草で悲嘆を表現するも、その表情は変わらず無表情である。

「ああ……そうだったんだ……変な誤解してごめんね。お詫びとして股裂きの刑も追加しておくよ」
少年も負けじと悲しげな表情を浮かべてみるも、その瞳は爛々としており、溢れ出る怒気は隠しきれてはいない。

少年にとってはそんな怒気すら演技の内ではあるのだが。

「ふむ…股裂きとは随分大胆な発言だな。それは、私への遠まわしの告白と捉えてもいいのかな？」

むむっ！春野 三月！中々良い響きだな。さて、それでは愛し合う私たちの挙式はいつ行うのだ？

私としては結婚式は和式の方が好ましいのだが、五月が望むのであれば洋式もやぶさかではないぞ？」

冗談めかしながらも、少女は自らが愛するのは少年であるという事を伝えるため言葉に思いを乗せ熱く語る。

そんな少女は少し潤んだ瞳で愛しい少年をじっと見つめる。

二人の視線が変わる

「……………はあ」

少年は視線を反らし、少女のその言葉に呆れたように溜息をつく。

「ふふっ五月、溜息ばかりついていると私という幸福が逃げて行ってしまっぞ？」

「……………で？」

少年はそんな冗談には一切頓着せず冷めた瞳で少女を見る。

「……五月、いくら私が可愛いからといってそんな熱い視線を向けられたら照れてしまうのではないか」

少女は少年の視線を感じ、恥ずかしそうに身をよじらせる

「……ねえ、いつまでこの茶番劇を続ける気なの？」

少年はうんざりとした様に言葉を放つ。

いや、実際少年はうんざりしていた。

何度も繰り返される、この二人の茶番とも言うべき滑稽な劇に。

「……ひ、酷いぞ五月！私のこの溢れんばかりの愛を受けとっておきなから茶番劇だなどのたまうとは五月にとって

所詮私などは遊びでしか

結局、少女は最後まで少年の態度が冗談の延長であると信じ、気付く事が出来なかった。

だからこそ、少年は自らの手で引導を渡す決意をする。

少女の抱く感情が完膚なきまでに幻想であることを伝えるために。

「いい加減、終わりにしよう？三月。」

君は現実での出来事に気づかない振りをした揚句、僕に嘘の愛を囁

いている。

そして、本当のことも苦しいことも全て初めから無かったことにしようとしている。

……君は気づかずに滑稽な茶番劇を毎日繰り返しているんだ。

なるほど、大した逃避だよ。それは。そこまで徹底されるとむしろ清々しさすら感じるね。

……まあ、それが現実逃避だと君がきちんと理解をしているのなら僕は気にしない。

でも…でもね、三月。

僕は五月だ。君の大好きだった七月ななつきじゃない。僕は君にとっては愛する人の弟。ただそれだけのはずだろう？

君は忘れてしまっているんだ。忘れちゃならない、とても大切なことを……」

「君は七月がいなくなったショックで、記憶から七月自体を消してしまった。

初めからそんな人物なんていなかったかのよう……

けれど君の心に在るとても大きな気持ちまでは消すことも偽ることもできなかった。

だから、君は自分の気持ちに潰されないため、気持ちの捌け口を探

した。

そして君は見つけたんだ。

自分と同じ時を過ごし、最も七月に近い、けれど七月ではない存在。

この僕を…」

「…僕はね、君が七月に向けていたあの感情が僕に向けられたとき、正直嬉しかったんだ。

絶対に手に入らないとわかっていて君を手に入れられたような、そんな気がして。

だけどそれは違ったんだ。ずっと気付いていながら見ない振りをしていた。

これを手にしていいのは僕じゃない。これを持つべきなのは世界にたった一人のはずなんだ。

そう、七月ただ一人がそれを手にするのを許されているんだ。

だから、三月。僕は君が壊れてしまわないと信じ、言うよ。

七月のため。そして、君のために。

……ねえ、三月。君が好きだったのは七月だ。そして七月は」

そこまで言うってから少年は今まで溜めこんでいた感情が溢れ出る衝動なのかやけに饒舌になろうとする口を一度嚙む。

少年はこれから伝える真実が本当に少女のためになるのか自信がなかった。

これは、少女から逃げるために自分の行為を正当化しているだけで

はないのか？そんな考えが少年の頭をよぎる。

しかし、少年にとって少女も兄も大切な存在である。それだけは絶対に変わりようのない事実だった。

だからこそ、少年は決意する。どんな結果になろうと後悔しない。全てを受け止める。その決意を。

そして、少年は自ら滑稽な茶番を終わらせるために、非日常を日常に返すための第一歩をふみ出す。

もう後戻りはできない。少年は口を開けそのための言葉を紡ぎ出す。

「七月は……三月の大好きな七月は、君の目の前で

第一話 狂妹

「ねえ、三月^{みつき}。君が好きだったのは七月^{ななつき}だ。そして七月は……三月の大好きな七月は、君の目の前で

ジリリリリリリッ！目覚まし時計がけたたましく鳴る音。

僕はそれに対して音の鳴る方を全く見ず手刀を繰り出す。

何かが壊れる音。

時計は哀れにも残骸となり、ご臨終なされた。

ああ……この痛ましくも悲しい事件は僕の心深く永遠に刻まれるだろう。

……まあ、永遠に思い出すこともないだろうが。

などと寝惚けた頭でつらつらと考えながら、上体をゆっくりと引き起こす。

「ふむ……とても心地のいい目覚めだ。これでは心地よさの余り、そのまま破壊衝動に目覚めてしまいそうだ」

既に破壊行為に及んだことはそのあたりに放っておくとして、僕は先程まで見ていた夢の続きが大変気になっていた。

あの流れから行くと確実に七月とやらは見るも無残で哀れな格好で不思議な踊りでも踊らされたのだろう。

その大変面白おかしいシーンを8倍ズームのスーパースローカメラで拝みたかったのだが……

「残念だ」

正直どうでもいい。

「おはよー、お兄ちゃん！……ところで、何が残念なの？」

どこからか声が聞こえる。

首をめぐらせ声のした方を見ると、妹がベットの下角から顔だけを出し不気味に笑っていた。

妹は鍵の掛ったこの部屋に、おそらく僕の目が覚める前からずっとそこにいたのだろう。

……… 将来が危ぶまれる。

「……… ああ、おはよう。一応言っておくがピッキングと盗み聞きと不法侵入は感心できないから止めておけ」

残念なのはお前の頭だ、とは流石に言わなかった僕を褒めてやりたい。

「ええ、自分の部屋に鍵掛けてるお兄ちゃんが悪いんだよ。大体
備え付けの鍵だけじゃなくて、南京錠や
ダイヤル式ロックを何個もつけられたら私もピッキングの腕を上げ
るしかないんだもん」

可愛らしく訳の分からない理屈をのたまうのは僕の妹の、はの春野 はな桜

腰まで伸びた日の光の如く燦然と輝く金の髪。
雲ひとつない青空のように澄み切った青い瞳。

これこそが黄金律であると言わんばかりの見る者を魅了するスタイル。

そんな妹のご尊顔は一体どこの天界から降りていらっしやっただ天使
なんだよと言わざる得ない程であり、
街を歩けば、年齢問わず男はもちろんのこと、女性でさえも嫉妬す
ることさえ叶わず見惚れてしまう。

妹が歩く道の両脇には頭を垂れた人々が列を成し傳き、中には涙を
流しながら神の奇跡に更なる信仰を深める者や、
妹さんのおかげでこれまで散々だった人生に希望が持てました。(
38歳・無職男性)といった意見も寄せられている。

……まあ、一部誇張表現も混じっているが概ね事実であることをこ
こに明言しておく。

だが、神とは残酷なものだ。その中身は見た目に反して歪み
きっている。

みんなも天使が不気味な笑顔を浮かべながら、蛇のようにベットの
下から這いずり出る光景を見れば分かってもらえると思う。

または、深夜にブリッジをした天使に階下から狂ったように笑いな
がら追いかけられれば、嫌でも分かってもらえるだろう。

顔面鼻血まみれの天使がホウキに跨り空から登場し、

匍匐前進（50mを6秒ジャスト）で町内を追いかけて回された僕と
しては、

どうしてこんな事になってしまったのだろう……？と、世界の理不
尽さにいつも頭を悩まされるばかりだ。

なんて哀れな僕。

……まあ、妹の事は一先ず置いておこう。

僕はこれから学校に行かなければならず、あまりのんびりしてもい
られない。

妹に関わると無駄に時間を浪費してしまうと悟っている僕は、
窓を開け放ち妹の大好物、ビーフジャーキーをベランダから放り投
げる。

ベランダからダイブする妹。

ここは2階だがあの妹なのでほぼ確実に無傷どころか地面に大打撃
を加えているだろう。

妹はビーフジャーキーを食べる44秒間はその場から動かない。

だから、僕は妹が戻るその前に光速で着替えを済まし、リビングを
目指し1階へと降りていく。

しかし、あと一段と行ったところで僕はそいつに出会ってしまった
……

第一話 狂妹（後書き）

なんじゃこりゃ

第二話 影に生まれしモノ

1階へと降りる僕。しかしあと一段といったところで僕はそいつに出会ってしまった……

「あつ、五月。おは
というのは勘違いだったようで気にせずリビングに向かい歩を進める僕。

「えっ、ちょ何で無視す、ぐぼあ!?
途中変な音を立てる障害物を蹴り飛ばした気がしたが時間もないので放置だ。

「俺が一体何をしたと?言:ぐうおうえっ!!
何となくローリーングソバットをかましたい気分だったので僕の背後に躊躇なく技を放つ。

ついでに、床に転がる産廃にビーフジャーキーを仕込んでおく。これで44秒の追加だ。

音もなく華麗にリビングに舞い降りた貴公子ほくは洗顔を済まし、キッチンへと足を運ぶ。

しかし、そこで僕は多大なる失敗を犯してしまった。ふと視線を感じ窓の方を見てしまったのだ。

そこには

舌をガラスに這わせながら喜悦のあまりに歪んだ口で嗤う妹が、窓に蜥蜴のように張り付いていた。
いる。ではなく、いた。という表現の方が正しいだろう。なぜなら

「うおおにいゝぢゃああん、どおおあしゝたあぬつゝおゝお?」
何十匹もの蛆が肌の上を這いずり回る、そんな錯覚を抱かせる声がしたからだ。
僕の耳元で

「つつ!」

背後を見ないまま前方へ跳躍、僕の頬に鋭利な刃物で切られたような痛みが走る。

「えへへっ、さっすがおにーちゃん。逃げなかつたら胴と頭が、さよならってしちゃってたよう〜」

指についた僕の血を美味しそうに舐める妹はととても愉快そうに笑う。

「…そんなに血が飲みたければ七月のにしておけ。いまなら無料サービス実施中だぞ」

僕は呆れたように溜息をつき、ついでに七月ドリンクバーもお勧めしておく。

「あははっ、ななちゃんの血を飲むぐらいなら泥水でも啜ってるよ。もう、お兄ちゃんはいっつも私に意地悪するんだから。そんなんじや、めっ!だよっ」

……はいはいと、僕は妹の戯言には適当に返事し、妹の凶行ついては一切触れずに朝食の準備を始める。

この程度で騒いでいたら身が持たない。これは春野家の常識であり、鉄則である。

朝食は面倒だったので、卵とパンで済ませておく。

僕は焼き上がったパンを齧りながらテレビの1コーナー「今日のプレデター」に心を癒されていた。

その際、床を這いずり回りながら埃を摂取している妹はなるべく視界に入らないよう注意しておく。

僕の心休まる時は一日の中でも大変稀であるが故、絶対に邪魔されたくはないのだ。

追記：朝の寿司占いは最下位。ダンプカーと鉄骨と隕石に注意だそ
うだ。

……どうしろと？

朝の占いで死を仄めかされた僕。しかし、何時までも気にしていてもしょうがない。

気合いを入れ僕は通学という名の地獄への一步を踏み出した。ついでにゴミも踏んでおいた。

そんな僕の後ろを妹がぴったりとついてくる。

……さて、行くとしますか。

扉を開け放ち、跳躍するかのようにな歩を踏み出す。

玄関から一步出た途端背後の気配が膨張。しかし僕は振り返ることなく全力疾走をする。

僕の視界には塀の上を四つん這いで並走するとんでも人間が映っているが、無視。

前だけを見つめ決して速度を緩めはしない。捕まれば僕の短い生涯はここで幕引きとなってしまっからだ。

全力疾走に僕の頭が朦朧としてきた時、眼前に校門が映る。

だが、油断も安堵もできない。

そのままカールルイスもびっくりな速度で校門を走り抜ける僕。

妹は僕が校門を抜けると同時に動きを停止した。

「ああ、口惜しや。あともう少して兄者を喰らえたものを…」

遠く離れた妹は芝居がかった口調でそう呟き、残念そうに笑っていた。

下駄箱に着いた僕はようやく全身を緊張から解く。

……どうやら妹との賭けは今日も僕の勝ちのようだ。

文字通り命を賭した戦い。それは過去の僕の願いの代償。結果として、僕は日常に愛想を尽かされ、非日常が世界を埋め尽くした。

平凡な日常こそが至上。非日常こそが敵。そう定めた僕。

だからこそ、非日常に負けるわけにはいかない。絶対に。僕は前を見据え、しっかりと地を踏みしめ歩き出す。

僕が大切なものを失ったあの時、心に誓ったのだ。

僕がこれ以上何も失わないよう、そして…

「僕の平凡な日常を取り戻すためにも……」

負けられない

第二話 影に生まれしモノ（後書き）

別にシリアスじゃないです。

むしろ「今日のエイドリアン」にするかどっかに一時間迷った話です。

第三話 痴情の戦女神

先月二年生になった僕は三階の教室を目指し、一人寂しく階段を上っていた。

べ、別に寂しくなんてないんだからな！と僕の脳内ツンデレと戯れる内に目的地に到着したようだ。

教室に入ってみると人はほとんどおらず、僕は誰にも挨拶することなく窓際にある自分の席へと向かう。

僕は何をするでもなく、ぼんやりと外を眺めていた。

こうやって一人で窓の外を眺めている時間は僕のガラスのように繊細なハートを癒すのにうってつけの時間であり

外の雀を眺めては僕も飛べたら楽に逃げられるのに、とか

登校する先生を見て、いつか僕もあの先生の頭のようにストレスで禿げ散らかさないだろうか、とか

あそこまで禿げてんだっいたらもういつそ全部剃れよ、とか

お前が剃らないんなら、僕がお前の頭に引導を渡してやろうか等とほのぼのと色々考えていた。

そんな僕の思考を遮る声。

「おはよう、愛しの五月。君の可愛らしさは最早神の領域だな」

聴くものを魅了するような深く澄み切った声に、僕はゆっくりと首を動かして声が出た方を向いた。

そこにいたのは単純に美しいといった言葉では形容しきれない少女

叶野 かのう 三月 みつき だった。

妹が天使ならば、三月は女神と言っても差し支えない。

ただ、三月は女神は女神だが、どちらかといえば戦女神という表現が最も適しているだろう。

鋭く吊り上がった双眸は見る者に畏怖を抱かせるだけでなく、高貴な者の気高ささえ感じさせる。

一つに束ねられた長く美しい黒髪は、三月が歩くたびに揺れ、値を付けることさえ憚られるような芸術性すら秘めている。

そして豊満な胸は長身と相まり、この存在こそが最強の証であるということを示している。

他にも容姿についてどれほどの美辞麗句を重ねても三月を表現し得ないだろう。

三月こそまさしく神の作り給った芸術であり、人間の享受出来る美を超越した存在である。

とは叶野三月親衛隊の言だ。

そして、そんな神の奇跡とも言える三月に愛を囁かれる僕は当然の如く三月を愛して……いない。

理由はとても簡単だ。女神の微笑を浮かべた三月の手は今にも僕の股間に触れようとしている。

つまり

構です。

この線の下は読み飛ばしていただいて結構です。

「五月、済まないが手を放してくれないか？これでは愛しい五月の

下半身を露出させることが出来ないぞ」

「……何で露出させる必要があるんだ？」

「もちろん、私が興奮するからだ！まあ、何れお世話になるんだし、早いに越したことはないだろう。うん」

「いや、何れどころか一生お世話にならないと思うぞ……ところで、お前は何故スカートを脱ごうとしているんだ？」

「名を名乗る時は自ら名乗る。下半身を露出するときは自ら露出する。私は、そんな礼儀すら忘れていた。

恥ずかしい限りだな。んっ！？だから、五月は止めようとしたのだな。流石は我が夫だ。……うむう、五月手を放してくれないか？

スカートが脱げないではないか。はっ！？そうか、こんな人の多い所で脱いでは私のあられもない姿が晒されてしまう。

それを案じてくれていたのか！？ ああっ！！こんな素晴らし

い夫を持った私はなんて幸せ者なんだ！今日という日を

祝して、祝いの席を設けよう！会場はもちろん私の家だ。ついでに両親にも紹介が出来るし、これを機に籍も入れてしまえばいい。

そして、結婚した二人の最初の共同作業は文字通り二人が一つとなり激しく愛し合うのだよ。たまらんなこれは。ぐへへ……おっと涎が垂れて……ん？五月よ、その荒縄は何だ？……なるほど、五月はそういう行いを御所望か。五月が望むのなら私はどんなことでも

ふむ、五月よ幾ら待てないからといって皆の前で亀甲縛りとは……余程我慢をしていたのだな？よし、いいだろう。その進る劣情を私にぶちまけるがいい！！全て受け止めて

ふふっ。五月、目隠しまでするとは徹底的だな。成程この全く見えない状態で、五月が私に何をしているか、何をしようとしているの

かを私に想像させることでより興奮状態にさせるということだな。
あぁっ、確かにこれはかなり興奮するな！！期待と不安の中で愛する五月を受け止める覚悟をする私。そして、無抵抗で愛する者受け入れようとする妻に更なる愛情を感じた
五月は、遂に自らの衝動を抑えきれず私にいつ！！……なんつと
いう展開！なんとという状況っ！さぁっ！来るのだ五月！私の脳内は
桃色夢で覆い尽くされている！！
これ以上待たされたら、狂ってしまいそうだよ！！さーっーき！さ
ーっーき！さー

ゲシッ！ ボツチャーン！

さつがぶお gぶおぶ…ぶくぶく………

………

………この線の上は読み飛ばしていただいて結構です。

……ド変態ということだ。まあその変態もたった今泉へと封印された。
残念ながらこの封印も永遠ではない。おそらく1時間が限界だろう。
というか、亀甲縛りの目隠し状態で百キロの重しを足枷にして沈めたのにどうやって浮かんでこれるのか不思議でならない。
今度からは二百キロにしてみよう。そう決意し教室に戻ることにした。

その後僕は1時間目の休み時間に満身創痍ながらも教室に戻る三月を目撃した。

次は沈めた後、泉を埋めよう……

第三話 痴情の戦女神（後書き）

二人目のヒロイン登場です。

一応ヒロインの中ではまともな部類です。

第四話 小さな癒し

二時間目も終わり、今は休み時間である。

授業をまるまる寝て過ごして体力回復に努めていた三月はそろそろ起きだしてくるだろう。

滅茶苦茶面倒くさい。いつその事土葬にでもしてやろうか。

しかし、心優しい僕はもちろん、そんな恐ろしいことを出来る筈がない。

そんな僕の優しさは学校中に響き渡り、大変好評を博している。

例えば、授業中だというのに僕から離れようせず、皆の勉強を妨げる三月を屋上から逆さに吊るしたり、

休み時間にいきなり奇声を発しながら抱きついてくる三月をダストシュートに優しく入れてあげたり、

昼休みに「弁当はこの私だ。味わって食べてくれよ」と言って半裸で迫る三月を縄で縛った後、

パンくずや生肉を乗せて外に放置。そうすることで、この学校に住まう鳥（雀から鷹までいる）や

野生動物（狸や猪、熊もいる）に餌やりをしているのだ。

更に、地球温暖化の原因となるであろう三月（僕による独自の脳内調査結果に基づく）を燃やさずに

処理することで環境にも配慮している。地球にさえ優しいのだ僕は。三月に関する出来事だけでこれほどまでに優しいのだ。時々自分が恐ろしくなる。

そんなことを考えながら三月の入った焼却炉に火を放つ。燃えるゴミは燃やす。これは常識だ。

さっきの話と矛盾している気もしないでもないが、まずは三月を処分することが環境改善の第一歩なのである。

「相変わらず容赦がないね。五月君」

晴々とした気分で教室に戻る僕に幼い声がかかる。

声のした方を見る。

……いない？

視線を下に下げしてみる。

……いた。僕に声をかけた彼女は 三上^{みかみ} 結^{ゆい}

この僕の周囲でかなりまとまな部類に入る稀有な人だ。

特筆して秀でている所はないが、小学生のようなあどけない笑顔や120cmという小さな身体をちょこちょこ動かしている姿は小動物を見ているようで、とても癒される。

また、ぬいぐるみを集めるのが好きというのも可愛らしくポイントが高い。

クラスでもマスコットキャラクターのような扱いを受けている。

「僕の辞書に容赦の二文字はないんだよ。三月を全力で仕留めるのは最早礼儀であると言っても過言じゃない」

彼女を見下ろし、口に自然と笑みが浮かんだ僕は結に優しく話しかける。

「もつっ、三月ちゃんは女の子なんだからあんまり酷いことしちゃだめだよ」

結は子供のように頬を膨らませ注意する。そんな幼い仕草に全く違和感を感じない。

「むう、中々の無理難題だが、結が言うのなら僕の出来る範囲で善処しよう」

かなり不本意だが、結がそう望むのなら頑張ってみようという気にもなる。

「それ前にも言ってたよね……。まあ二人からしたらそれが普通のコミュニケーションなんだろうね。」

なんだか止めちゃいけないような二人だけの世界って感じだし」

大変失礼なことを言い放つ。結、そんな世界は嫌だぞ。

「どちらかと言えば止めるべきは三月の方だろう。まったくあいつもいい加減懲りればいいものを……」

普通あれだけされたら二度と関わりたくなくなると思うのだが。というかとつくに死んでいてもおかしくないのだが。

そんな僕の言葉に、結は何かを考えるかのように難しい顔をした。

「……きつとさ、三月ちゃんはどつしよつもないくらい五月君のことが好きなんじゃないかな？」

……ずいぶんと歪んだ愛情だな。

「好きで好きでたまらなくて、それを素直に全身で表している三月ちゃんはいつも幸せそうで……。私ね、

三月ちゃんが羨ましいんだ。三月ちゃんを見ると、私ももつと自分に素直になれたらなって、そう思っちゃうくらいに……」

そう言っつていつもよりどこか大人びた表情で僕をじつと見つめる結潤んだ瞳で僕を見る結が何を伝えたいのかはわからないけれど、いつもとは違う姿にどこか落ち着かない。

そんな互いに見つめ合いどうしたらいいものかと迷っている時、チャームが鳴った。

「っつて、急いでいかないと授業が始まっちゃうよ。五月君は先に行っつていいから！」

そう言うや否や結は僕の視界から姿を消す。

結は先に行っつていいと言っつたが、二階の階段の踊り場で上っつてくるのを待つことにする。

……んっ？なぜ一緒に話してたのに違っつ階にいるのかっつて？

僕は二階、結は一階の外。

別に大声で話してたわけでもない。

……ああ、言い忘れていたが結は若干僕と体のつくりが違う。

結の首は130cmある。

つまり結の全長は250cmだ。

見つめ合っていた時は、なぜか更に長くなっていた。

見下ろされて落ち着かない僕。

結は今が成長期なんだろうか……？とか考えていたが結局何だったのだろうか？

まあ、いい癒しの時間になったので気にしないでおこう。

その後、余りにも遅いので様子を見に行った僕が見たものは、いつもと違う首の長さに感覚を狂わされたのだろうか、

おそらく天井に頭をぶつけ、目を回し気絶している結だった。

追記：結の頭を地面に付けないよう保健室に運ぶのに物凄く苦労した

第四話 小さな癒し（後書き）

またもやまともなヒロイン登場です。

もう少しぶっ飛んだヒロインが書きたいです。

第五話 僕を捕える君（前書き）

今回は表現がアレな感じですが。ご注意ください。

第五話 僕を捕える君

今は昼休み。僕は一人屋上にいる。別に飛び降りたいとか、ハブられてる訳ではない。

ここには何か悪いものでもあるのか、というくらい全く人が寄り付かないからだ。

そのため、ゆっくり昼食を楽しみたい時に僕は一人でここにくるのである。

僕のはのんびりと、家から持ってきたパンを頬張り食べ始めた。

平穏な時間、まさに至福の一時である。こんな時には三月等が乱入してきそうなものが今まで

一度も訪れたことがない。いろいろと察しているのだろうか？ だったら普段からそうしてもらいたいものだ。

そうやって、貴重な時間をまったりとしていた時、屋上の扉が開いた。

まあ、鍵が掛っている訳でもないし誰が来ても不思議ではないのだが、ここを利用するのは

僕と後もう一人だけ…

「千早。お前もここで昼食か？」

そう、磯木いそぎ千早ちはや 僕のクラスメイトの一人だ。

肩口まであるさらさらした黒髪とほとんど動くことのない整った顔が印象的だ。

一年の頃から屋上をちよくちよく利用していた僕はそこで千早とよく出会う事になった。

千早は余り喋らないため、一緒に昼食を取るのも吝かではない。

ただ、初めは喋らない上に、ノーリアクションだった千早に色々と苦心した。

「ほら、そんなところに突っ立ってないでこっち来て座ったらどうだ？」

頷いたかどうかも疑わしいような微かな揺れと共にこちらに寄ってくる千早。

分かりづらいがこれでも、大分仲は良くなった方なのだ。

千早は僕のすぐ隣で止まると、じっと僕の食べているパンを見つめる。

「ん？このパンに興味があるのか？これはウグイスパンっていうパンだ。っていつても、

鳥の鶯が入ってる訳じゃないぞ。エンドウを使った餡、鶯餡を使ってるからそう名付けられたそうさ。

何なら一口食べてみるか？」

パンを差し出すとそつと身体を動かかしパンを啄む千早。子に餌を与える親鳥の気分はこんな感じなんだろうか。

そんな千早を微笑ましく見守っていると、パンを食べ終えた千早の口が僕の指を吸い始める。

くちゅくちゅと液体固有の音を出しながら僕の指を根元から丹念にねぶる千早。

千早の口内は暖かく、僕の指を柔らかい肉の感触が優しく締め付けている。

初め千早の口は刺激を与えるのを楽しんでいるかのように、強く吸い上げていたが、徐々に

口を離していきそつと愛撫するかのように口唇で指を撫でつける行為に夢中になっていった。

口からは千早の分泌する液体が零れ落ち、千早の液体が僕の指を余すところなく濡らしていく。

そんな千早は頬を薄く桜色に染め、蕩けるような瞳で僕を見る。どこか興奮したようなその面持ちを見て
僕の背筋に、全身を思わず震わせてしまうような刺激が走る。
このままでは不味いと判断した僕は指に少し力を入れ抵抗する。
それに気付いた千早は最後だからというようにゆっくりと指を舐め付けながら引き抜き、千早は残念そうに口を離した。
僕の指と千早の口の間には架かる濡れた橋は途切れ地面を濡らしている。
く。

「ふう、千早はそんなにお腹がすいていたのか？僕の指なんて美味しくないだろうに」
そう言っただけで全身を弛緩させた時に初めて自分がとてつもなく緊張していたことに気付いた。
何でもない顔をしているが、僕の心臓の鼓動は明らかに早くなっている。
あのまま続けていたらどうなっていたのだろうか？そんな好奇心が少し疼いていた。

「お腹空いているの我慢出来ないなら、ここに来る前に何か持ってくればいいのに。」
それとも、僕に会うのが待ちきれなくて急いで来るとか？
なんて冗談を言ってみると、千早は顔を俯かせてしまった。怒らせてしまったのだろうか？

千早は僕のことなんて知らない、というようにくるりと背を向けお腹が空いているのか昼食のハトを捕縛した。

へっ？どうやってかって？それは簡単。自分の触手をむよーんと伸ばして…ん？

ああ、どうやら言い忘れていた事が有ったみたいだ。
千早は基本無口だが綺麗な顔立ちをしており、どこか和風人形のよ
うな雰囲気を漂わせている。

でも千早一番の特徴は上に着ているセーラー服の裾から飛び出して
いる

それぞれ自由に動かせる十本の長く太い触手だろう。

その触手を器用に動かして生活している千早にとって屋上の手すり
に止まったハトを捕まえることなんて

造作もないことだ。捕まえ、そのまま触手の先端にある口に放り込
む。

触手にハトが吞まれる光景を見て、先程の触手に指を吞まれていた
時の事を思い出す。僕があのまま

止めなければ、哀れなハトと同じ運命を辿っていたのだろうか……。
基本的には千早を信頼しているが時々不安になってしまふ僕は友達
として情けないなと思う。

心構えの問題であつて実際に食べられない訳ではないが
いつか、千早に吞み込まれても大丈夫なんだと思えるぐらいに仲良
くなれたらいいなと、

そう思つて一年が経つた。最近はこのままでもいい気がしてくる。
不思議だ。

第五話 僕を捕える君（後書き）

作者的に一番書いていて面白いヒロインです。
いつそ主人公の台詞も消したいくらいです。

第六話 日常の幸福

ようやく全ての授業が終わり残すは掃除のみとなった。ゴミってものはどれだけ処分しても何度も湧いてくるから困ったものだ。

「すういまっせくん!!おっくれましたああ!!」

…ほらみる、朝片付けたゴミがまた湧いてきた。それに今更来ても授業終わってるぞ。

「って!誰がゴミだ!誰が!」

このうるさくて鬱陶しいテンションの男は はるの 春野 ななつき 七月

認めたくないが僕の双子の兄だ。正直うざい。

「うざいは無いだろ五月!おまえももっとおにいたんを敬え!」

少し生まれる時間が違っただけの差で敬わなければならぬとは理不尽な世の中だ…

それに、おにいたんって…頭に蛆が湧いているのか?男が言つと気持ち悪いな…

「ちよ、ちよつと嘸んだだけだから!全然変なことなんて考えてないから!

別に五月に可愛く恥じらいながら、ふねえねえおにいたん…だあいすきっ!」

なんて言つて欲しい訳じゃないから!いや、マジだつて!本当に…おにいたん…怖くて眠れないの…だから、だからね…さつきもいっしょにねてもいい?」

なーんて言われてその後一緒に寝る五月にいたずらしちゃっぞーデユフフ

…なんてことも考えてないから！かんがえてないからあー！！」
すごい…言葉と表情だけでここまで気持ち悪さを表現できるとは…
というかどどん墓穴掘ってるぞ、この馬鹿…
ってか、何で妹じゃなくて僕なんだよ…

「…そんなの決まってるじゃないか！五月が可愛すぎるからだああ
！！」
二人の変態の台詞が被った。変態の一人三月は先程冷凍室に吊るしてきたはずなのだが何故いる…

「ずいぶん遅い登校だな、お義兄さま。まあ、そのおかげで五月と濃厚な蜜月を過ごすことができたが」
何、話を捏造してんだ変態。お前は黙って泉でピラニアと戯れてるよ。

「ふんっ！貴様にお義兄さまなどと呼ばれる筋合いは無いわ！この泥棒猫がっ！」
いつから僕はお前のものになったんだよ。お前は一生竜宮城でピラメでも踊ってる屑が。

「ふっ、お前と愛する五月は男同士の上、血も繋がっている。当然私の方が五月を幸せにしてやれる」
「はんっ、男同士？血が繋がってる？だから、どうしたあっ！俺の、この俺の五月への愛！はなあそんなもの如きで
阻むことなんて出来はしないんだよおおお！！」

「あっ、五月君そういえば私と同じ掃除場所だったね。一緒にいこっか」

「そうだな、変態は放っておいて真面目に掃除するか」
未だ言い争っている変態を放って結と掃除場所を目指す。

「ねえ、五月君今日は本当にありがとうね」
歩きながら申し訳なさそうにお礼を言う結。

「僕は別に何回もお礼を言われるほどのことはしてないんだがな」
僕が気絶した結を保健室に運んだことへのお礼なのだが、休み時間の度に言うほどの事だろうか？

「うう…しつこくてごめんね…でも、私五月君に運んでもらって凄く嬉しかったから。私重くて運ぶの大変だったでしょ？」
結がしょんぼりとしてしまったので、急いでフォローを考える僕。

「いや全然気にしてないから。それに、結は重くなんてなかったぞ。うん」
重さより運び方を考える方が一苦労だったとは言わない。

「ホントに？気を使わなくていいんだよ？」
そう言っただけのような目つきで首を二回スパイラルさせて僕の顔を覗き込む結。結なりの首の傾げ方だ。

「ほ、本当だ。羽のように軽く、綿のようにフワフワした体だったぞ」
フォローに必死で訳のわからないことを言う僕。フワフワってどちらかと言うと感触だろうが。僕は変態か。
そんな必死な様子が面白かったのか、ただ僕をからかっていただけなのかクスクスと笑う結。
やはり、結には断然笑顔が似合う。僕も自然と笑みが浮かび、二人で笑い合う。

こういう日常の何気ない瞬間を体験したとき、僕の日常も捨てたも

のじゃないなと実感できる。

そんな楽しい気持ちのまま目的の部屋に着き扉を開ける。

「「待っていたぞ、五月!!!」」

その後待ち構えていた変態二人も掃除しておいた。ダストシュートが詰まったそうだが知ったこっちゃない。

第六話 日常の幸福（後書き）

更新速度遅くしてでももう少し文章を練った方がいいでしょうか。自分で書いておいて何ですがキャラがまともだったら酷い文章のよくな気がします。

何れ、普通のラブコメにも挑戦したいです。

第七話 桜

掃除も終わり帰りの準備をする僕。

帰宅部に所属している僕にとっては帰ることこそが部活動なのだ。

「五月君はもう帰るの？」

そう僕に話しかける結はバスケット部所属だ。

結は以前に、長いのが首じゃなくて、手だったら良かったのになと笑っていた。

…少し返答に困った初対面の僕。

僕は校門を指し歩いていった。歩く僕は当然一人。友達がいないとかじゃない。断じて否である。本当だ。

これから僕が赴く場所に他人を巻き込む訳にはいかない。それは、義務でありルールでもある。

僅かに緊張している自分を自覚し校門の目前で足を止め目を瞑る。気を静めなければならぬ。

一瞬の気の緩みがこの先の出来事を左右するかもしれないからだ。深呼吸をする。

よし、もう大丈夫だ。そう自分に言い聞かせ目を開ける。

視線を上にする。門柱の上に佇み僕を見下ろし不敵に笑う妹が目に入る。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。ワタクシ、お兄ちゃんの妹こと桜は寂しく一人大変お待ちしております。」

ありがとうっ来てくれて嬉しいよお兄ちゃんあははははははははは

「はははは」

長い鬼ごっこが始まる

妹との鬼ごっこも終わり命辛々自宅に着いた僕。

今回ばかりはかなり危なかったがなんとか乗り切ることが出来た。今日の日のおかげで少なくとも一週間は妹は大人しくなるだろう。僕はすぐさま自室へと向かい体を休めることにした。

部屋に入るや否や疲労困憊の体をベットに投げ出す。目を瞑り考えるのは妹の事。

おそらく今日の妹があそこまで荒れたのは僕あの質問のせいだろう。

以前にも似たようなことがあったが、あの時は七月が原因だったな。あの時は確か妹を見た七月が

「おおーい、五月のだからいすきなお兄ちゃんがかえってきたぞおー」
ものすごくイラつときた。考え事をしている時に七月の声を聞くと張り倒したくなる。

「もしかして、寝てんのかあー？お帰りのハグがないぞー」
元からねーよ。お前は大人しく風呂場の垢でも舐めてる。と思っただがよくよく考えると風呂に入れなくなるので、小豆でも洗ってるよ。

「んー、寝ちやってるのかあ、でも、起きてるかもしれないし確認

のため部屋に入んなきゃな

別に疾しい気持ちはないけど、もし寝てたら寂しいだろうし添い寝でもしちやおつかなあ」

大きな声で言い訳をしながら僕の部屋に来ようとしている七月。

馬鹿が。鍵を掛けてるに決まってるだろうが。諦めてプリンでも食ってる。

「ぬわああ！鍵掛ってるよ！くそっ、五月の可愛い寝顔を見て、あわよくば添い寝とかしちやったり、悪戯し放題だったのいい！」
…本音がだだ漏れすぎだろう。とつと部屋に帰って一人七並べでもやってるよ…。

まだ鍵をガチャガチャやってる。しぶといな、そんなに僕の部屋に入りたいなら

この部屋に一人で閉じ込めてやるうか。

「うゝん開かないなあ…なんでだろ えっ？

何故か七月の声が驚きで強張る。まるで見てはいけないものでも見ってしまったかのように…

つつ！まさか！あり得ない。だつて

「な……なんでここに

僕の予想が当たってるとしたらかなり不味い。急いで鍵を開け扉を開け放つ。

「七月っ！！」

僕の眼に入り込んできたのは

「ただいま、お兄ちゃん」

そう言って無邪気に笑う桜と、廊下の隅で頭を抱え震えている七月

の姿だった…

第七話 桜（後書き）

1日中勢いだけで話を書いていると自分が何書いているのか訳が分からなくなりますね。

途中の部分は一応書いたんですが、書いてしまつと展開がラブコメじゃなくなりそうなので省略しました。

いつか手直しして公開したいです。

第八話 黄昏の君

早朝のとある道をボクはゆっくりと歩いてた。

雲ひとつなく青く澄みきつた空。太陽の陽光が降り注ぎボクの体をポカポカと暖める。

太陽の光は体だけでなく心まで明るく照らしていく。

なんだか鼻歌でも歌いたい気分だ。自然と頬は緩み思わずスキップをしてしまう。

きつと今日はとってもいいことが有るのだろう。そんな予感がする…

そう、そのはずだったのに今は…

「おいくおるあー!!こんがきゃあどこ見て歩いてんだよ!ああん!」

「餓鬼だからって容赦すると思ったら大間違いだぞ。ゴラア!!」

「ウホ!ウホホオウホツホウホオウ!!」

服がちよつとかすつただけなのに絡まれている。

大体リーゼントに黒の長ランっていつの時代のヤンキーだよ。番長とか居そうな雰囲気だ。

最悪、前二人はスルーしてもいいけど、最後なんだよ、おい。

どう見てもゴリラじゃん。しかもヤンキーやるなら服ぐらい着ろよ。全裸じゃ変態だつーの。ゴリラでもそこは弁えとけよ。

「うおうつい!ぬうわぬういいスイクアトウすいとえんどあよう!

」!

「俺が容赦するのはお年寄りだけじゃあい!!なめんなよ!!」

「……………」

ヤンキーの言語が解読不能になって来てる。赤ちゃんからやり直してこいよ。

ヤンキー2優しいよ…お年寄りに座席とか譲っちゃうんだろうな。
おいゴリラ黙ったかと思えば、何バナナ食ってんだよ。よこせよ！

「 x ! x x ! ! ! 」

「俺のおじいちゃんはずごいんだぞお！！ゴルア」

「……………」

どうしよう…！っそのまま帰ったら見逃してくんないかな。
はあ…ちよつと試してみるか。そお〜つと、そお〜

「って何逃げようとしてんだ！！ゴルア」

うわっ、おじいちゃんっ子のヤンキーに捕まってしまった。

あう、どんどん力こめられてる。痛くなってきた…

ギユツと腕を折るんじゃないかといった力で握られる。

「い、痛っ！」

本当に痛い。なんでボクがこんな目に合わなくちゃならないんだろ
う。

ねえ、誰でもいい。お願い誰か、誰かボクを助けて！

「ぐほあ！？」

まるでボクの声に呼応するかのように

突然ボクの腕を掴んでいたヤンキーが吹っ飛んだ。

ボクの目の前には拳を握りしめ俯いている少年が立っていた。

「誰だてめえ！！！」

「…いんだよ」

「ああん！！！」

「うざいんだよ！…このゴミどもがあー！」
突然現れた少年は恫喝しヤンキーたちに向かっていく。その動きはとても俊敏でヤンキー達の拳はかすりもしない。拳をいなしたり、かわして出来た隙を突き、打撃を加えていく。それは倒すためというよりは、相手を痛めつけることを目的としているようだ。

「くっ…こいつ強ええぞ!？」

「……ウホホッ!！」

「…!ア、兄貴!……わかりました、不甲斐無くてすいやせん…」
どうやらゴリラがヤンキー達のボスのようだ。

流石の少年も危ないかもしれない。なぜなら、相手は人を殺すことを厭わない野生生物だからだ。

ボクのせいで少年が死ぬところなんて見たくはない。今ならボクも自由だ。

少年に逃げるよう促して

「ウグホオオオ!？」

そう思っていた矢先、高速で動いた少年はゴリラの膝に足を置き

き、決まったああ!シャイニングウイザードああああ!!!

ゴリラにシャイニングウイザードをかます少年。

言うなればゴリラニングウイザード、シャイニングゴリラだあああ

ああ!!! (混乱中……)

ゴリラを連れて逃げるヤンキー達。

残されたのはボクと少年のみ。

「あ、あの…助けてくれてありがとう」
色々と驚くことはあったがボクを助けてくれたのは事実だからお礼を言う。

「…別に。ただゴミが目障りだったただけだ。憂さ晴らしも兼ねていたしな」

そう言つてそつぽを向く少年。確かに滅茶苦茶楽しそうだった。それでも、照れたような少年の反応を見る限りそれだけでもなさそうだ。

心に余裕が出来たので恩人である少年を観察してみる。

銀色の綺麗な髪。宝石のように淡い光を放つ緑の瞳。

それよりも特徴的なのは男とは思えない中性的なきれいな顔をしている。

今は不機嫌そうに目を細め眉間に皺を寄せているが、もし少年がにっこりと笑つたらまさしく天使のように美しいのではないだろうか？

「…何をじろじろ見てる」

ま、まずい。ひよつとして少年を怒らしてしまったのだろうか。ゴリラを倒す少年が相手だったらしんでしまう！！

「そんなに怖がられるとショックなのだが…。勘違いしないでほしいが」

今は少し機嫌が悪いだけでお前には一切怒ってないからな」

うっ…この人すごくいい人だ。助けてくれた上、フォローも忘れな
いなんて…

そんな少年を疑うなんて自分が恥ずかしい…。

「…何で落ち込んでるのか知らないけれど元気出せよ。学校に遅れたくないし」

僕はもう行くから。じゃあ」

って、大したお礼もしてないのに少年が行ってしまっ！
せめて、名前とか聞いとかないと！

「あのっ！お礼がしたいのでお名前と学校の名前を教えてください
！」

「別にお礼はいいんだが…教えてもらわなければ気が済まないって
顔だな。

…神王高校二年A組16番 春野 五月だ。じゃあもう行くぞ」
踵を返し歩いていく少年・春野君その背に向けてボクは声を放つ。

「ボクは 斎賀 さいが 要 かなめだよっ！
春野君！ またねっ！」

どうやらボクの前感当たっていたようだ。

これから起こるであろう出来事を考えたボクは胸が高鳴るのを感じ
ずにはいられなかった

第八話 黄昏の君（後書き）

今回は視点が主人公ではありません。

ところで、新しい変なヒロインが最近出てないですね。

もっと増やしていきたいです。

第八・五話 ななちゃん（前書き）

ここから先の話は読み飛ばしていただいて構いません。

今までと雰囲気が変わりますので、ラブコメを期待する方は第九話へ飛ばれた方がいいかもしれません。

第八・五話 ななちゃん

ここは俺の部屋。

俺の宝物はPCとゲームと本とフィギュア。

五月はマイエンジェル。これは、決定事項なり。

そんな俺は、ベットで眠っていたようだ。

少し頭がぼうつとするし、全身には酷く汗をかいている。

何か悪い夢でも見ていたのだろうか？首をかしげ思い出そうとする。
… 思い出せない。なら、大した夢じゃなかったのだろうか。
そう結論付け起き上がる。喉がすごく乾いている。

とりあえず水でも飲もう。部屋から出ようとドアノブに手をかけ

「ななちゃん」

声が出た。ドア越しのくぐもった声。

脳が停止したかのように、身体が停止する。

何も考えられない。頭が真っ白になる。

「ななちゃん。いるんでしょ？」

また声。聞くと同時に、脳が活動を始める。

瞬間、全身から冷や汗が噴き出る。

呼吸が乱れ、胸が苦しくなる。

脳に酸素が供給されず、脳の活動が妨げられる。

自分の力で立つことさえ難しくなり、

思わずドアにもたれかかりそうになるが、身体がそれを拒絶する。

まるで、ドアそのものが恐ろしい醜悪なものへと変容したかのように
錯覚すら覚え

「ななちゃん。いるなら開けてよ」
声。何も考えられない。

何も考えたくない。

脳が声も存在も拒絶しようとしているのに。
その声は邪魔をする。

ドンッ！！

「ななちゃん。開けて？わからないの？」
扉を強く叩く音。声は心底不思議そうに。
答えてはいけない。脳は警鐘を鳴らす。

ドンッ！！ドンッ！！

「ななちゃん。開けて。ねえ、開けてよ」
抑揚のない声。先程より強くドアを叩く。
答えたら、開けたらどうなるのか。
つれていかれる。

床にへたり込み、喘息のような荒い呼吸を繰り返す。

無音の時間が続く。ドアの向こうには気配。

心臓の音がうるさく感じられる。

心臓は早鐘を打ち、耳はドクッという心音で埋め尽くされる。

ドクッドクッドクッドクッドクッドクッドクッドクッドクッ
ドクッドクッドクッドクッドクッドクッドクッドクッドクッ
ドクッドクッドクッドクッドクッドクッ

「開ける」

ひくいおとこのようなこえ

ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！

肉を力任せに叩きつける音。ドアが軋む。

それに対して震えることしかできない。

段々とドアを叩く力が強くなっていく。

「ねえねえななちゃんあけてよお

あけてくれたらとつてもいいものをあげるよお

ほらほらはやくしないとむりやりはいっちゃんよお」

ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッグチャ、ダンッグチャ、グ
チャ グチャ

ドアを叩く音に柔らかな肉片をぶつけるような不快な音が混ざり始
める。

「ななちゃんななちゃんななちゃんななちゃん

あけてあけてあけてあけてあけてあけてあけて」

グチャ、ダンッグチャ、グチャ グチャグチャ グチャ

呪詛のように言葉を繰り返す。

ぶつかり飛び散る音。

声と音に怯えながらも、

頭のどこかで冷静に見ている自分がいた。

外の存在を恐ろしく思う理由は、相手が何なのかわからないからだ。

でも、本当にそうなのだろうか。本当はわかってるんじゃないのか？

頭に霞がかかったようにまともな思考が出来ない。

いや、出来ないんじゃないか？
よく考えればわかるはずだ。

だって俺をその名で呼ぶのは一人だったはずだ。
そう

「桜だよ。ななちゃん。そうですワタクシは

ななちゃんさまの妹君のさくら。さくらでございます

ななちゃんななちゃんいたいよくるしいよどうして

こんなひどいことをするのたのしいやめてやめて

ごめんなさいごめんなさいゆるさないもういや

もういやころしてころしてしんであはははははははははははははははははは

ははははは

うわああああああああああああああああああ！！

脳内が誰かの絶叫で支配される。

聞きなれた声。

気が付かない内にその絶叫は自分の口から発せられていた。

叫び続ける。次第に視界が狭まって行く。

完全に黒に覆い尽くされ、

暗転。

・
・
・

・
・
・

.....

.....

……どうやら俺は気絶をしていたようだ。

ぼうつとした頭を振り段々と思考がはつきりとしてくる。外にあの気配はもうない。いなくなったのか。

安堵の溜息をつく。ひよつとして夢だったんだろうか？ そうだよな。夢にきまつてる。あんなこと有る筈がない。きつと疲れていたんだ。と言い聞かせ。自らの頬を叩き、気合いを入れ前を見据え

「ななちゃん、みいつけた」

……気が付くと俺は、ベットで眠っていたようだ。

少し頭がぼうつとする。全身に酷く汗をかいている。

何か悪い夢でも見ていたのだろうか？首をかしげ思い出そうとする。

……思い出せない。なら、大した夢じゃなかったのだろう。

そう結論付け起き上がる。喉がすごく乾いている。

とりあえず水でも飲もう。部屋から出ようとドアノブに手をかけ

声

第八・五話 ななちゃん（後書き）

お読みになった方、駄文すいません。

少しホラーっぽくしたかったんですが、怖がりの作者はホラーをほとんど読んだことが無いのでこんな結果になってしまいました……。

第九話 転校生な君

今朝は色々と有ったが無事学校に辿り着いた僕。

下駄箱で靴を履きかえ、教室を目指す。

ぼんやりと考え事をしながら階段を昇る僕の顔は、自然と俯いていく。

ふと、暗くなつた気がして上を向く。

「千早…。おはよう…」

三階の廊下で待ち構えるように立っているのは千早だった。

僕が無事に登校している姿を見て、安堵したような表情を浮かべる。

千早は何も言わないがその心配そうな瞳を見るに僕の事を待っていたのだらう。

これは、大体一週程前から続いているため僕も驚いてはいない。

おそらく千早は、一週間前の出来事を気にしているのだらう。

今から丁度一週間前に僕と妹の鬼ごっこを目撃した千早は、

万策尽き、心折れそうな僕を守るように妹の前に立ちはだかった。

そのお蔭で僕は今こうしてここに立っていられるのだ。

千早には心の底からのお礼と、あの時見たことを誰にも言わないように懇願した。

千早は僕の身勝手な約束を守り、今でも誰にも話してはいないようだ。

そのかわり、毎日僕が無事に登校しているかを確認するようになった。

「千早、心配してくれるのは嬉しいが僕は大丈夫だから

そんなに気にしなくていいんだぞ？今はあの時のようなこともして

ないしな」

千早を安心させようと笑顔で話しかける。

今言ったことは半分嘘であり、半分本当である。

今鬼ごっこをしていないのは本当だが、もうじき再開するだろう。

大丈夫というのは…僕に言い聞かせるためだ。

千早はおそらく、まだ納得してはいないだろうが、

僕が本当のことを言わないのを察したのだろう。

僕にしかわからないであろう、寂しそうな表情を浮かべ踵を返す。

そんな千早の背中に僕は心の中で感謝と謝罪の言葉をかけた。

教室に辿り着いた僕は真っ先に自分の席を目指す。

席についた後、僕が教室に入ってから感じていた視線の方を見る。

千早と眼が合う。色々な感情を押し込めた瞳は僕を責めているように、

思わず僕の方から目を逸らしてしまった。

そのことに千早が傷ついているなんて知りもせずに…。

「ねえねえ五月君。知ってる？」

三十秒で三月処理を済ませた僕に話しかけてきたのは、うずうずした結だった。

「いきなり、知ってるかと聞かれてもな。はっ！これは知らない僕を馬鹿にして

いじめるための質問なんだな！結はなんて酷いんだ！」

「なんと！転校生が来るらしいよ！」

試しにボケてみたが完全にスルーされた。恥ずかしい…

・・・それにしても、転校生か。ひょっとして朝に合ったあいつじゃないだろうか。
お約束の展開としては使い古されているが、可能性としては無いでもない。

あの別れ方からすると、入ってきた転校生が僕を見て驚き、あつ！君は朝の！

とか言ったりする展開が予想される。問題は相手が男という点だな。等と冗談を考えていると予鈴が鳴り、先生が入ってきた。

「あゝ、もう知っている奴もいるかもしれないが今日は転校生がいる。」

それじゃあ、入ってきていいぞ」

ドアが開き現れたのはまさしく僕の冗談に当てはまる存在だった。

まさか実現するとは思わず、先生の説明も、転校生の自己紹介も耳に入っていない。

「じゃあ、席はあそこにいる春野の隣だぞ」

転校生にざわつく教室を堂々と歩き僕の隣にやってくる。

何と言っていていいかわからない僕に転校生が挨拶をする。

「ウホホ！」

転校生は完全無欠なゴリラだった。

確かに朝に出会ったけれど、何か違う気がする。

そもそも、僕とゴリラの仲はゴリニング・ゴリザード（通称G・G）をかました奴と

かまされただけの間柄だろうが。あれか、パンをくわえた少女とぶつかる的な展開だったのか？

というか僕の隣ってことはこいつ女だったのか。なら、手加減しておけば良かったな。

ん、でもヤンキー達はこいつを兄貴と呼んでた気がするんだが…気づいてないのか？

いや、それ以前に全裸はどうなんだよ。動物でも学校来るなら着衣は常識だろうが。

っておいっ！何、手で胸隠してんだよ！みてねーよ！いや、見たけど興味ないから！

何で教室の女子たちは僕を変態でも見るかのような冷たい視線を向けてんだよ！

「五月。見たいのなら私のをいくらでも見せてやるぞ？」

変態はだまつてる！教室内の僕への視線が男女共に悪化しただろうが！

「五月君は大きい方がいいの…？」

違うから！大きい好きだけどゴリラは対象外だから！（必死）

それにゴリラがメスって伏線も全く無しでいきなりヒロインの座を
かっ攫うのはどうかとおもうよ!?

あと、ゴリニング・ゴリザードってボクが言ったのって近かったん
じゃん!やった!って喜んでる場合じゃないよ!

名前とかルビ振ってたし出すならちゃんとした役どころにしてよ!
ひよつとしてって期待した人に土下座しろよ!

えっ、そんな人いない...?で、でも視点だってボクで丸々一話使っ
てたし、せっかく出したんなら、

使ってあげないと可哀想っていうか...。だって、だってボクも九話
出れるんだってすごい楽しみだったし、

春野君になんて話しかけようとか、一緒にお弁当とか食べたりにして
仲良くしたかったのに...出番すらないなんて

...うつく、い、いっぱい...かんがえて...た、たのしみで
...ひつく...ぎたいじてながら...ぐすっ...

こんだ...ごんな...あづかいつでじらなくて...ひつく...ボ
ク...ボク...ふぁ...」

「...元気だせって。まだ、終わった訳じゃないだろ?それに僕も要と
仲良くしたいしな」

「...!は、はるのぐううん!...う、うん。い、いっぱいながよ
ぐじようねえ!うわあああん

はるのぐん!はるのぐうん!」

「...それでは十話でまたあいましょう」(どうしよう...泣きやま
ないどころか悪化してる...)

第九話 転校生な君（後書き）

この小説のPV？（総表示回数？）が10000突破したみたいで
す。

こんな変な小説を読んでくださった読者様。本当に有難うございま
す。

今、同時に別の小説も投稿しているので、おそらく更新回数が一日
二回程度になると思います。

出来る限り早く更新するため頑張っていきますので、今後もよろし
くお願いします。

第八く九話裏 お嬢様

早朝のとある道をワタクシ 剛田ごうだ 五里子ごりこは優雅に歩いてた。

両脇には由緒ある名家に生まれたワタクシの気品に惹かれた二人の騎士ナイト。

ワタクシレベルになると、男性は何も言わずともワタクシに従い傅き守ろうとする。

ふう、ワタクシの美しさはもはや罪ね・・・

「お前が良き指導者になるためには足りないことが有る。それは下々の者達を理解するということだ」

そう仰ったお父様は、ワタクシを下々の通う学校に転校させることにした。

お父様の仰る事に間違いなんてある筈がないけれど、それに納得いかないのはワタクシの未熟さ故かしら？

そんな今日の空は雲ひとつなく青く澄みきっている。

遮るもののない太陽の陽光が降り注ぎワタクシの肢体を暖めていく。そんな太陽の光は体だけでなくワタクシの心をも明るく照らしている。

なんだか鼻歌でも歌いたい気分だ。自然と頬は緩みそうになる。スキップでもしてみようかしら？

まあ、高貴なワタクシがそんな、はしたない行為をする訳がないけれど。

それでも、なんだか今日はとてもいいことが有る、そんな予感がする…

ワタクシがそんなことを考えていると前方からスキップをしながらこちらへ来る少年が見えた。

見た目通りの子供じみた行動に思わず笑ってしまいそうになる。
そんな少年とすれ違う瞬間、後ろから何かが軽く当たる感触。
どうやら、少年の服の裾が少しかすったようだ。
心優しいワタクシは態々そんなことに目くじらを立てたりはしない。
しかし、それを目敏く見つけた騎士達ナイトには違ったようだ。

「おい！ガキ！何うちの兄貴にぶつかっておいでシカトしてんだよ
！」

兄貴とはワタクシのこと。

以前に沢山の屈強な人達に囲まれていた彼らを助けて以来そう呼んでいる。

何度、お嬢様と呼ぶように言っても聞かないから、今では諦めてい
るけれどね。

「え？え、えっと、その…：すいません」

少年は怯えながらも、納得いかないように謝った。

…なんだか、ちらちらとこちらを見ている気がする。

ひょっとして、一目惚れかしら？

「謝ってすんだら、警察はいらないんだよ！」

確かにそうだけれど、警察沙汰に成る程のことではないわね。

「おいくあるあ…！こんがきやあどこ見て歩いてんだよ！ああん！
！」

「餓鬼だからって容赦すると思つたら大間違いだぞ。ゴリアー！！」
しつこく少年に絡む騎士達ナイト。

…そろそろ止めないと不味いわね。

(ちょっと！貴方達、もうお止めなさい！)

「うおううい！ぬうわぬういスイクアトウすいとえんどあよう！
」

「俺が容赦するのはお年寄りだけじゃあい！！なめんなよ！！」

…全然、ワタクシの話聞いてないわね。
怒ってはだめだ、心を落ち着けよう。

ワタクシはバナナを取り出し食べ始めた。
高貴な者のみ食べることを許される果物バナナ。
それを食べることで、自らの気品を高め、心を穏やかにする。

「
x！ x x ！！」
「俺のおじいちゃんはすごいんだぞお！！ゴルア」

…まだ、心が落ち着いてない気がする。
もう一本食べましょう。

そうやって、夢中でバナナを食べていると、
突然、騎士^{ナイト}が宙を舞った。
何事かと思い、バナナから目を離す。

ワタクシの周囲から音が消えたように感じられた。

そこのいたのは銀髪の少年。

何か呟いた後、少年はゆっくりと俯いていた顔を上げる。

ぶつかった少年の美しい緑の光に、心臓を鷲掴みにされたような錯覚に陥る。

「うざいんだよ!!このゴミどもがあ!!」

そう、恫喝して騎士達ナイトに立ち向かう少年。

戦う少年の流れるような動きは舞を踊っているかのように美しかった。

少年の一つ一つの動作に目を奪われ、瞬きすら惜しまれる。

「くっ…こいつ強ええぞ!?!」

見惚れている場合ではない。騎士達ナイトのためにも止めなければ。

(…待って!!)

「…ア、兄貴!…:…わかりました、不甲斐無くてすいやせん…」
何か通じていない気もするけれど、下がってくれたので問題ないだろう。

とりあえず、少年には非礼をお詫びしよう。

部下の不始末の責任は上に立つ者がとるべきだから。そう思っているとき、

(ええええええええ!!)

いきなり接近してくる少年。

天使のように整った少年の顔が近づき、ワタクシの胸が高鳴る。

そのまま、少年は

ワタクシの膝に足を乗せ、

顎に膝蹴りを加えた。

衝撃に薄れる意識の中、初めての経験になぜか心昂っていた。

意識を取り戻したワタクシに心配そうに寄ってくる騎士達^{ナイト}。彼らは少年に報復しようと勧めてくる。

しかし、ワタクシはそれをきっぱりと拒絶した。

ワタクシはいままで、蝶よ花よと育てられ大事にされてきた。

だから、少年に傷つけられたとき、痛みだけでなく見えたものがあったのだ。

それが、きっとワタクシに足りないもの。

ワタクシは思う。もう一度少年に会いたい。

そうして、少年の傍にいればワタクシはもっと高みを目指せる。

少年とならどこまでも…。

とりあえず、学校が終わったらすぐに少年を探そう。

そのためにも、こんな学校でぐずぐずしている暇はない。

転校先に着き、騎士達^{ナイト}と別れたワタクシはそのことだけを考えていた。

「あゝ、もう知っている奴もいるかもしれないが今日は転校生がいる。」

それじゃあ、入ってきていいぞ」

教師の言葉に応じ教室に入り、中を見渡す。

(うそ…)
いた。今朝の少年がそこに。

少年は驚いたような表情でこちらを見ている。

でも、ワタクシは少年に驚いたことを悟られたくなくて、無理に笑顔を浮かべた。

胸の鼓動が治まらない。

(ワタクシは 剛田 五里子と申します。これから、よろしくお願
いします。)

教師が自己紹介を進めるのに応じる。

しかし、この言葉はたった一人に向けられている。少年への宣戦布告。

「じゃあ、席はあそこにいる春野の隣だぞ」
少年の名前は春野というのか。

少年に近づこうとするが緊張で足が震えそうになる。

なんて、話しかけよう…

こんなのは初めてだ…
でも、嫌な気分じゃない。
むしろどこか心地よくすらある。

この不思議な気持ちはまだわからないけれど、

負けたくないと思った。

この気持ちにも、少年にも。

だから、その思いを少年に伝えよう。
たった一言で十分だ。

(これから、よろしくねっ！)

「……なに……これ……どうして、ゴリラをそんなに優遇して
るの？他にもヒロインがいるのに

一番最初の裏話がゴリラなの？もう、ゴリラルートで確定なの？そ
もそも、ゴリラがお嬢様キャラって、

五月君視点じゃ殆ど生かせない設定じゃん……。しかも、話の流
れがメインヒロインみたいな扱いに

なってるよね……。そりゃさ、男のヒロインよりは女の子の方が
いいのはわかるよ。でも、ゴリラじゃん。

ヒロインゴリラじゃん。別にゴリラを馬鹿にしてる訳じゃないけど、
ヒロインにゴリラ抜擢はどうなの？

……もう……いや……どうせボクには出番なんてないんだ……
……もう……いつそ……」

「は、早まるな！要。これは十話じゃないから、チャンスはある。

諦めちゃだめだ！」

「…そう言っておきながら、春野君もゴリラの方がいいんじゃないの？お金持ちみたいだし…
ボクのことなんてどうでもいいんでしょ…？ゴリラまで魅了するなんてもてだね…」

「いやいや！僕の尊厳のために言わせてもらうがゴリラは対象外だから！」

「…ボクがどうでもいいってのは否定しないんだ…」

「ち、違うって！僕、要の事気になってるから！」

「ほんと？しんじて…いいの…？？」

「ああ」（いつか、飛び降りとかしそうだし）

「は、春野君…」

「…ガンバ」（僕ガンバ…）

第八く九話裏 お嬢様（後書き）

初めはもつとぶつ飛んだヒロイン沢山出そうって思ってたんですけど、現段階で既に收拾のつかないことに・・・
三月とか、とりあえず適当に処理しとけばいいや的扱いになってますね。

第九・五話 春野 五月（前書き）

シリアスです。ラブもコメも一切有りません。
お読みになる方はお気を付け下さい。

第九・五話 春野 五月

ゴリラとのハプニングイベントにより限りなく零となった僕の体力。

本当に今日は鬼ごっこがなくて良かった。もし有ったら確実に逃げきれなかっただろう。

早く家に帰って、その後はシャワーを浴びてご飯を食べて、すぐに寝よう。

そう考え少し足を速める。

沈みゆく夕日。僕を背後から照らし僕の分身を伸ばしていく。

時が経つにつれ段々と夕日が沈みゆき、生まれる闇が僕の分身を消してゆく。

それが、僕に嫌な連想をさせる。必死に拭い去ろうとするも消えない。その幻想。

まるで、見えなくなった影が助けを求めるかのように。

気がつけば走り出していた。それは最早不安ではなく確信。

僕の半身が呼んでいる。助けてくれと。

家が見えてくる。靴を脱ぐのすらもどかしく、そのまま七月の部屋へ。

「七月っ!!!」

僅かに開いた扉から地面に横たわる七月の姿が見える。

最悪な事態が僕の脳裏に浮かぶ。

そんなはずない！信じるものか！

「七月！おいっ七月！！」

僕の必死な声に七月の体が微かにだが反応する。

僕は近づき七月を抱き起こす。

体が冷え切っているが、無事なようだ。

一先ずは安心だ。

「・・・あ・・・う」

苦しそうに呻く七月。

「七月？大丈夫か？しっかり・・・しろよ・・・お前に死なれたら・・・僕は・・・」

安心した所為か今まで抑えていたモノが溢れそうになる。

心に秘めたものは何一つとして七月に言う訳にはいかないというのに。

そんなことを考えていると七月が口を動かし何か話そうとしている。あまりに小さな声に耳を近づける僕。

「な・な・・・っ・・・き？だ・・・れ？」

不味い。不味い。不味い。

本当に最悪の事態になりかねない。

「しっかりしろ七月！お前はこの僕、五月の双子の兄の七月だろうが！

そんな、大切なことぐらい覚えておけよ！この馬鹿！」

絶望で泣きそうになる。こんなところで終わってしまうなんてそんなこと許せるはずがない。

僕のせいなのか？

出来もしないことを一人で背負った気分になって結局大切な人も守れやしない。

僕の視界が歪む。

だめだ。ここで諦めちゃだめだ。

だけど、あの時一度心折れてしまった僕は、もう僕足りえなくなっていた。

そうだ一人では何も出来ない、昔の

「・・・ない・・・て・・・るの・・・か？なか・・・ない・・・で・・・くれ・・・

お・・・れの・・・だ・・・いすき・・・な・・・さつ・・・き

ずるいと思った。

普段は情けないのにこんな時だけお兄ちゃんになるんだ。

もう、大丈夫だった。一人じゃないってわかったから。背負うものの重さを思い出したから。

もう二度と負けたりしない。

「・・・誰が泣くか、バーカ・・・苦しいんなら寝てろよ。・・・僕はもう大丈夫だから・・・さ」

僕がそう強がりと言うとすべての力を使い果たしたかのように七月の身体から力が抜け、規則正しい呼吸に戻る。どうやら眠ったようだ。

七月をベットに横たえた僕は自分の部屋を目指す。家に入った時からずっとあった気配。

その気配はずっと僕の部屋に留まっていた。

僕は七月を優先したが、元凶に会っておかなければならない。僕のくだらないミスでこんな事になってしまったんだ。

久しぶりの平穏な日常に安堵し確認を怠った僕。二度と失敗しないよう確認しなければならぬ。

部屋の扉の前に立つ。
ゆっくりとドアノブを回し扉を開ける。

そこに立つのは一人の天使。

「桜……」

「……うん。会いたかったよ」

今にも泣きそうだけれど、笑顔を無理やり作り僕に笑いかける桜。

「……どうして、こんなことになっちゃったんだろっね……？」

皆、好きな人の事を一途に思っていただけなのに。

どこかで、その歯車が狂っちゃったのかなあ……？

やっぱり全部、桜がいたからだよね……桜がいなければ……」

いまや笑顔を作ることさえできず、必死に泣くのをこらえる桜。

僕はそんな桜を見るのが辛かった。

「…お前だけのせいじゃない。結局何も出来なかった僕も同罪だ。桜だけのせいである筈がない…」

これは嘘ではなく僕がずっと思っていたことだ。弱い僕が全ての元凶。七月も桜も被害者だ。

「…桜はね、ずっと、ずっと思ってたの。

桜の大切な人を傷つける存在なんていなくなってしまうばいって。そう桜は思ってたんだよ…」

顔を俯かせ、神に祈るように指を組む。

「だから、ずっと、ずっと桜はお兄ちゃんが憎かった。殺したかった。

お兄ちゃんもお兄ちゃんが憎いよね？ころしたいよね？

わたしはしんでしまうべきだとおもうよ。あんなことをするひとはあんな、ひどい

「だまれっ！！」

言葉を遮り、僕は睨みつける。

僕は桜の姿に言葉に気を緩ませてしまった。

こいつの話に耳を傾けては駄目だった。

こいつはもう僕の知っている桜じゃない。

甘言を弄す存在。僕の敵だ。

「明日からはまた賭けの続きだ。賭けに勝ったときの約束はわかってるな？」

先程までの話を切り上げるため強い口調で話す。

「そういつおにいちゃんも、わかってるよねえ？もしまけたら…うふふ」

心の底から楽しそうに笑う。僕の神経を逆撫でする表情。虫唾が走る。

「…ああ。負けるつもりは毛頭もないがな」

これ以上こいつと同じ空間にいるのは耐えられない。

僕は踵を返し部屋から出ようとする。

「そう。じゃあ、あしたたのしみだねえ。やめてもいいんだよお？」

「つつ！」

ふざけるな！そう言おうと振り返ったが既に影も形もなくなっていた。

「ふざけるな…僕はもう諦めない、二度と諦めたりするものか…！」
誰もいなくなった部屋で一人決意する。
前以上に強い決意を。

強欲だと言われようが僕が全て元通りにしてやる。

もうあの時の僕とは違うんだ。

泣き虫で無いものねだりをしていた僕じゃない。

春野 五月はそんな弱い存在じゃない。

例え死んだとしても、何度でも蘇ってやるさ。

僕が勝つその日まで。

第九・五話 春野 五月（後書き）

どうしてゴリラのすぐ後がシリアスっぽい話なんですかね。勢いと思いつきだけで書くとこんな感じになります。

二話でシリアスっぽく書いたせいで、今、物凄く困ってます。

更に新しい連載始めたので更新がもっと遅くなるかもしれないです。本当に飽き性ですいません。一応完結目指して頑張ります。

第十話 日常の要

所はいきなり学校。

ぼんやりと、今日の朝の出来事を考える。

七月はもう元気っぽかったし、鬼ごつこの結果もいつも通り半分は勝ちといったところ。

まあ、最悪の結果は免れたから良しとしよう。と、無理やりポジティブに考える僕。

そうでもしないとやってらんない。

三月で憂さ晴らししないとやってらんない。

今日も三月はよく燃える。燃える燃える。ふはははは。

なんだかんだで三月の事は嫌いじゃない。下衆な僕。

ちよつとしたキャンプファイヤー気分を味わい大満足な僕は教室に戻り席に…

物凄く着きたくない。

隣に物凄く積極的な野生動物がいるからだ。

いつも、ちらちらとこちらを伺っており、そちらを向くと慌てて眼を逸らす。

お昼の時間には、そっぽを向いて照れたように僕にバナナを渡す。

帰りはもじもじしながらも一緒に帰ろうとする。

…何この主人公に思い寄せるヒロインのような立ち振る舞いは。ここまで好意が丸分かりなのも珍しい。

でもゴリラ。どうやって見てもゴリラ。何があってもゴリラ。

触手があるのが、首が長かるうが、変態だろうがまだ許せる。

でもゴリラは何か駄目だ。生理的に無理だ。

ひょっとしたらトラウマでもあるのかもしれない。

だから、席に着かず時間を潰す。

とりあえず、結が一番話しかけやすい。

それに今は癒しが欲しい。

「おはよう、結」

結に、にこやかに挨拶する僕。

「……」

なぜか無言のジト目で睨まれる。

「…えつと、きよ、今日もいい天気だな…」

こ、こんな日はキャンプファイヤーに限るな、なんちゃってー…」

重苦しい雰囲気になんて耐えきれず放った、僕渾身のボケは舌うちで返された。

うう、そんなキャラじゃないだろう結…

「…昨日はずいぶん剛田さんと楽しそうだったね。」

剛田さんにデレデレしちゃってさ。

五月君は結局、三月といい、剛田さんといい大きければそれでいいんだね…！ふんっ」

つてもものすごい誤解してるから！ぜんぜん違うから！

大きければいいってものじゃないから！三月のはともかく、

ゴリラは対象外だから（二回目）！形とかちゃんと拘りあるから…！

いやいやいや！大きい方が好きって訳じゃないから！

大は小を兼ねるっていうけど、小には小の味があるから…！

それは、それでいいから！！むしろ…
ち、違うつて変な意味は一切ないから！
そ、そう！結は可愛いからそんなもの必要ないんだよ！
結は滅茶苦茶可愛い！くりくりした目とか、ふわふわな髪とか、
柔らかそうな唇とか、長くて便利な首とかすごい好みだから！

その後、結の可愛らしさを語り続け、結の機嫌は回復したようだ。
代償として、教室中からゴミを見るような視線をいただくことにな
った…

予鈴が鳴ったのでしぶしぶ席に戻る僕。

…こつち見んなゴリラ。

「おつす〜。皆元気かー」

教師にしては軽い挨拶で教室に入る 木田^{きた} 木田男^{きたお}（独身）
僕らの担任であり、基本適当人間だ。

「実は昨日もう一人転校生がいたんだがすっかり忘れてた。

つてわけで、はいつてこーい」

忘れてたつて酷いにもほどがあるだろ…

木田（呼び捨て）は滅茶苦茶適当に転校生を呼んだ。

入ってきたのは

昨日の朝、ヤンキーから助けた斎賀 要だった。

…ゴリラの次だと何の驚きもない。
教室の生徒も特にリアクションは無い。
その上、木田には忘れ去られていた。

少し哀れだ。

しかし、そんな転校生は物凄く、にこにこしていた。
今日こそが人生最良の日であるとも思っていていそうな満面の笑顔。

「どうも〜。ボク斎賀 要です。よろしくねえ〜」
…こんなキャラだったか？

「…あゝ、席はあそこの春野の後ろだから」
木田も珍しく若干引いてる。

転校生はスキップしながらこっちに近づいてくる。
…手が皆にぶつかってるぞ。

僕の後ろに座る転校生。

…何だろっ後ろからすごいプレッシャーが。

「また会ったね、春野君。ボクの事は要って呼んでね。これからよろしく。ふふっ」

耳元で囁く要。背筋がぞくぞくしていた。

……こいつ何か怖い…。

第十話 日常の要（後書き）

ここからはなるべくラブコメを維持しつつ新ヒロインを増やそうか
と思つてます。

基本文章力があれなんでキャラでカバーです。

カバー出来てなくても気にしません。

次は十一話になると思います。頑張ります。

「どうしたの…？ほらっ、行こうよ」

な、何で僕の腕をつかむんだよ！

まずい。このままじゃ…

「春野五月。何を教室でいちゃついているのですか。とても不愉快です」

そう言って近づいてきたのは我らが委員長 つねの 剣野 かおる 薫だ。

切れ長の鋭い瞳に、艶やかで長い黒髪を一本に束ねた剣野は、女子に多大な人気を寄せている。

今の僕にはそんな剣野が救いの女神のように見えていた。

「って、全くいちゃついてないから！お前の目はどんだけ節穴なんだよ！」

とりあえずこの事態から抜け出そうと剣野に予先を変える。

だけど、安心した僕は剣野がどんな人物かということを失念していたのだ。

「…へえ、随分失礼な物言いですね。以前から目に余るとは思っていましたが

どうやら矯正する必要があるそうですね。春野五月…それでは覚悟して下さい」

まずい。さっきとは全く違う危険地帯に足を踏み入れてしまった。

こいつは以前から僕の事を目の敵にしており、

事有るごとに矯正だ何だと言って僕に襲い掛かってくるのだ。

厄介なのは

どこからともなく現れた巨大な剣。

剣野の背丈ほどもある大剣が何もない空間に突如現れる。それを手にした剣野は僕目掛けて大剣を振り下ろす。

「つつ!? 殺す気か!」

後一瞬でも反応が遅れていたらあの世行きだったぞ。

現に風圧だけで吹き飛ばされそうになる程の剣速だった。あれが直撃していたらと思うとぞっとする。

「安心して下さい。峰打ちです」

…完全に刃のほうだったぞ。

それに、そんな馬鹿でかい大剣だったら峰でも死ぬぞ。

ぼやぼやしてる暇はない。

休み時間が終わればこいつも諦める。

それまでは逃げなければならぬ。

風圧を利用し後方に跳躍する僕。

着地した足を軸に身体を回転。目指すは教室の扉だ。

「逃がすと思いますか。この私が。あなたを」

逃げなきゃ死ぬだろうが!

教室の机の上を器用に飛びこちらに向かってくる。

しかし、扉の前まで接近していた僕は勢いそのまま転がりながら外に飛び出す。

剣野は僕以外に損害を与えないよう気を付けているため、馬鹿みたいに大剣を振り回すことはない。

今、剣を振るえば確実に教室の扉は破壊される。その一瞬の隙を突いて起き上がり、階段に向かう。

一直線の道や、何もない空間では身体能力の差でこちらが不利だから、なるべく曲がり道の多く、障害物の多い道に行く必要がある。

以前男子トイレに逃げ込んだら、更なる怒りを買ったことになった。なので、純粹に時間一杯を逃げ切る必要があるのだ。

階段を飛ぶように降りる僕。少しでも距離を稼いでおかないと死に繋がる。

しかし、剣野は階段の手すりの上を走っている。

下手したら落ちるかもしれないというのに全く気にしていないようだ。

なんとか一階分下に降りた僕。視界に剣を振る剣野の姿。咄嗟に壁の陰に隠れる。壁を傷つけないよう剣を止める剣野。

こうすれば、ほんの数コンマ一秒は時間が稼げる。その差が後々響いてくるのだ。

よしっ、目的地に辿り着いた。部室棟だ。

ここは様々な部活のよく分らないものが所狭しと乱雑に置かれている。

しかし、剣野との追い駆けっことで幾度となくここを訪れる僕は配置を把握している。

それは剣野も同じだが、逃げるだけの僕は障害物を利用できる。

そのまま地の利を生かし、着かず離れずの距離を保てば僕の勝ちだ。

…まあ、剣野が飛び道具を使わないこと前提の考えだが。

何分経っただろうか？未だ予鈴は鳴らず剣野も追いかけてくる。

全力疾走で障害物を避けながら移動するのは普通に走るより何倍も苦しい。

そろそろ、予鈴が鳴ってもおかしくないんだが。
そんな風に考え事をしながら走っていたのがまずかった。
突然何かに足を取られる僕。転倒しないように手を付くことは出来
たがそれだけだ。

不味い早く起き上がらないと、

剣野が僕に肉薄する。

剣を振り上げ

僕目掛けて振り下ろし

予鈴の鳴る音。

剣は僕の髪数本を散らしただけで運動を停止した。

「!……」

本当に死ぬかと思った。

今回は死んでもおかしくないほどの失敗だった。

ただ、僕の運が良かったただけだ。

「…春野五月」

剣を突き付けたまま無表情で僕を見下ろす剣野。

言うべきかわざるべきかを迷うかのように口を嚙む剣野。

あの、剣野が迷う姿なんて初めて見たかもしれない。

「…どんな悩み事が有るか知りませんが、あまり溜めこむのは

良くないと思います。もし私で力になれることであれば構わず相談

して下さい。

そのための、委員長と言う役職ですからね。

…それでは予鈴も鳴りましたし急いで戻りましょう」

言うや否や背を向け歩き出す剣野。

実際、剣野は僕に対してだけ沸点がおかしいだけで普段は責任感が強く、とても頼れる存在なのだ。

ちよっとおかしいのは僕限定なのだ。本当にそれだけが悔やまれる。

……

「どうしたのですか？授業をサボタージユするのは許しませんよ。中々立ち上がらない僕を如何わしそうに見る剣野。」

言うべきか言わざるべきか。

まあ剣野も言ったんだ。僕だけ言わないのはフェアじゃない。

「…腰が抜けた」

…そう。恥ずかしながら先程のショックで腰が抜けて立てないのだ。

「はあ…」

呆れたように溜息を吐く剣野。

言わなきゃよかった滅茶苦茶恥ずかしい。

そんな剣野は剣を放り僕に近づき背を向け屈む。

「？」

「…早く乗ってください。授業に遅れます。」
「…どうやらおぶされと言っているようだ。」

「いや、でも剣野におぶさるのは…」

「私におぶさるのはそこまで嫌ですか…！」

「やばい、違う意味にとられてる。」

今にも再び拾い上げた剣で僕に切りかかりそうだ。

「ち、違って、剣野も女の子だし僕をおぶるのは嫌じゃないかってことだよ」

「…そ、そうですか」

顔を背ける剣野。納得してもらえたのだろうか？

「言いたいことはわかりました。早く乗ってください」

わかってねえ！そう抗議しようとした瞬間、僕の首に剣を当てる。

「折角拾った命ここで散らしたくないですよね？」

やっぱり、殺す気だったのかとは言わず一も二もなく首を縦に振る。

「よつと。それでは急ぎますよ」

僕を背負った剣野は物凄い速度で走りだした。

僕の顔に軽いGがかかり意識が少し飛びそうになった。

だから剣野の

「…女の子、ですか。そう思っているなら

もっともっと私の事を意識して欲しいですね…」

なんて言葉には全然気付かなかったんだ。

その後教室に着いた僕は再び要の恐怖と戦うことになった。

今日の鬼ごっこはやばいかもしれない…

結局ネガティブな僕だった。

第十一話 剣聖（後書き）

この作品の総表示回数が20000回を越え、ユニークアクセスも5000回を突破しました。

こんな小説を読んでいただいている読者様には頭が下がる思いです。本当に有難うございます。

これを励みにこれからも頑張らせていただきます。

「いつ誰だっけ?」と思ったら見てください。(前書き)

五月のイメージが崩れるかもしれないのでお気を付け下さい。

こいつ誰だっけ?と思ったら見てください。

登場人物紹介

そろそろ登場人物が色々いて作者も名前を忘れそうになるので

読者様は尚更だろうなと思い作ってみました。

プロフィール、設定などで、今後の話のネタバレ(大したものはない)は書きません。

こいつ誰だっけと思ったらここを見れば分かります。

・春野 五月 はるの さつき (始まりの夢)

主人公です。基本へたれですが女の子には優しいです。三月は論外です。

何となく銀髪、緑眼にしました。身長は160ぐらいで顔は女顔。

乳マニアです。初対面の方はまずは乳チェックからはいります。

・春野 七月 はるの ななつき (始まりの夢)

五月の双子の兄です。見た目は五月とほぼ一緒に髪だけが白髪です。ちよつとオタクぎみで五月ラブです。

・春野 桜 はるの さくら (第一話 狂妹)

五月、七月の妹です。見た目は天使のようで、

金髪、青眼です。スタイルは出るべきところはきちんと出て、

締まるべきところは引き締められています。身長は155前後です。

これ以上は書くと危うい話ばっかです。謎の有る妹。

・叶野 三月 かのう みつき (第三話 痴情の戦女神)

五月のクラスメートです。基本痴女です。胸はもはや犯罪クラス。

五月は初めて見たとき神に祈りを捧げました。身長は175前後ぐらい。

長い黒髪と黒の吊り眼です。見た目は(戦)女神のように美しいはず。

親衛隊とか出来る位です。ものすごい耐久力と再生能力を持っています。

・三上 結 みかみ ゆい (第四話 小さな癒し)

五月のクラスメート。精神年齢は一応年齢通りです。少し無防備。

身長は120ぐらいですが首の長さが130あるため全長は250ぐらいになります。

少しカールした短めの薄い桃色の髪、同色の瞳です。可愛い系。

ぺったんこですが五月的には有りか無しかで言えば大フィーバーです。

・磯木 千早 いそぎ ちはや (第五話 僕を捕える君)

五月のクラスメート。無口、無表情。五月以外とはコミュニケーションをほぼ取りません。

身長は五月とほぼ同じ。肩口まである黒髪、黒眼です。顔は奇麗系。スタイルは平均的。

十本の太く長い触手がお腹あたりから生えている。本当はこの触手を使って五月に

色々したいが嫌われたくないので我慢している。

・ 剣野 薫 つるぎの かおる (第十一話 剣聖)

クラスの委員長。責任感強く頼れる委員長。でも五月には切れやすいです。

身長は165程度。三月よりは少し短い黒髪をポニーテールに。黒眼です。

着やせするタイプ。五月にはお見通しです。いつでも大剣・タイケーンを呼び出せる。

・ 剛田 五里子 ごうだ ごりこ (第八話 黄昏の君)

五月のクラスの転校生。席は五月の隣。性格はお嬢様故気高いです。身長は大人のメスゴリラぐらい。見た目ゴリラ。全裸。

・ 木田 木田男 きだ きだお (第八話 黄昏の君)

五月のクラス担任。いい加減な性格。独身。

身長は185ぐらい。たぶんほとんど出番ない。

・ 斎賀 要 さいが かなめ (第八話 黄昏の君)

五月のクラスの転校生。席は五月の後ろ。性格は少し天然。

身長は155ぐらい。見た目は少し幼い以外は普通。

頭の中は五月とどうやって仲良くしようかということしか考えてない。

五月はそれを敏感に感じ取りプレッシャー として認識している。

これで以上ですかね？

たぶんまたキャラが増えたら作ると思います。

それでは次のお話でお会いしましょう。

こいつ誰だっけ?と思ったから見てください。(後書き)

初めは五月が延々と胸について話すというおまけを考えていたんですが

書いていてこれは無いと思い、大体200文字くらい書いて挫折しました。

大体、一人が胸について熱弁をふるう話の何が面白いのでしょうか。しかも主人公です。

本当に馬鹿ですいません。精々話の途中に折り込むぐらいにしておきます。

第十二話 運命に抗う者達（前編）

剣野に背負われたまま教室にインした僕。

結果、教室中の剣野ファンの女子達から凄い目で睨まれました。

結や千早も剣野ファンだったのか…

もはや、休み時間は僕にとって一切休める時間ではなかった。

隣のゴリラ。後ろの要。最近機嫌の悪い結。なぜか切りかかる剣野。

三月の存在自体。

それらが休み時間に襲ってくるのだ。心安らく暇もない。

今の僕の救いは教室には無い。

そうだ、お外に行こう…

この学校は基本どの場所にも、時間に関わらず必ず誰かがいるのが常識だ。

しかし、その唯一の例外を僕は知っている。

疲れ切った身体を休めるため僕だけの楽園^{エデン}を目指す。

そう、屋上ならきつと…

階段を上り切り屋上の扉に手を掛ける。

一思いに扉を開けはな

「あつ、五月君！奇遇

つことはなく逃げ出す僕。

神は死んだ。

もはや、僕に安息はない。

楽園^{エデン}は、悪い蛇に毒されてしまったのだ。

僅かな希望をも失い、ふらふらと当て所もなく歩く。

廊下の曲がり角に差し掛かった時に、ふと思い出すことがあった。

この先には確か開かずの間があつたはず。

当然開かずの間な訳だから人がいる筈がない。

いつそ扉を破壊して

「五月先輩？」

突如、背後から声をかけられる。

「はいっ！ すいません、そんなこと全然思つてません！ 嘘です！」

「……えつと、何のことですか？」

思わず驚きで訳の分らないことをのたまつた僕を訝しげに見る少女。

僕を先輩と呼んだ事からも分かる通り、少女は一年の後輩だ。

名前は 米良^{めい} 依緒^{いお}だ。当然火が出たり、爆発^{いお}したりはしない。

小さな身体に似合わない大きめの胸と、長めの茶髪を左右に括つて
いるのが特徴だ。

僕にとっては特別な後輩であり、気の置ける存在だ。

「今のはね、僕以外には見えない精霊達とお話をしていたんだ」

何とか誤魔化そうと僕お得意のメルヒェンボケを炸裂させる。

抱腹絶倒のボケに笑いすぎた後輩は記憶障害を起こすこと間違いな

しだ。

「あはは、先輩は今日も面白いですねえ〜」
間違いだらけだった。

しょうがないなあ先輩はもう、的な感じの笑いだった。
所謂、愛想笑い。

なんだよ、精霊って…小人さんにしてあげば良かった。

「ところで、先輩はどうしてこんな所にいるんですか？

この先には開かずの間ぐらいしか無いと思うんですけど…」
反省していた僕に依緒が不思議そうに尋ねる。

別に依緒なら話しても問題ないと判断した僕はこれまでの経緯を話
す。

「なるほどお〜。あつ！それなら一緒に行ってみませんか？
ひよっとしたら開いてるかもしれませんよ」

普通はそんな都合よく開いてるはずはないが、
丁度いい時間潰しになりそうなので依緒の案に乗っかる僕。

そのまま開かずの間を目指した僕たちは、
少しだけ期待しながら開かずの間の前に立っていた。

「なんだか、ドキドキしますねえ〜、先輩。

それじゃあ、開けてみましょうか」

そう言っただけに手を掛ける依緒。

固唾を飲み見守る僕。

依緒が力を入れそのまま

…開かないな。

「うーん、ここで開いたら面白かったんですけど。あはは、そんなに都合良くはいきませんよね」

そうは言うが依緒は少し残念そうだ。

斯く言う僕も若干期待していたのは否定できない。

いつまでもここにいても仕方ないので依緒に帰りを促し

扉が開く。

驚き、顔を見合す僕と依緒。

僕たちは一切扉に触れていなかった。なのに扉は独りでに開いたのだ。

開いた扉の先は靄が掛かったように全く見えない。

これは中に入れということなのか…？

開かずの間には様々ないわくがある。

別の場所に転送するための装置であったり、異世界への扉などとも囁かれている。

もつともポピュラーなのが扉が開いた時、中に入ればどんな願いでも叶うというもの。

…そんな都合のいいものが有る筈がない。

人の身の丈を超えた願いには必ず代償がある。そう僕は思っている。

それなのに、今の僕は扉から目が離せない。

確かめたいという欲求が抑えられない。

しかし、何が有るかわからない危険なところに依緒を連れていくのは

「行きましよう、先輩。」

躊躇の一切ない言葉。

その眼は扉の先を見据えており、どこか楽しげだ。

「…何が有るかわからない。それでもいいのか？」

依緒はおそらく止めても聞かないだろう。

いつも、己を信じ、自らの意思を貫く。それが依緒という存在だった。

だから、これはただの確認であり、情けなく卑怯な僕の免罪符だった。

僕は依緒の確認をとったのだから、これは依緒の意思なのだ。その責任逃れをするための。

だけど、依緒に傷ついて欲しくないと思う僕がいるのも確かだった。以前、妹との事で塞ぎ込んでいた時に僕を励まし立ち直らせてくれた少女がいた。

その少女こそが依緒だった。

僕は知っている。依緒は一度決めたことを曲げようとはしないということを。

僕は知っている。依緒が己の実直故に苦しんでいることを。

僕は知っている。依緒が僕と同じ叶わぬ願いを抱いていることを

だからこそ、傷ついてなんて欲しくなかった。

それが、偽りだとわかった時、依緒は傷つくだろう。

それなのに依緒は僕に笑いかける。

「もちろんです。…それに、私は先輩と一緒になら怖いものなんてありません！」

僕を勇気づけるように

安心させるように

力強く笑う。

本当は不安で一杯なくせに。

…本当に困ったものだ。

こんな僕が依緒の笑顔を見て思ってしまった。

この真っ直ぐで優しい強がりな後輩を

僕の手で守りたい。と

この手で小さな後輩の笑顔を守りたい。そう思ったんだ。

だから、僕はもう躊躇わない。

「いくぞっ、依緒！」 「はいっ！先輩！」

互いに手を取り扉の向こうに足を踏み入れる。

もう、卑屈な僕はない。

二人が繋いだのは手だけじゃない。

繋いだのは二人の想い。

たった一つの想いだけ。

でも一つで十分なんだ。

それだけで僕は無限にもなれる。

君を守りたい。ただそれだけで。

第十二話 運命に抗う者達（前編）（後書き）

僕達の冒険はこれからだ！とか書いたらすごい打ち切りっぽい引きですね。

思ったより長くなったので一応前後にわけました。

初めはエロい話書いてたんですけど、気が付いたらシリアスっぽくなっていました。

たぶん、明日には更新できると思います。

第十三話 運命に抗う者達（中編）

…眩しい光が瞼の外から僕を目を焼き目覚めを促す。
でも、もう少し寝ていたい…

「こらあ〜！さっちゃん、いい加減起きないと遅刻するぞあ！」
耳元でとても大きな声が鳴り響く。
余りの大音響に思わず飛び起きる僕。

声のした方を見ると腰に手を当てて得意げにしている妹の姿があった。

「うう〜、ひどいよ桜。もし僕の鼓膜が破れたらどうするのさ」

「大丈夫、大丈夫。さっちゃんは強い子だからね〜」
怨みがましくいうも妹の桜には全然効果がないどころか、子供の駄々を諫めるお姉さんのような物言いだ。

「ほらっ、早く着替えて降りて来てね。洗濯もしたいし、料理も片付かないからね。」

桜がいなくなっただからって二度寝なんかしちや駄目だぞっ」

…僕の方がお兄ちゃんなのにどう考えても弟扱いされてる。

桜が怒ると怖いので着替えを済まし下に降りる僕。

「あ、五月おはよう。まだちょっと眠そうだな」

爽やかな笑顔でそう言ったのは僕のお兄ちゃんの七月だ。

「おはよう、お兄ちゃん。さっき桜に無理やり起こされたから…」

「お前も、そろそろ自力で起きれるようにならないとな。いつまでも、桜におんぶにだっこじゃ恥ずかしいぞ」

確かに自力で起きる位は出来ないと恥ずかしいなあ。

お兄ちゃんは運動も勉強も得意で大人っぽいのに比べ、

僕は運動は苦手、勉強は出来るけどお兄ちゃんには遠く及ばない。

はあ。本当に情けないよ…

「…五月。別に今すぐ変われって言ってる訳じゃないぞ。

お前のペースでゆっくりと変わっていけばいいんだ。

お前はそんな自分が嫌いかもしれないけど、

俺も桜もお前のことが好きだからな。それだけは覚えといてくれ

よ

こつこつ思わず照れてしまうようなこともさらっと言えるところもお兄ちゃんのすごいところだと思う。

僕もいつかこんな風になりたいなあ…

その後朝食を済ませ兄弟三人で学校に向かった。

そのまま一つ下の桜も一緒に教室に入ってくる。

まあ、いつものことなんだけどね。

お兄ちゃんと桜と別れ僕は一人席に着く。

桜はお兄ちゃんと仲良く何か話している。

「おはよう五月。君は相変わらず天使のように可愛いな」
話しかけてきたのは、とても綺麗な女の子三月ちゃんだ。

僕と同じ年には全然見えない。

「か、からかわないでよ、三月ちゃん。

大体それなら何で、同じ顔のお兄ちゃんには言わないのさ」
僕とお兄ちゃんの顔は本当によく似ている。

だから、お兄ちゃんにも言っていないとおかしいのだ。

「ふふつ。確かに五月と七月の顔は似ているとよく言われているな。でも全く同じではない。多分それは性格によって、滲み出る雰囲気の影響だろうな。

でも、その違いは大好きな五月をずっと見つめている私からしたら大きな違いなんだ」

うう、大好きとか言われると照れちゃうよう…

三月ちゃんみたいな綺麗な女の子が僕なんかを好きになる筈ないんだけど、

真剣な顔で言われると時々本気で言っているんじゃないかって勘違いしそうになっちゃう。

「こ、これ以上からかったら怒るよ!」

恥ずかしくて顔から火が出そうだ。

「ふむ、仕方ないな。私の愛を伝えるのは後に取っておくよ」
すごく楽しそうに笑いながら離れていく三月ちゃん。

…今の僕の顔は茹でダコみたいになってそうだ。

「さっちゃん。大好きな三月さんのお喋りは堪能できたかなあ?」

ニヤニヤしながら近づいてくる桜。

「だ、だ、だいすきって、ぼ、僕はそんなんじゃ…
それに僕じゃ三月ちゃんに釣り合わないよ…」

「そんなことないと思うけどなあ。むしろお似合いの二人だと思うけど」

桜ってば絶対面白がってるよう…

僕なんかが三月ちゃんと付き合える筈もないのに。

でも、少しだけ想像してみた。三月ちゃんの隣に並ぶ僕の姿を…
僕の腕に抱きつく三月ちゃん。僕の腕に柔らかい感触が…
って！何変なこと考えてるんだよお！

うう、三月ちゃん、えっちなこと考えてごめんなさい…

「あつ、先生来た。じゃあ教室戻るねさっちゃん。三月さんとお幸せに〜」

最後まで茶化す桜。ほんとに性質が悪いよ…

僕の日常は概ねこんな感じだ。

少し生意気だけど大好きな桜。

カッコいい僕の憧れのお兄ちゃん。

綺麗で、一緒にいるとドキドキする三月ちゃん。

そんな三人が中心の狭い世界。

でも、僕はこれで満足だった。
大切な人達と楽しく過ごせるだけで他には何もいらぬ。
変化なんて必要ない。
平凡な日常が一番なんだ。

こうやって平凡な日常を何事もなく過ごしている僕に不満なんて有る筈がない。
有る筈がないのに。

最近、よくわからない焦燥感のようなものを感じる。
とても大切なことを忘れている。そんな感覚。

僕の世界は桜とお兄ちゃんと三月ちゃんだけの筈だ。
それ以外は必要無い筈なのに。

誰かが呼んでいる気がする。

桜でもお兄ちゃんでも三月ちゃんでもない誰かの声。

でも、僕を必要とする人なんている筈がない。
僕の世界の三人だってそうだ。

僕には必要だけど、三人からしたらいなくても問題ない存在なんだ。

そんなことない

えっ？どうして僕はそう思ったんだ？
だって僕は臆病で怖がりな卑怯者で

純真で傷つきやすいけれど頑張り屋で優しい…

って僕はそんな人間じゃない！
だって、大切な人が困っていても何も出来ないんだ。

でも、傍にいたることが出来る。話を聞いてあげることが出来る。

違う、そんなの何の役にも立たない。

でも、それで救われた人もいたんだ。

違う、そんな人はいやしないんだ！

手を繋ぐだけでいいんだ。

それが何になるのさ！

(それが先輩の助けになるのならずっとこうしてますよ)

それは覚えのない言葉のはずなのに、僕の心を強く揺さぶった。

(先輩を抱きしめて、先輩の話を聞いて、先輩がお礼を言う。

ただそれだけのことで、私がどれだけ救われたか先輩は知ってますか?)

笑って言う君に僕も救われていたから。

(競争しませんか？どちらが先に願いを叶えられるか。

勝った方は負けた方に何でも命令出来る権利です。

さあ、どうしますか？先輩)

僕は弱いけれど思ったから。

守りたいって思ったから。

君も、君の約束も全部守りたい。

だから、ここで優しい偽りの夢は終わりだ。

行かなきゃならないんだ。

僕のいるべき残酷な非日常の世界に。

今行くよ

「せんぱいっ」

君のもとに

第十三話 運命に抗う者達（中編）（後書き）

……前の話で前後編と言いつつ更新したのは中編です。ホラ吹いて
すいません。

書いてるうちにどんどん話が変わっていった結果こうなりました。
後編で多分終わりです。もし延びたら・・・もうサブタイトル変え
ると思います。勝手ですいません。

第十四話 運命に抗う者達（後編）

「せんぱいつ！」

身体が引き上げられる感覚。

先程までの夢の光景は消え去り、僕の目の前には泣きそうな依緒の姿。

苦笑が漏れる。守ると決意しておいて結局守られていたのは僕の方だった。

「…心配掛けてごめん…依緒。頼りない先輩でごめんな…」
僕の言葉に必死に首を振り否定する依緒。

「そ、そんなことはありません！…先輩がいたから私も行くって…
そう思えたんです…」

一人だったらとつくに逃げ出してみました…私が頑張れるとしたら、それは先輩のおかげなんです…」

…本当に情けないなあ僕は。

自分を否定するってことは僕を信じてくれた依緒を裏切る行為だ。

そんな簡単なことにも気付けないなんて先輩失格だな。

「…僕が依緒の助けになれたのなら嬉しいよ。でもね依緒、僕も依緒に助けられたんだ。」

偽りに捕らわれて、そのまま苦しみから逃げようとしていた僕を呼んでくれたよね。ありがとう依緒。

おかげで気付くことが出来たよ。僕は僕なんだって」

僕は僕自身の罪を贖うために一人で全てを解決しようとしていた。

だから、今まで僕は弱い自分を必要無いと切り捨てて考えていた。

必要なのは一人で生きていける強さだと考えていた。

でも、そんな弱い僕が依緒の支えになっていた。

知らないうちに依緒の救いになっていた。

偽りの世界にいる時に、僕は繋がった依緒のそんな想いを知り現実に戻りたいと思ったんだ。

弱くてもいいんだ。人は一人では生きてはいけないから。

必ずどこかで繋がっている。

僕の願いも、僕だけのものじゃない。

本当は不安だったのかもしれない。

願いが叶えばきっと、今の非日常は終わる。

僕はいつの間にか敵だと思っていた非日常が悪くないと思ってたんだ
このままいけばおそらく、非日常が終わると同時に多くのものを失
ってしまう。

きっと僕だけじゃ、その結末は変わらない。変えられない。

そう、僕一人じゃ。

だから、話してみようと思った。

こんな僕を自分の世界の中に入れてくれた大切な人たちに。

拒絶されるかもしれない。

繋がっているなんて僕の勘違いかもしれない。

でも、何もしなければ変わらない。

今の願い以上の、最高のハッピーエンドを僕が望むのならば、

僕は一步踏み出す必要があるんだ。

そのためには僕の想いを伝える必要がある。

まずは、僕を心配し助けてくれたかわいい後輩に伝えることから始めよう。

「…依緒。僕はね、とても傲慢で我が儘なんだ。だから、僕は絶対に自分の望みを叶えたい。」

でも、その望みは僕一人じゃ叶えることが出来ないんだ。もっと多くの人達の力が必要なんだ。

だから、無茶を承知で言わせてもらおう

「…僕に力を貸してくれないか？依緒」

自分で言うのも何だが本当に無茶苦茶だな。

依緒も僕の言葉に呆れた顔をしている。

「…先輩。今更何を言ってるんですか？」

やっぱり呆れて

「先輩に力を貸すなんて当然じゃないですか。」

それが先輩の望みだって言うのなら、断られたとしても力を貸しま

すよ。

まあ、私の力なんて微々たるものですが…」

「そんなことない！僕を救ってくれたのは依緒なんだ！

依緒が力を貸してくれたら百人力どころか百万人力だよ！」

そうだ、僕は沢山の心強い人たちに支えられている。

きつと一人だったら非日常な毎日に押し潰されていた。

それが、どれほどの救いだったのかを依緒に伝えたい。

「そ、そうですね…なんだか今日の先輩は素直で戸惑っちゃいます…。

…でも先輩のお墨付きなら一安心です。私も、私を信じることにしてみます。

だから、先輩も自分を卑下しちゃ嫌ですよ？」

…どうやら僕の考えていることはお見通しだったようだ。

本当にこの後輩には敵う気がしない。

本当に、頼もしいかぎりだ。

そんな僕たちの後ろから何か重いものを引き摺るような音がした。

先程までは何も無かった空間に扉があった。

しかも、その扉は徐々に開いていつている。

扉の向こうに見えるのは、どうやら扉に入る前の場所のようだ。

「これは、外に出るといふことなんですかね？」

…結局何で開いたのかも分かりませんでしたね。先輩
納得がいかず不満そうに言う依緒

「願いを叶える為じゃないか？」

それに対し僕は確信を持って言う。

「？」

「僕の願いは叶ったから」

今までの僕の願いは、責任から逃れるため願いにかこつけた、ただの言い訳だった。

でも、ここに来てそれを本当の願いに変えたくなった。

そのためにもどうしても必要なものがあつた。

僕が欲しかったのは、

ほんの少しの勇氣。

大切な人たちに、本当の自分を曝け出す勇氣が欲しかったんだ。

ここで、それを手に入れたうえ、大切な人と分かり合うことが出来た。

それはきつと願いが叶つたと言っても過言じゃない。

そのために、この扉は開かれたのだろう。

…少し自分に都合の良い良すぎる解釈かも。

これで終わった訳じゃないけれど

これからが大変なんだろうけれど

それでも心が浮き立つのを抑えきれない。

だからもう逃げたりはしない。

「行こう、依緒！」 「はいっ！先輩！」

互いに手を取り扉の外に足を踏み出す。

繋いだ手から温もりが伝わる。

その温かさは、ひだまりにいるようで

太陽みたいに僕の心も温めてくれる。

僕に大切なことを思い出させてくれる。

絶対に忘れちゃならない大切なことを。

僕が一人じゃないってことを。

僕にはそれだけで十分なんだ。それだけで。

第十四話 運命に抗う者達（後編）（後書き）

この小説の総表示回数が30000を超えました。・・・なんだか狐に化かされてるんじゃないかと不安になります。

ネガティブですいません。本当は滅茶苦茶嬉しいです。

正直ラブコメと聞いて来た人には大変申し訳ないです。次もシリアスっぽくなりそうなんでなんとかラブとコメを捻じり込みたいとは思っているんですが、如何せん第二話あたりで最後に訳の分らんことを書いたため、方向修正もままなりません。なんとか、ラブコメを書いていきたいので、読んで下さる方々の期待に応えられるよう頑張っていきます。

長々とすいませんでした。

読者の皆様ありがとうございました。

第十五話 非日常な日常

…どうやら、外にでられたようだな。

これで、実はまた夢の中で無限にループしてるとかだったら目も当てられない。

まあ、流石にそれはないだろうけど…多分。

「ふう、やっと外に出られましたねえ。」

また扉の中の世界だったらどうしよう、とか考えちゃいましたよ」

どうやら、依緒も似たようなことを考えていたようだ。

さてと、何時までもそんなことを考えていても意味がない。

とりあえず今は何時なのだろう？

僕は携帯を持っていないので依緒に確認してもらおう。

「ええっと、今は…入ってから一分もたってないです。

どういう事なんでしょうか？少なくとも一時間は経った気がしたんですが…」

おそらく、扉の中の時間感覚が外とは違ったのだろう。

あのまま、ずっと中にいたら、浦島太郎さながらのお爺ちゃんハプニングが発生していたことだろう。

……こわっ！

「と、とりあえず教室に戻りましょうか。授業も始まりますし」
額に汗を浮かべナイスな提案をする依緒。

確かに教室には戻らないといけないな。

今、僕は無性に皆に会いたい気分なんだ。

教室を目指す僕達二人は依緒とは学年が違ったため階段のところまで足を止めた。

「先輩。私は何時でも先輩の味方ですよ。忘れちゃ嫌ですからね……？」

そんなの大切なこと忘れる筈がないだろうに確認を取る依緒。

そんなに僕は信用ないだろうか……？

「あっ、そうだ！先輩が絶対に忘れないように、とっておきのおまじないをしてあげますよ」

おまじない？一体何だろう……？

僕が不思議に思っていると、

頬に柔らかい感触。

…っていま、キスされた!?

「っつ!」

頭に血が集まる。

今の僕は、もぎたてトマトよりも赤い顔をしているだろう。

「じゃ、じゃあ、私はもう行きますねっ!

私のこと忘れちゃだめですよ」

頬を赤く染め逃げるように走っていく依緒。

僕はそんな依緒の背中を呆然と見つめていた…

「…あなたが教室にいなかったので、心配して探していましたが

よもや、可愛い後輩との逢瀬を楽しんでいるとは思いませんでしたよ…

しかも、校内であのようなふしだらな事をしてるとは…!」

背後から般若も裸足でスタコラサッサと逃げ出しそうな鬼神剣野様のお声がした。

「五月よ、私という妻がありながら年下の女に走るとは…そんなに欲求不満だったのか!？」

剣野様の横にいた三月が訳の分らないことをのたまう。…何時ものことだけど。

…それと三月よ。いつお前が僕の妻になった。

後、僕は欲求不満でもないぞ。

…ほらみる、お前の余計な発言で鬼神様の更なる怒りを呼んでしまったではないか。

「五月君…やっぱり、重要なのはあの二つの大きな脂肪の塊なんだね…?」

またもや、結は変な誤解をしている。大切なのは大きさだけじゃないのに…!

というか、結さん、そんな光を灯さない暗い瞳でじっと見ないで下さい。とても怖いです。

「……………」

何も言わず僕を見つめる千早。

しかし、十本の触手はゴーゴンの髪のように不気味に蠢いている。

…捕食するんですか？僕を捕食するんですね千早さん。

「……ウホ……ウホホ、ウホウ……？」

悲しそうに僕を見つめ、信じられないといった風に問いかけるゴリラ。

何でゴリラの反応が一番ヒロインっぽいんだよ…

「キス………いいなあ」

怖いから！お前にはリアルで恐怖を感じるんだよ！

…なぜ近寄ってくるのだ要よ。

「反逆者、春野五月には重い刑罰が必要だと思われます。主に死刑ですな。」

皆さんもそれに異論はありませんね？」

民衆を扇動する革命者のように厳かに判決を下された剣野様。

死刑だなんてそんなの賛成な訳が

「はいつ！」「ウホっ！」「・・・！」

満場一致で死刑！？

いや、異論滅茶苦茶あるから！

何でこんな時だけ一致団結するのさ！？

その団結力はもっと学校行事の時に発揮しろよ！

何ここで無駄遣いしてんだよ！

うう、何故こんな事になったのだろう…

学生の本分は勉強だと言うのに、

何故この人達はこうもバイオレンス志向をお持ちなのでしょう…？

「それでは、神にお祈りは済みましたか…？春野五月」

まるで女神のように慈愛に満ちた笑顔で死の宣告を下す。

残念ながら僕の神はちよつと前に死んだんだよ！

くそっ、こうなったら切り札を使うしかあるまい…！

僕の十八番であり、最終手段。

秘儀！三十六計逃げるに如かずっ！

「あっ！罪人が逃げました！皆さん追いかけますよ！

春野五月！何故神の裁きを受けないのですか！！」

何故じゃねえよ！死にたくないから逃げるに決まってるだろうが！

というか、神に祈らせておいてその裁きは神が下すのかよ！

どんな鬼畜神だよ！鬼神と鬼畜神のコラボレート！？

全く勝てる気がしねえ！

全速力で校舎を逃走する僕。

はあ、はあ…

く、くるしい…

…でも、どうしてなんだろう。

こんなに苦しいのに

こんなに怖いのに

楽しくてたまらない。

こんな、非日常的な日常が楽しくて、思わず笑ってしまう。

捕まったらきつと無事では済まないだろうなあ…

あいつらも本気みたいだし…

でも、負ける気がしない。

今の僕は自信があった。

絶対に逃げきってみせる。

だって、今の僕には、後ろ向きな勝利への自信が満ち溢れてるから。

…情けないとは言わないでほしい。わかってるから。

あと、追いかけて楽しいというのは

いつもの非日常を久しぶりに感じた気がして

そう言ったただけであって

僕がマゾとか、そういうことではないから！

……ほんとうだよ？

第十五話 非日常な日常（後書き）

次はシリアスになると言っておいて微コメですいません。

次は本当にシリアスっぽい話です。コメは多分無いですがラブはあります。少し危ないラブです。

あと、気が付いたら小説というものを書き始めてから一週間以上経過しております。

読者様の御評価や御感想、沢山のアクセスが無ければ、飽き性の自分分は二日目ぐらいで書くのをやめていたでしょう。本当に有難い限りです。

とりあえず、今後の目標はもっと文章力を付ける。ラブコメ的要素を増やす。更新をさぼらない。の三つですね。本当はもっと有りませんが、きりが無いので三つにしておきます。

それでは、次の話を頑張って書きますので、次話でまた会いましょう。

ありがとうございます。

第十六話 決意

今、僕は保健室のベッドで横になっている。

別に皆にボコボコにされ保健室送りにされたわけではなく、現在進行形で逃亡中だ。

その僕が何故保健室で悠々、楽にしているかと言うと、

現在は、保健医である おおつか 大塚 よしえ 良恵（30代独身）が保健室にいない上に、内側から鍵を掛けているからだ。

十分程前、逃走中の僕が保健室の扉にかかった

（現在、留守にしております。帰りは遅くなるので、怪我人、病人は家に帰りましょう）

という腐れた札に気を惹かれ扉に手を掛けたところ、なんとなんの反発もなく扉が開いた。

どうやら鍵を掛けずに出かけたようだ。しめしめと中に入り鍵を掛ける僕。

年中飲んだくれてへべれけな行き遅れにしてはやるじゃないかと心の中で称賛を送り安息の地を手に入れた僕。

今はとつくに予鈴も鳴り授業も始まっている時間だ。

真面目な剣野は皆をサボらせる訳が無いから今頃は教室にいるだろう。

そして、不真面目な僕はサボりを満喫しているという訳だ。

久しぶりの平穏を満喫していると、外から扉が揺れるような音がした。

誰かが利用したいのだろうか？
ひよつとしたら急病人かもしれない。
先生はいないが休むくらいならできるだろう。

そう思った僕は扉の鍵を開け

そのまま扉が開いた

「やはり、ここにいたのか五月」
なんと、入ってきたのは三月だった。

「な、なんで三月がここに!？」
あの剣野がサボりを許容するはずが無いから鍵を開けたのに
今僕の目の前には三月がいる。

「ふふつ、不思議そうだな五月。だが簡単なことだ。

委員長はサボりは許さない、つまりサボりでなければ良いわけだ」

！そうか、仮病か！でもあの剣野が仮病を見抜けない筈が…

「何、ちよつとお腹に衝撃を加え吐血を演出したまでだ。大した事
じゃない」

…十分大したことだろうが。
僕が呆れていると何故か距離を詰めてくる三月。

まさか…

「五月、二人つきりだな。そして保健室と言う場所。これがどういう事か分かるか？」

「分かりたくは無いがこれまでの経験から三月がどういう行動に出るのか察した僕は、
武力行使に出ることに…」

…でも、それでいいのか？

今は三月の言うような意味ではないが二人つきりだ。
そして、誰も来ないのであれば絶好の機会と言える。

そう、僕が今まで吐いていた嘘を三月に話す絶好の機会。
本当の事を打ち明けるチャンスなのだ。

もし今を逃せば、僕は話すことに二の足を踏んでしまつかもしれない。

…よし、決めた。

「ああ、分かったよ三月。…ねえ三月、僕は君に聞いて欲しい大切なことが有るんだ」

真剣な表情を作り、声が震えてしまわないように気を付ける。

「…どうやら、茶化せる雰囲気ではないようだな」

三月も僕の真剣さを察し真面目に向き合う。

「僕は今までずっと三月に嘘を吐いていたんだ。三月は本当のことを知ったら僕を軽蔑するかもしれない…」

でも、聞いて欲しいんだ」

どうしても言い訳がましくなりそうな僕を、心の中で叱責しながら言葉を紡いでいく。

…正直言うと怖くて堪らない。

ほんの少し前まではこの事は三月に言わず墓場まで持って行くつもりだったから。

本当の僕を知って、嫌われてしまうのが怖い。

でも、言わずになんていられない。

これまで、僕と言う存在を支えていた大切な人に嘘を吐きたくないから。

だから、言おう。

「三月僕は本当は」

声が震える。でも言葉を止めはしない。

君に真実を伝えるんだ。

第十六話 決意（後書き）

またもや、長くなりそうだったので途中で投稿することにしました。なので少し短いです。

次の話は驚愕の真実と言うよりは、なんでそうなるのか分からないこじつけ臭い話になると思います。

伏線とか張れないので唐突です。言い訳です。すいません。

シリアスが続きそうなので読者様には面白くないかもしれませんが、一応読んでいただけると助かります。

これからも、よろしくお願いします。

第十七話 三月ちゃん（前書き）

注意

この話は少しやっていることが「危ない」です。
年齢制限にはかかりませんが、
読む際にはお気を付け下さい。

第十七話 三月ちゃん

大切な人に真実を伝えたい。

その気持ちが僕の背を押す。

だから言おう。

真実を。

君に。

「僕は本当は」

「五月じゃないんだ」

言ってしまった。

三月は変わらない表情で僕をじっと見ている。

やはり、これだけを言われても理解してもらえないだろう。

僕は更に言い募ろうとして

「七月…なのだろう。知っている」

頭が真っ白になる。

今、三月は何と言った？

たしか、

「そうだよ、七月。私はずっと知っていたんだ。

君が五月ではなく七月だということを。

それを知った上で、私は知らない振りをしていた」

理解できない。頭の処理が追いつかない。

知っていた？その上、知らない振りをしていた？
なんで？そんなの有り得ない。

だって三月は

「なんで？と、そう思っているのだろう七月。そして君は今、私が知らない振りをするのは有り得ない、と思っている」

そうだ有り得る筈が無い。

だって、知っていたのだったら聞かない筈が無い。

そうだ、本当の五月のことを聞かない筈が無い。

三月が好きなのは、

「ふふっ、本当に七月は分かりやすいな。でも七月、それは勘違いだ。」

聞かないのは当たり前なんだ。だって私が好きなのは

七月、…君だから」

「えっ？」

初めて三月の言葉に声を上げる。

三月が僕を……好き？

それこそ有り得ない事だ。

三月が好きなのは本当の五月。

つまり、僕が七月と呼んでいる人物だ。

小さな時から二人を見ていた僕は誰よりも二人の事を知っている。信じられる筈が無い。

「…どうやら、信じてもらえないようだな。ならば、

力尽くでも分かせてあげよう」

そう言っ僕に歩み寄る三月。

いつもより凜凜しいその姿に思わず目を奪われる僕。気が付けばベッドの方まで追いやられていた。

三月は僕の腰に手を回し、身体を少し押す。

それだけで、何が何だか分からず混乱している僕は抵抗もせずベッドに倒れ込んでしまう。

「みつき…?」

三月は僕が起き上がれないように肩に両手を置いた。けれども、混乱している今の僕は抵抗するなんてことすらも考え付かなかった。

三月の行動に理解できず、ただ三月の綺麗な顔を呆然と見つめる僕。三月はそんな僕を愛おしそうに見て微笑む。その顔には普段はない艶めかしさがあつた。

「七月：教えてあげるよ…私の愛を」

耳元で囁く甘い声に心臓が揺さぶられる。

「み、みつき…なにを…っつ!」

頭が少しづつ動き始めた僕は抵抗しようとしたが、

三月が制服のスカートを外し胸元を緩め始めるのを見て、急いで顔を背けた。

緩んだ胸元から覗いた白い肌が脳裏に焼け付き、顔が熱くなるのを抑えられない。

「み、みつき…こんな」

再び何も考えられなくなる。言葉も全く浮かんでこない。

「七月：昔みたいに、三月ちゃんとは呼んでくれないのか…?」

そんな三月の悲しそうな声に思わず顔を向けてしまう僕。

しかし、今度は開いた胸元から綺麗な双丘が直に見え思わず凝視してしまふ。

「ふふっ…興奮しているのか七月？触っても、いいんだぞ…？」
そういつて僕の手を取ろうとする三月。

しかし、僕は抵抗の意を示すため手を身体の下に持って行く。

「それは…好きにしてくれと言う事か…？それならば、私の好きにさせてもらおう…」

僕の行動の意味を間違えて捉えた三月は、顔を僕の首に近づける。

そのまま唇を首にあてがい、這わせながら下へ移動させていく。

三月は唇と舌を上手に使って、一つずつ僕のシャツのボタンを外していく。

三月はボタンを三つ程外したところで、僕の鎖骨に舌を這わせ始めた。

その感触に思わず声を上げそうになる僕。

三月は時々唇で痕を付けるように首筋にも強く吸い付く。

「…んっ…七月の味がする…」

そう言っつて、様々な所に舌を這わせながら僕の胸を手で撫でる三月。
ぴちゃぴちゃという液体の音が、静かな保健室の中で確かな音として響き渡る。

「みつ、みつきちゃ…だ…め」

与えられる柔らかな刺激に何も考えられず、自然と高い声が出てしまっつ。

「…七月…可愛いぞ…このまま食べてしまいたいぐらいに…」

隙間なく密着した三月の身体から伝わる温もりと柔らかさに、

三月の蕩ける様な甘い言葉に身体が反応しそうになる。

三月の潤んだ瞳が僕の瞳とぶつかり合う。

そして、三月はそのまま僕に顔を近付け

「おゝい。ここは男女が盛る場所じゃないぞ〜」
保健医の声がした。

「うわぁ!」
驚きベッドから転がり落ちる僕。

僕はシャツの胸元が開いているのに気づき慌ててボタンを付け直す。

「…いや、まあ高校生だしそう言う事に興味があるのは、わからないけどさ、

…やんなら、どっか別の場所でやってくんない? 見てて虚しくなるから…」

独身30代の本音はどうでもいい。

…だけど、正直助かった。

あれはかなりヤバかった。

あのままだと雰囲気になされてそのまま、というのが容易に想像で

きる。

そんな僕に対し三月はどうかというと、素知らぬ顔で立っている。しかも全く着衣に乱れが無い。…なんだか僕ばっかり動揺して面白くない。

じと眼で三月を見る。

「なんだ、五月？続きがしたいのか。ふふ、しょうがないな。

それでは一先ずここから出ようか」

もういつもの三月に戻り、僕の呼び方も五月になっている。先程までの三月の姿はどこにもない。

…もったいない。

普段からああなら、僕も邪険に扱わないのにな。

そのまま保健室の外に出た僕たち。

そこで、はたと思います。

結局、三月から詳しい話を聞いていない。

…ひょっとして、はぐらかされた？

さっきのもからかってただけとか

「七月、まだ話したいことがあるのだろう？

なら、屋上に行かないか？あそこなら誰にも邪魔されないうつ」

急に真面目な雰囲気纏う三月に驚く僕。
ギャップが物凄い。

そんな三月の提案には反対する所が無かったので頷く僕。
まだ三月には言わなきゃいけないことも、聞かなきゃいけないこと
もある。

「わかった。屋上に行こう三月」

しかし、三月は足を止めこちらを見ている。

…どうしたんだろう？

と、急に三月が僕の耳元に顔を寄せる

「さつきは可愛かったぞ七月。あと、

私の愛はきちんと伝わったか？

私の事は昔のように三月ちゃんと呼んでくれて構わないからな」

それだけを言うと、顔を赤くした僕を置いて歩き出す三月。

……なんだか物凄く負けた気分だ。

第十七話 三月ちゃん（後書き）

すみません。やってしまいました。

正直やってることは舐めたただけの話ですので、犬も舐める位ですし問題は無いとは思いますが、少し不安です。

いっそ、サブタイトルを首舐めとかにしたらわかりやすかったですかね。

後、展開が無理やりすぎてカオスってます。自分でも分かりません。ほんと、これを読んでくれる読者様様です。

謝罪と感謝を読者様に捧げます。ありがとうございます。

第十八話 道化達の茶番

今、僕は三月と二人で屋上にいる。

三月の提案に乗った僕だが、なぜ三月はここに人が来ないことを知っているのだろうか？

「七月が屋上をよく利用しているのを知っていたからな。

私はここの利用者に女がいないか調べていたんだ。七月に変な虫が付くと困るからな。

利用する内の一人は女だったが、知った時にはその娘は七月と仲良くなっていたし、

まあ悪い娘でもなさそうだったから、特に何もしなかったがな」

千早がいい子で良かった。悪い奴だったらどうなってたんだろう…？

そして、僕はそんな話を聞いて自分が恥ずかしくなった。

僕は一人で全て背負った気になって、三月を蔑ろにしていた。

何も知らないくせに、そんな風に思って。

僕はずっと自分のことを道化だと思っていた。

偽りの人物に成り済まし、誰もそのことに気が付かない。

そんな茶番を演じる道化師なのだ。

でも本当は違った。

三月は初めから気付いていた。

道化に気付かない振りをして茶番を共に演じてくれていた。

けれど三月は僕が道化であることには気付いていたが、

何故道化を演じているかについては知らないはずだ。

知っているのは僕を含め四人だけ。

だから、三月はどうしても僕がそうしているのかも知らないまま演じ続けていた。

それはきつと辛いことだったはずだ。

僕は三月のためにも知る必要がある。

そして三月に話さなければならぬことがある。

「三月は…どうして何も僕に聞かなかったんだ…？」

そう、それが僕の一番の謎だった。

「七月がそう望んでいたからだ」

僕が…？

「七月は、誰にも知られることなく果たしたい何かがあったのだから？」

「だから私は、七月が話してもいいと思うまでは何も聞かないことにしたんだ」

驚きで言葉を失う。そこまで気付いていたことにもそうだが、どうして、そこまで出来るのだろうか？

そんな疑問が顔に出ていたのか三月は話し始めた

「なぜそうしたのか、簡単に言えば先程言ったこと。」

つまり、君が好きだから。

もっと言えば好きな人を困らせたくないから、

信じていたいから、といったところかな」

誇るように言う三月に僕の顔の温度が上昇する。

「で、でも三月はよく五月と話してたし

すごく楽しそうだったし…」

僕はでも、それが信じられなくて反論をする

「五月と話してたのは七月の事を相談するため。」

楽しそうに見えたのは…私も女の子なんだ。

大好きな七月といれば緊張ぐらいする。

本当はドキドキして、うまく笑えなかったんだ。」

頬を少し赤く染め照れたように言う三月。

まさか、そんな返しをされるとは思っていなかった僕は、顔だけでなく身体まで熱くなる。

ちよ、直球すぎるよ三月…

深呼吸をし心を落ち着ける。

ようやく、動悸が治まってきた僕は少し気になっていたことも聞いてみた。

つまりは

「あのさ、三月って途中からどんどん変になって行ったよね？」

あれは、その、演技…なの？」

ということだ。今の三月と話しているとあの変態性はなりを潜め、面影もない。

だとすればあれが演技と言う事になる、というよりは僕としてはそう有ってほしい。

ただその場合、僕は三月にどれほど謝り倒しても足りないだろう。

火葬、土葬、水葬、鳥葬、果ては死体遺棄、と様々な葬儀を執り行ってきた僕。

よく考えなくても僕は一体何をしているんだろう…

「…あれは…その、私も女の子だしな、

好きな人といれば暴走くらいする」

三月はもじもじと恥ずかしそうに言う。

…つまりはあれが地ということですか？

「いや、誤解して欲しくはないが、いつもあんなことを考えている訳じゃないぞ。

七月という時だけだから安心してくれ」

親指を立て太鼓判を押す三月。

って安心出来ねえええ！

なんだか質問して損した気分だ。知りたく無かったよ。

昔の少し意地悪だけど可愛らしい、あの三月ちゃんはどこに行って

しまったんだろう…？

「そうは言うが、七月の普段の私の扱いには疑問を覚えるのだが…」
「やばい、そっちは何の弁解も出来ない。何とか話を逸らせないものか…」

「縄で縛るまではすぐに許容出来たが、泉に沈められたり、

燃やされたりは慣れるまでが大変だったんだぞ」

少し怒った様に言う三月。返す言葉もない。

…というか、慣れるものなんだ。

「まったく、縄で縛った上、目隠しでアイアンメイデンの中に入れ、泉に沈めるとは想像もしなかったよ。なんなのだ、あの快感は！」

……ん？

「だが、野外に放置され動物たちと戯れるのも中々良かった！

特に熊に噛みつかれた時と言ったらそれはもう！」

…やっぱり、僕のした事は間違ってた。変態にはお仕置きが
必要だ。

「三月ちゃんの変態…」

呆れた目で三月を見ながら言ってる。

「ううっ！どうして、そんな時に限って昔の様に呼ぶんだ…」

そんな風に言われたら傷つくじゃないか…」

傷付いた割には顔がちょっと嬉しそうだな。

呼び方に喜んでいるならいいけど…ひょっとして

今度は冷めた目でじっと見る。

「うう、いいじゃないかちょっとぐらい変態でも…」

どこが、ちょっとなんだよ。

「……………てたくせに」

三月が小さく何かを言う。

しかし、その口調は普段と違っていた。
顔も俯いていてよく見えない

一体何だ？

「その変態に触られて」

????

「大っきくなつてたくせに」

！！！な、ななななにをですか三月さん！？

「それはもちろん「わー！わー！」

なんとか三月の言葉に被せることに成功した。
何て事を言い出すんだ。まったく。

……そりゃあ、あれだけ密着してたら気付くよね。

「ふう。七月に復讐も済んだし、そろそろ本題に入らないか？」

そうだ、すっかり忘れてたけどそのためにここに来たんだ。

熱くなっていた顔が冷め、真剣な顔を作る。

「さて、話してもらおうか。

なぜ七月が五月の振りをしていたのかを」

僕が自分の口からこの事について話すのは三月で二人目だ。

僕は語る。

何故僕が五月になったのか。

その全ての始まりの話を。

第十八話 道化達の茶番（後書き）

またもや長くなりそうだったので途中での投稿です。すみません。最近書いていて読者様がこの訳の分らない展開について来ているのが不安です。

いきなり、伏線らしい伏線無しで「五月じゃない」発言。
・・・なんじゃそりゃ、ですね。

精進します・・・読者様、ありがとうございます。

第十九話 真実の一端

屋上に予鈴の音が鳴り響く。

おそらく、三時限目の授業が始まったのだろう。でも、僕達はそこから動こうとはしなかった。

まだ、話すべき大切なことが残っていたから。

「三月…その、実はこれから話すことは全部って訳じゃないんだ。話すことが出来ない部分があつて、多分曖昧な話になると思う。

それじゃあ、納得いかないかもしれない、でも三月には聞いて欲しいんだ」

自分でも勝手なことを言っているとは自覚している。でも僕が五月になった原因、それ自体の存在を話してはならない。それは、契約であり誓約であるからだ。

でも三月は話せないことではなく、違う事に疑問を持ったようだった。

「…なぜ、態々そのことを私に言ったんだ？」

話せない部分は適当にでっち上げれば済むと思つのだが…。

七月は、そのことで私の不信感を買つとは思わなかったのか？」

三月は責める風でもなく心底分らない、といった様子だった。

確かにその事を伝えれば三月には失望されてしまつかもしれないとは思っていた。

でも、それ以上に

「三月にもう嘘はつきたくなかったんだ。三月は僕を信じてくれた。ずっと傍にいてくれた。

僕はそんな三月を裏切りたくない」

三月の想いに報いたいと思った。

結局三月に全て話せないのなら、それは自己満足に過ぎないのかもしれない。

でも、大切な人にこれ以上嘘は重ねたくなかった。

「ふふっ、その気持ちだけでも私は嬉しいよ。

それに話さない、ではなく話せないのだろうか？

ならばそれも仕方のないことだ。七月が責任を感じる事じゃない」

おそらく、本当は全てに納得がいつている訳ではないだろう。

今はそんな三月の心遣いが本当にありがたい。

だから、そんな三月の好意を無駄にしないため、僕は三月に話し始めることにする。

始まりの物語を。

「三月。君が僕のことを五月じゃないと確信したのはいつ？」

「六年前、一週間ほど七月との連絡が取れなくなり、ようやく学校に来た七月を見た瞬間だな」

…それって、僕が五月の振りを始めた初日じゃん。

そんなバレバレだったのか…

「むう、勘違いしないで欲しいが気付いていたのは多分私だけだぞ。

大好きな七月をずっと見ていた私だから分かったことだ。

他の奴らは少し変わったな、程度のもんだ」

昔にも言われたような言葉に顔を赤く染めながらも話を続ける。

「僕が五月の振りをしていたのは何でだと思う？」

質問ばかりで三月には悪いと思うが、

僕一人で話すと曖昧な表現が多くなり伝わり難いと思ったからだ。

「…わからないな。だが、久しぶりに会った七月は雰囲気ですぐ分かった。」

でも、五月は…あれは本当に五月なのか？まるで本当の七月のようだった…

あれは演技と言うよりも本当に自分を七月だと思っているような…」

三月の洞察力には本当に舌を巻く。

三月の言う通りあの五月は七月でもある。

つまり、

「そうだよ、三月。五月は…お兄ちゃんはお自分の事を七月だと思っている」

という事だ。

「…それは、あの日が原因なのか？」

三月が具体的表現を躊躇う様に発言する。

三月の言うあの日。

確かにあの日から僕の非日常は始まった。

「あの日…二人の妹、桜が

死んだ日…」

そうだ。

僕達の妹、春野桜は六年前のあの日、死んだ。

「あの日の事はよく覚えてるよ。七月達三人が登校していないのを不思議に思っていたら、

担任から桜の訃報が伝えられたんだ。事故で亡くなったと聞いた私は急いで七月の家に向かった。

でも、七月の家は誰もいなかった。連絡も取れない。行方も分からない。

なあ、七月？連絡の取れない一週間、どれだけ私が不安だったか分かるか……！」

三月は次第に当時の事を思い出したのか、声を荒げていく。

そんな自分を自覚したのか一度話すのを止め、心を落ち着けるように深く息をつく。

「……こんな事を言えば七月に嫌われるかもしれないが、桜が死んだと聞いた時は

悲しかったが、それ以上に七月がいなくなった事の方が気懸りだったんだ。

七月がひよつとしたら死んでいるかもしれない。

そう考えるだけで胸を掻き毟りたいような衝動に襲われるんだ。それ以外の事を考えられなかった。

…軽蔑してくれて構わない。私が最低だということは事実だからな…」

自分を卑下するように、自嘲の笑みを浮かべ頂垂れる三月。

「そんなことないよ三月。三月は最低なんかじゃない。

悪いのは一週間も三月を心配させた僕だ。僕は自分のことで手一杯で、

三月が心配してくれているなんて考えもしなかった。そんな僕が、

桜の死を悲しみ、僕のことを心配してくれた三月のことを責められる筈が無い。

そんな三月が責められていい筈が無い。だからそんなに自分を責めないで三月」

僕のその言葉に弱弱しくだが笑みを返す三月。

昔から桜と一緒にいた三月はそんな自分が許せないのだろう。

その気持ちだけで、優しい桜は充分だろうに。

これ以上は三月の心の問題だ。僕がとやかく言う事じゃないし、三月もそれを望んでいない。

だから、三月には悪いが話を続けさせてもらおう。

「あの日…端的に言えば桜が死んだ日。五月はおかしくなっていました。」

あれは今の僕だからそう思えるけれど、悲しい事故だった。

でも、当時の僕も五月もそうは思わなかった。全て自分のせいだと思っただけだ。

結果として五月は狂い、僕は…五月になった」

三月が気付くよう意図的に話を省略をした僕。

三月はそれにちゃんと気付いたようだ。

「今、過程が飛んで結果だけを話したな。つまり、それが話せない部分なのか？」

「もう少しなら話せると思う。だから、気になったことは質問してくれると助かる。」

出来る限り三月の疑問には答えておきたいから」

「ん、わかった。七月は、五月が自らを七月と思い込んだから五月を演じようと思ったのか？」

あと、五月はどうやって、七月と私しか知らない事を知り得たんだ？
試しに五月にそういう質問をしてみたが、

五月は完璧に答えることが出来た。あれは、事前に七月に話を聞いていたとしても、ほぼ不可能だろう。

あれではまるで…まるで、七月の記憶をそのまま知っているかのような…」

確かに五月について疑問に思っていたのなら、それを確かめるだろう。

ただ、今の質問には答えられない部分が含まれていた。

話せない部分を脳内で削りながら僕は質問に答える。

「一つ目については三月の言う通りだ。五月が七月になったから、代わりに僕が五月になった。」

二つ目も三月の想像通り。五月は僕の記憶を持っている。ただ、どうしてか？という事については話すことが出来ない。

あの日に何が有ったかということについて触れることになるから。僕が話せないのはあの日の出来事全てなんだ」

全てを三月に話してあげられないことに、もどかしさを感じる。これでは、話していないも同然ではないか。

「…そうか、わかった。これ以上は七月を困らせてしまいそうだな。

なあ、七月。五月の身体もその影響なのか？七月と同じの銀の髪は白くなり、

一日の半分を寝て過ごさなければならぬ。そのせいで碌に学校にも来れやしない。

あれは心因性のもものではなかったのか？七月の話せない事情とやらを聞くと

私の想像の及び付かない存在が、介在しているようにおもえるのだが」

…まあ、これだけおかしなことだらけだと気付くよな。でもそれを話す訳にはいかない。

その存在が桜だなんて。

言う訳にはいかない。

「五月の身体の問題は心因性であるとも言えるし、そうでないとも言える。

…「ごめん、これ以上は難しい」

今の時点でもかなり際どい部分まで話している。

だから、今話せるのはこの辺りまで、と話を終わらせる。

「これからは、何か疑問が有ったら僕に聞いて欲しい。」

三月にはなるべく話しておきたいけれど、今は頭が上手く整理できてないから、

時間を置いてから聞いてくれれば、もう少し話せると思う」

話していけない事を常に考えながら話すのは思っていたより脳を疲弊させるようだ。

普段避けていた話題であったのも原因かもしれないが、少し頭に鈍い痛みが走っている。

今の僕ではきちんと三月の疑問に答えられそうにない。

「ああ、了解した。…っと、そうだ。あまり関係のない質問ならまだ大丈夫か？」

あまり関係が無いのならまだ大丈夫そうだ。そう判断し、三月に首肯する。

「そうか。七月の呼び方の事なんだが、皆の前では五月でいいのだよな？」

ただ、私の事は三月ちゃんと呼んで欲しい。七月の口調も昔に戻ってきてる事だしな」

七月に言われて初めて気付いたが、何時の間にか僕の口調が少し昔

のようになっていた。

…どうしよう、意識したら恥ずかしくなってきた。

つい昔に戻った気がして三月に話し掛けていた僕。

このまま、皆に会えば今までイメージが崩れていたことだろう。

でも、三月ははそんな僕を見て

「七月は気にしすぎだと思っぞ。実際、今までも混乱すると昔の口調が出てたしな。

それにな、七月。何が切っ掛けで私に話そうと思ってくれたのかは知らないが、

今の七月は昔のように心の底から笑えている。だから、そのままの

不器用だけど優しい、私の大好きな七月を大切にしてくれいし、勿体無いが

皆にも七月の魅力を知ってほしい」

昔から三月のこういう所は全然変わってない。

真顔で照れるような事を平然と言うのだ。

しかも、僕限定で。

今は三月の気持ちも知っているので効果倍増どころの話じゃない。

僕がこのまま爆発するんじゃないかというぐらい顔を赤くしている
と、

三月が

「では、教室に戻ろうか。たぶん委員長には怒られるだろうが、私も弁解を手伝おう。さあ、行こう七月」

そう言っ僕の手を取る。

三月の手は、とても柔らかくて温かい。

僕は顔を上げ、三月の顔を窺う。

「七月。私の告白の返事は七月の成すべきことがすべて終わり

春野七月を名乗れるようになってからでいい。

…何、九年越しの片思いだ。想いを伝えられただけでも大進歩なんだ。

そう簡単に振られては悲しいからな」

顔を薄く朱に染め微笑む三月。

こんな綺麗な笑顔は生まれて初めて見た。

僕の心臓は鼓動を速くし、芯から身体が熱くなっていく。

僕は今までそういった恋愛事は考えないようにしていた。

三月は多分その事に気が付いていた。

そんな僕の事を考え気遣った三月の想い。

それを感じ取った僕はこの暖かな喜びを三月に伝えたいと思った。

三月の気持ちに向き合おうと決意する。

だから僕は想いを乗せた言葉を紡ぐ

「うんっ、ありがとっ三月ちゃん！」

今はまだ返事はできないけれど。

全てが終わったその時には、

三月への気持ちは今とは違うはずだから。

だから、

待っててね三月ちゃん！

第十九話 真実の一端（後書き）

書いていた自分ですらよく分からない話です。その上今迄で一番長いです。

そもそも、七月と五月というややこしい名前が分かり難さを助長している気がします。

もう少し文章力が有れば分かり易く書けるとは思っていますが、儘ならないものです。

これからも、こんな感じのよく分からない話がぐだぐだ続きます。

それでも読んで下さる読者様には頭が下がります。

途中で読むのを止めた読者様には申し訳ないです。

なるべく、面白く、読み易く、驚愕のお話を書けるように頑張ります。

次は番外編になると思います。ありがとうございました。

番外編 三月と七月の出会い

私は生まれた時から人と違っていた。

人よりも卓越した運動能力と類稀なる知能を持ち生まれた。

身体的にも、人には有り得ない耐久力と再生力を持つ私。

私を生み出した存在は、私に

「あなたの力は誰にも知られてはいけない」

そう言つて人と違う処を隠すように言った。

でも、それは私を案じての事じゃない。

怖かったからだ。

私の存在が露見することが。

私が造物主に牙を剥くことが。

この世に私が望むものなんて無い。

ただ、情性で生きているだけだ。

だけの筈だった。

天使のような彼と出会う、それまでは。

私の名前は 叶野 かのう 三月 みつき

現在は七歳であり小学二年と行ったところだ。

私はこれまで各地を転々としていたが、
ようやく一所に腰を据えることが出来たため、この度学校に通う事
になったのだ。

これは私の意志ではなく、親からの指令によるものであった。

しかし、一般的学業課程を既に習得している私が、
勉学を学ぶ学校という機関に通う必要性が見いだせない。
おそらくは、一般社会に溶け込むための演習といったところなのだ
ろうが。

まあ私は人間と慣れ合うつもりはない。

私は人間の進化した存在であり、人とは一線を画す存在だからだ。
脆弱な存在と関わるつもりもなければ関わりたくもない。
それが私の本音だった。

教室の壇上でそんな事を考えていた私は、
手短に名前だけを伝え自らの席を目指していた。

そんな時遠くから誰かが走る様な音がした。
段々と近づいてくるその音はおそらく三人
発達した私の聴力はそう伝えていた。
音は私のいる教室の前で止まり、
一気に扉を引き開けた。

「すみません遅れました」

「ななちゃんのをいで遅れました」

「ええええ！？僕のせいなの！？」

三者三様の答え。

一人は凜凜しく、一人は元気一杯に、一人は驚き。

男子が二人に、女子が一人。

三人共天使の様に整った顔をしていた。

三人の内二人は同じ顔をしていた。

片方は大人びた、もう片方は情けない顔をしていた。

同じ顔でもここまで違うのかと私が思っていると

情けない顔をした少年と目が合った。

少年は目をまん丸にしてこちらを見る。

一体何なんだ？

「きれい…」

笑顔を浮かべ、とても綺麗なソプラノでそう言う少年。

私は少年のその言葉よりも表情が気になった。

先程からは想像出来ない程の極上の笑みだった。

なぜか、その笑みを見た瞬間私の胸がざわつくような感覚がした。

しかし、そんな感覚をこれまでに味わった事が無かった私は

何か分からないその存在に僅かばかりの不安を覚えた。

今思えばそれが切っ掛けだったのだろう。

私が少年 春野 はるの 七月 ななつきを意識するようになった最初の切っ掛け。

それから私は何と無く春野七月を観察する様になった。

こうして見ていると春野七月という存在は特筆すべき存在には思えなかった。

自己主張が無く、自分に自信が持てない、それでいて他人と接するの_に気後れしている。

逆に兄弟の春野 はるの 五月 なつきは全てにおいて万能であった。

人間の枠を出るものではないが、その能力は同年代からすればかなりの規格外であるだろう。

物腰にも大人びた姿勢が見受けられ、自信に満ち溢れた雰囲気醸し出している。

また、二人の妹の春野桜 はるの桜は能力こそ春野五月に劣るものの、やはり同年代からすれば規格外である。

春野七月のあの弱弱しい態度はおそらく、そのあたりが影響しているの_{であらう}。

と、そんな事を分析できるくらいには観察を行っていた。

なぜそこまで彼が気になるの_{だろう}？

彼の笑顔を見た時の不安感など_とつ_くに消え去っている。

ひよっとしたら、私は彼のあの不安定さが気になるのかもしれない。彼は存在がとて希薄だ。

ふと、目を逸らしたその瞬間には消えてしまっているのではないか、そんな、同年代の子供には無い儂さが彼には有った。

私は確かな理由も分らぬまま彼を見続けた。彼には一切見ている等と気付かれないように。

ある時、彼がもし私が見ている事に気付いたらどうするのだろうか？そんな疑問が頭を過った。切っ掛けは恐らく無い。それは、ずっと胸の内を燻っていたことなのだろうから。

私は彼を見た。座って妹と話している彼の事を。

じっと見つめる。

彼が私の視線に気付きこちらを見る。

少し驚いたような表情。

そして、私に笑いかけた。

私の心にあの時の感覚が蘇る。

理解出来ない不安な感覚。

その後、春野七月は妹に話しかけられ目を逸らしてしまった。

私はその後も彼に態と気付かれるように見続けた。

彼は私に気付く度、あの嬉しそうな笑みを浮かべる。

それを見た私は、またあの感覚を覚える。

そんな事を繰り返して一月程が経った。

彼は自分から誰かに話し掛けたりしない。

余程の用でもない限り兄弟にすら話しかけない。

それは、一月以上にも及ぶ観察に基づく事実のはずだった。

なのに

「あとう・・・えっと・・・その・・・叶野さん・・・」

夢でも見ているのだろうか？

彼が私に話しかける筈が無い。名前を呼ぶ筈が無い。

ないはずなのに...

「か、叶野さん！僕と、僕と友達になって下さい！お願いします！」

信じられない。彼がそんなことを言う筈が無い。

だけど、その言葉で私の胸は一杯になっていた。

胸が締め付けられるような感覚。

思考が空回りする。

何も考えないまま彼に答えようとして

目が覚めた。

…夢、か。

ベッドから起き上がりカーテンを開ける。

朝の光を浴びながらぼんやりと考える。

この胸の空虚感を。

私は望むことなんて何も無い筈だった。

では、なぜこんなにも虚しいのだろう。

やはり、分からない。

でも一つだけ決めたことが有った。

夢で私は返事が出来なかった、だから代わりにこちから聞いてやろう。

「私と友達にならないか？」

とな。

その後は知つての通り三人と友達になり、

私はあの時の感覚も理解することが出来た。

七月様様といったところだな。

結局は、人間の進化種だなんだと粹がっていたが、

恋を知って女の子になった。ただそれだけの話。

まあ、その話もまだ終わってはいないんだがな。

覚悟しろよ？私の愛しい七月。

番外編 三月と七月の出会い（後書き）

このお話の総表示回数が40000を突破。ユニークアクセス（同日の同じPCからのアクセスを一回とするアクセス数）が10000を超えました。

読者の皆様、本当にありがとうございます。

最近はラブコメと言いながらコメがほとんど無い状況です。それでも読み続けている方がいらっしゃるといのはとても有り難い事です。

なんとかコメディー方向に持って行きますのでそれまでお付き合い頂けると嬉しいです。

次こそは・・・頑張ります！

第二十話 剣野ご乱心

三月と共に教室に戻ってきた僕。

しかし、僕は扉の前で立ち止まっていた。

先程、休み時間になったので剣野も僕を探していることだろう。

剣野が怒り狂い僕を探す姿が目に見えかぶ。

……こ、怖すぎる。

そうやって躊躇っていると、すごい勢いで扉が開かれた。

現れたのは鬼神剣野様。

ひいつ！？剣で真つ二つにされる！？

身を縮め怯える僕。

しかし、剣野の顔はどこか驚いているようだった。

「春野五月、一体どこにいたのですか！心配しましたよ！」

…心配しました？心肺を停止させたいじゃなくて？

僕がそう疑問に思っていると

「…私もあれから色々と考えまして頭が冷えました。

とりあえず、あなたを探すのは続行しようとは思っていたのですが、

どこにも見当たらず、叶野さんも戻ってきませんでしたし、

何か有ったのではないかと…」

…何が心肺を停止させたいだよ。

剣野は僕の事を心配してくれてたっというのに、

僕は怯えて真っ二つにされるなんて妄想を抱いて、

本当に恥ずかしいよ。

…真っ二つにされかけたことは何度もあったけどね。

兎に角、心配掛けたことを謝ろう。

「剣野、その…心配掛けて…ごめんね」

剣野にこうやって謝るのは初めてだから少し照れてしまった。

でも、僕の気持ちは伝わったよね。

剣野の姿を見れば分かる。

だって、剣野は

何故か鼻血を吹いて倒れた。

凄い量だった。絶対放っておけば死ぬ量だ、これ。

「って、やばいじゃん！ええと、保健室に
混乱している僕。早くしないと剣野が
」

「いえ、私はらいじよぶれす」

全然大丈夫じゃないから！

呂律も回ってないし、鼻血も止まってないよ！

ちよ、何でやけに上を見てるのさ！

何か見えてるよ絶対！お爺ちゃんとかと再会してるよ！

「・・・へっ、わ、私ですか・・・ただの通りすがり象牙職人です
から、

グリユテヒユヒユカ三世じゃありませんよ・・・くふっ」

ちげえよ！剣野は象牙職人じゃなくて委員長だから！

後、そう簡単に象牙職人は通りすがらねえよ！

グリユテヒユヒユカ三世って誰だよ！

そもそもグリユテヒユヒユカ三世って言い辛いんだよ！！

……グリユテヒユヒユカ三世、グリユテヒユヒユカ三世、グリユテ
ヒユヒユカ三世ッ！！

しやあああああああ！！！！

「…五月、脳内で叫んでいる暇があったら保健室に運んだ方がいい
と思うのだが」

少し呆れたように言う三月。

三月にまともな事を言われると凄いショックだ…

その後、剣野をマグロのように保健室に運んだ僕ら。

でも結局、どうして剣野はあんなに鼻血を出したのだろうか…？

意識を取り戻した剣野は三月にこう語ったという。

上目遣いで顔を赤らめながらの、ごめんねは反則だった。

特に普段とのギャップも相まって犯罪級の可愛らしさだった。

抱きしめようかと思ったが、何とか自制した自分を褒めてやりたい。私はもともと、可愛いものが好きだった。

そう供述したという剣野は今は落ち着いていた。

雰囲気もいつも通りになっているし問題ないだろう。

「剣野：大丈夫？」

「やあ、御機嫌よう、さつきゅん。今日もとってもラブリーだねっ

」

問題だらけどころの話じゃねえ。

何だよこのキャラ…新キャラかと思っただろうが。

勘違いさせたお詫びに防護服無しで宇宙にでも行ってこいよ。

「どつちたのさっきゅん。」

お姉ちゃんが抱っこしてあげちゃうぞぉ〜デユフフ」

くねくねと身を擦じらせながら不気味な笑みを浮かべる剣野。

気持ち悪いを通り越して、きも神様がご降臨なさってるよ…
警察を呼んだら現行犯で逮捕してくれそうだ。

「よーし、三月お姉たんも抱き抱きしちゃっぞ〜ぐひゃひゃひゃ」

お前は黙ってる雌豚が。

しかし、哀れな変態に強く言うのも可哀想だ。
ここはオブラートに包んでやろう。

「三月ちゃんは黙って泥水でも啜ってるよカスが」

満面の笑みで言っちゃった。

あ、名前を呼んだ段階でオブラートが破れてたよ。
失敗、失敗。てへっ。反吐が出る。

部屋の隅でジメジメといじける三月と、きも神剣野を放置し教室に
戻る僕。

ついでに去り際に職務怠慢の保健医に言いたい事を言っておく。

「三十代独身って売れ残りのクリスマスケーキより憐れですよね」
もちろん、フォローも忘れない優しい僕。

「三十代っていっても、もうじき四十ですけどね。がんばー！」
部屋の湿度が上がったが僕の知った事じゃない。

…すっきりした。

第二十話 剣野ご乱心（後書き）

・・・コメディーってどう書けばいいんですか？何を書いたら面白いのかさっぱりです。

剣野が壊れるのはこの回だけです。次回には治ってるはずですよ。多分。というか、三月とキャラ被ってますね。

なんかシリアスばかり書いてて作者も壊れたようですね。

お読みになった方々、すいませんでした・・・

第二十一話 嘘は良くない

三月と共に教室に戻ってきた僕。

えっ、三月は保健室に置いてきたんじゃないかって？

…はあ、何を言ってるんだか。

僕は今屋上から戻ったばかりだし、剣野が壊れたなんて知らないから。

そうやって扉の前に立っていると、すごい勢いで扉が開かれた。

現れたのは剣野。

その剣野の顔はどこか驚いているようだった。

驚きたいのは僕の方だ。何でもうここにいる。

「春野五月、一体どこに」「はいはい、めんごめんご」

剣野を適当にあしらい教室に入る僕。

教室を見渡し目当ての人物を探す。

…いた。

結も千早も席に座っている。

しかし、千早は僕に気付くと安堵したように息を吐いたのに対して、結は俯いたままこちらを見ようともしない。

どうしたのだろうか？

気になった僕はゆっくりと結の席へ近づいていく。

なんだろう、近づく度に身体が重くなるような…

僕は身体を引き摺るように結に近づいていき

「お願い！群子ちゃん！」

結が叫ぶように誰かに呼びかける。

瞬間、地面から二本の腕が生え僕の足を拘束する。

「なっ！？」

「ようやく捕まえたよ。五月君…」

俯いたまま立ち上がる結。

いつもの結には無いどんよりとした負のオーラを撒き散らしている。

僕はそんな結が怖いので距離を取りたいのだが、
僕の足を掴む二本の手がそれを許さない。

この手はおそらく僕のクラスメートであり、結の親友の
窓手 群子
だろう。

彼女？（見たところ女性の手）は二本の腕だけの存在であり、普段
は床に溶け込み隠れている。

時々気付かずに踏まれたりする彼女の生態は謎であり、僕は一度も
会話を交わした事が無い。

…というか、結といる時も結が独り言を言っている様にしか見えな
い。

机から生えた腕と会話する、ろくろ首のような結。

物凄いシュールな絵面だ…

なんてのんびり考えている場合じゃない。

今の結はやばい。屏風の虎が飛び出してくるのよりやばい。

そう僕の生存本能が警鐘を鳴らしている。

「ねえ、五月君…私がどんな思いで待ってたかわかる？

あの時、頭に血が昇って酷い事しようとしちゃったから、

私、教室でずっと反省してたんだよ？なのに、なのに五月君は、

三月ちゃんと二人保健室でっ…！！」

顔を上げた結の表情は、まさしく現代に生ける鬼といった様相を呈
していた。

その顔を見た瞬間、僕の足は震え無様にも尻餅をついてしまった。

結の首は次第に長くなり僕の周りを囲み始めた。

僕は怯えて声ならぬ声を漏らすことしか出来ない。

「何か申し開きはあるかなあ、五月君…？」

にたりと口を歪め最後の慈悲とばかりに質問する結。

何故保健室での事を知っているのか分からないが、ここできちんと説明すれば助かる筈だ！

ひり付く喉を酷使し声を絞り出す。

「実は、僕は「エロい事をしてたぞ」

三月いいいい！！！！

余計な事言っんじゃねえええええ！！

ミキサーの中に放り込むぞ！！

結は眉をぴくりと動かし、能面のような表情になる。

「三月ちゃんは黙っててね…。今は五月君に聞いてるから。」

三月ちゃんは後で…ね？」

「ひゃ、ひゃい」

さしもの三月すら、今の結には逆らえないようだ。がくがくと震えながら首を何度も上下させている。

「五月君…もう一度聞くよ？」

申し開きは…ある？」

ここで選択肢を間違えたら地獄への片道切符を自分の命で支払う事になる。

慎重に答えなければ…

「え、えっと三月とは偶然保健室で会っただけで何も」「うそ」

「へっ?」

「五月君、嘔吐はどのなるか知ってる? 閻魔さまに、舌をね 抜かれちゃうんだよ」

「うわあああああああ……」

あがつ

ぐちゅ

ほらね

B
A
D

E
N
D

嘘です。

コンテンツリニューアルしますか？

第二十一話 嘘は良くない（後書き）

総表示回数が50000を超えました。有難うございます。

50000ともなるとお礼に何かしたいのですが、

せいぜい、いつもと違う話を書くかクオリティを向上させるぐらいしか思いつきません。

ただでさえ、最近は文章が駄目になってきているので、色んな意味でお返しがしたいです。

もし、これをやって欲しいという希望があれば気軽に感想の所にコメントを書き込んでいって下さい。

作者の技量の可能な限りで頑張ってみます。

読者の皆様ありがとうございます。

第二十二話 結の気持ち

にたりと口を歪め最後の慈悲とばかりに質問する結。

「五月君…もう一度聞くよ？申し開きは…ある？」

ここで選択肢を間違えたら地獄への片道切符を自分の命で支払う事になる。

というか、既に地獄を見たような…

ってそんな筈ないよな。

慎重に答えなければ…

「僕が三月といたのは本当だから、僕には何の弁解も出来ない。

結を心配させたんだ、罰は甘んじて受けるよ」

それは僕の偽らざる本音だった。

どうなるのかは分からないが、それで結の気が済むのなら本望だ。

「…っそ」

「えっ？」

「本当はね…そんなに怒ってないんだ。

でも、ちょっとだけは怒ってたから五月君に意地悪しちゃった。

「ごめんね…？」

軽く舌を出しておどける結。

だけど、僕にはそれが無理をしているように思えた。

僕は結の本当の気持ちが知りたい。だから、誤魔化さずにちゃんと結に伝える。

「結、僕に気を使わないでいいよ。僕は結の本当の気持ちが知りたい。

例え、それが僕を傷付ける事でも構わない。何も知らない方が、もっと辛いから」

今までの僕だったらきつと曖昧なままで終わらせていた。

でも、今はそんな中途半端な気持ちで結の傍にるのは相応しくないとと思う。

結には全てを話したいから。僕の過去も想いも全て。

「…そうだね。嘔吐きは閻魔さまに舌を抜かれちゃうもんね…」

私ね、本当は凄く怒ってるの。

だって、五月君は何も言ってくれないから。

五月君はいつも苦しそうだけど、何も聞いて欲しくなさそうだったから聞けなかった。

それに聞いたとしても、五月君は多分話さなかったと思うし。

五月君は優しいから、私に迷惑を掛けたくなかったんだよね。

でもね、何も言われない方がずっと不安で怖いんだよ？

私が少し目を離れた間にどこかに行って、そのまま帰って来ないんじゃないかって。

…ねえ、私はそんなに頼りないかなあ？

私も何か五月君の力になりたい。だって…

私は五月君のことが好きだからっ…!!」

瞳に涙を溜めながら、自分の想いを必死に伝えようとする結。

そんな結の姿に、僕の愚かさをまざまざと見せ付けられた気がした。

どうして、僕は結の気持ちに気付いてあげられなかったのだろう。

心配を掛けまいとした僕の行動が結を不安にさせていたなんて、僕は結のそんな気持ちを知る事もなく、知ろうとしなかった。

そうだ、僕はいつも結から貰ってばかりで何も返すことが出来ていない。

今からじゃもう遅いのか？

いや…そんな事は無い、まだ間に合う筈だ。

だから、伝えよう。偽りのない僕の本当の想いを。

「結は頼りなくなんて無い。僕はいつも結の優しさに癒されてた。

苦しい時でも結といれば嫌な事を忘れられた。

辛くても結と話してるだけで、僕の気持ちはどんどん軽くなるんだ。

結がいてくれたから、僕は諦めず頑張れた。

それは結にしか出来ない、結だけの力なんだ」

結が僕の支えになったように、僕も結の支えになりたい。

だから、自分をそんな風に卑下して欲しくなかった。

結は僕にとって掛け替えのない存在なのだから。

「結、僕は君に聞いて欲しいことがある。多分、結がずっと聞きたかった事だと思う。」

でも、その話を聞いたら結は僕を嫌いになるかもしれない。

それでも、知りたいと思ってくれるのなら、今日の放課後に教室に残ってくれないか？」

結の思いが本当なのは分かっている。

それでも、本当の僕を知ったら嫌いになる可能性だってある筈だ。だからこそ、結には本当の事を知ってもらいたい。

…こんな考える方をする自体が駄目なんだろうけど。

結局、ネガティブな考えをしてしまう僕。

でも、結はそんな僕の馬鹿な考えを吹き飛ばす言葉を放ってくれる。

「変わらないよ。私はどんなことを知っても五月君を好きでいる自信があるから。」

だって私が好きになったのは五月君の心だから。

表面をどれだけ偽っても心だけは誤魔化せないんだよ。知ってた？」

知りませんでした。

本当に結はすごいな。

さっきまであった、嫌な気持ち全部無くなってる。

今はただ素直に結を信じようと思える。

なんだか笑い出してしまいそうな僕は、結に言葉を返そうと思って、

「…二人とも、一応ここは教室なのだぞ？」

真剣なのは分かるが、そういった話は人のいない所でした方がいい。

…まったく、私も嫉妬で止めてしまいそうだった」

頬を少し膨らませ不機嫌そうに三月が言う。

三月の言葉で周りの視線に気付いたのか、真っ赤な顔をして席に戻る結。

話を中断された挙句、結に置いていかれた僕もようやく今の状況に気付いた。

…そういえば忘れてたけどここ教室だった。

第二十二話 結の気持ち（後書き）

最近、妥協して話を書いている気がします。そのせいで、コメディ部分もシリアス部分もとても中途半端になってます。

なので、とりあえずシリアス部分を完結させようと思います。

完結といっても後日談としてコメディを書いていくと思いますので、宜しければそこまでお付き合い頂ければ嬉しいです。

以上、作者の勝手な都合ですいませんでした。

第二十三話 覚悟

夕日で赤く照らされた教室の中。

そこにいるのは僕を含め六人。僕、三月、結、千早、剣野、依緒の六人だ。

僕は結だけではなく他の四人にも放課後に残って欲しい旨を伝えていた。

強制では無かったが、全員残ってくれたようだ。

「皆、僕の願いを聞いてくれてありがとう」

皆を見渡し、頭を下げ礼を述べる僕。

「三月の願いだ。私はどんなことでも聞くぞ？」

おどけた様に言う三月。

「そっだよ、五月君。…でも二人つきりだと思ってたから少し残念かな」

照れたように言う結。

「……………」

無言ではあるが、当然だとばかりに頷く千早。

「相談して下さいと言ったのは私ですから、話を聞くのは当然です」
淡々と、けれども嬉しそうな表情で言う剣野。

「そんなに畏まらないで下さいよ。先輩と私の仲じゃないですか」
無邪気に笑って言う依緒。

依緒の発言に皆の目付きが鋭くなる。

…はあ、今はそんな事をやってる場合じゃないのに。

僕は、そんな皆の気を逸らす様に大きな声で話す。

「ええーっと、皆にはこれからとある話を聞いて欲しいんだ。

多分、それは皆が気になっていたらけれど聞けなかったことだと思う。
皆は僕が何かしらの悩みを抱えていると思っている。それは間違っ
てない。

でもその悩みは最近始まった事じゃないんだ。その発端は今から六
年前に有ったとある出来事。

それをまずは皆に知って欲しい。構わないかな？」

そう言ったあと、一度口を噤み皆の反応を見る。

……どうやら、特に異論は無いようだ。

それじゃあ話そう。あの日の出来事を…

とある所に三人兄弟がいた。男の子が二人と、その妹が一人。

男の子二人は双子だったけれど、三人とも等しく仲が良かった。

男の子の一人は何でも出来て頼りになる子。

妹も色んな事を上手にこなせる器用な子だった。

でも、もう一人の男の子はそんな二人とは違って苦手なものばかりだった。

だけど、二人ともそんな男の子に優しくしてくれた。

いつしか、その男の子はもう一人の男の子を兄として慕う様になった。

実際は幼くして両親が亡くなったためどちらが兄かは分からなかったのだけど、

男の子にとっては憧れの存在であり、兄のような存在だったからだ。

三人の仲はとても良かったが、次第に男の子は二人から距離を置く

ようになった。

よくできた兄や妹に劣等感を感じ、自らを卑下する様になったから。それでも二人は変わらず男の子に接してくれる。

男の子はそれで十分だと思った。

こんな自分に優しくしてくれる人がいるのなら、それ以外はいらな
いとすら思った。

でもある時、男の子に優しくする女の子が現れた。

その女の子は男の子と友達になりたいと言った。

男の子はもう何も望むまいと思っていたが、

前からその女の子の事が気になっていたので、それに快諾した。

その女の子は兄と妹とも仲良くなり、

男の子の世界はその三人を中心に回るようになった。

男の子は幸せだった。

だから、気付けなかった。

いつのまにか自分の世界が歪んでしまっている事に。

歪みの中心は男の子であり、兄であり、女の子でもあった。

男の子は気付かなかったが、兄は女の子の事が好きだった。

そして、男の子は信じなかったが女の子は男の子の事が好きだった。
それに気付いていなかったのは男の子だけであり、兄も妹も気付い
ていた。

兄は表面上変わらず男の子に接していたが、内心では憎んでいたの
だろう。

やがて、その感情が爆発する。男の子を憎むあまり、兄が凶行に走ったのだ。

兄は刃物を持ち男の子の部屋に押し入り、男の子の女の子に対する感情を詰問した。

しかし、自らの世界を守りたかった男の子は、兄に協力しようと思っただ。

女の子の気持ち兄に向う様に手伝う。そう兄に言った。

しかし、男の子が良かれと思って言った言葉は兄のプライドをいたく傷つけた。

自らが心から望むものを易々と手放す男の子に兄は激昂した。

男の子に呪いの言葉を吐きながら切りかかってくる兄。

男の子は恐怖のあまり逃げ出した。

そんな時、不運にも妹が家に帰ってきた。

妹は兄の凶行を見て咄嗟に止めようと間に入る。

兄はそれに気付かず、

そのまま

ずっと話し続けていたせいか、喉に焼け付くような痛みを覚える。

若干乱れた呼吸を整え、再び皆を見渡す。

異様なほどの沈黙が場を支配していた。

誰一人言葉を発せようとせず黙り込んでいる。

皆、僕の言葉に固唾を飲み待っている。

しかし、僕はそんな皆に確認することが有った。

「皆。ここからの話を聞くためには皆に覚悟をしてもらう必要がある。

自らの命を賭ける覚悟。

それは、冗談でも誇張でもなく実際に命を落とす可能性のあるものだ。

一度話を聞けばもう後戻りはできない。それでも、皆は知りたいか

？」

僕の脅すような言葉に皆は薄く笑みを浮かべた。

まるで、それがどうしたと言わんばかりの顔。

皆もこれが比喩的表現で無いことは分かっている。

その上での満場一致での同意だった。

ならば、僕も覚悟を決める必要があるだろう。

皆の命を預かる決意。

そして、僕は語り出す。
これまでで、誰にも話した事のない話を。

「ねえ、皆は

悪魔って信じるかい

？」

もう後戻りはできない。

第二十三話 覚悟（後書き）

毎日更新と言っておいて遅れてすいません。

忙しいというのよりも、この「非日常は敵ですか？」を書くことに抵抗感があるからだと思います。

前は楽しんで書いていたはずなんですが、今では自分でもよく分かりません。

シリアスが終わったあとには、すっかりとした気持でラブコメを書けるように頑張りたいです。

一応シリアスは後数話続く予定ですが、もう話の流れは決まっているので早めに投稿していきたいです。

読者様、ありがとうございます。

第二十四話 殺意

それは僕がまだ小学五年生の頃の話。

その日の僕はいつも通り、部屋で本を読みながらくつろいでいた。そんな時

突然扉が凄い勢いで開け放たれた。

何事かと思い振り返る僕。

僕の瞳にはじめに映ったのは、鈍く光る包丁。

次に、それを持つ僕の兄の姿。

冗談のようなその組み合わせが、脳で上手く処理されず理解出来ない。

「え、お兄ちゃん？どうしたの……」

いつものように話しかける僕。

しかし、兄は眼を血走らせ荒く息をついている。

そんな絶対に有り得ない、異常な光景に現実感が湧かない僕は

「おい」

そのまま、疑問を重ねようとして

「なんで、おまえなんだよおおおおお！！！」

兄の突然の怒号。

その声にようやく現実を認識し始める。

兄はそのまま僕に馬乗りになると、
包丁を突き付けながら詰問を始めた。

「なあ、七月。どうしてお前なんだ？」

俺はお前より運動も勉強も出来る。

なのに、どうして叶野はお前を選んだんだ？」

それはおそらく、前からずっと思っていたことなのだろう。

兄の歯に着せない本音の言葉に、僕の心は刃で傷つけられたような
鈍い痛みを感じた。

それと同時に三月ちゃんが自分を選んだという事に疑問を覚える。

「お、お兄ちゃん…それは誤解だよ。

三月ちゃんはお兄ちゃんのことか」

「黙れっ！！お前の言うことなんて信じられるものか！

今までずっと俺の事を馬鹿にしてたんだろ？」

無駄な努力を続ける俺を裏で嘲笑ってたんだろ？

……俺がどれだけ頑張っても叶野は手に入らない。

それは全て…全てお前のせいなんだよおおおお！！」

弁解する僕の言葉には耳を重ねず、恨みを連ねる兄の姿に絶望する。

もはや、僕の言葉は兄にとって一切の意味を持たない。そう気付いたから。

それでも僕は、それを受け入れる事が出来ず言葉を重ねようとする。

「お兄ちゃん、僕は三月ちゃんのことは何とも思っていないよ！

それに、三月ちゃんもお兄ちゃんの事が好きだと思っよ。

だから、僕も三月ちゃんとお兄ちゃんが付き合えるように手伝っよ。ね？」

言いながら悪くない提案だと思った。

三月ちゃんと兄が付き合えば全てが丸く収まる。

そうすれば、いつもの優しい兄が帰ってくるはずだ。

兄もその言葉を聞いて呆けたような表情をしている。

ひょっとして分かってもらえたのだろうか？

「な

何事かを兄が呟く

「おにい」

「ふざけるなよ。手伝う…？」

お前が？何も出来なくて、俺の後ろを付いてくるだけのお前が？

ふっざけんじゃねええよっ！！何様なんだよてめえはッ！

俺を哀れみやがって……くそがつ……。

そうだ……そうだよ、お前さえいなければ良いんだ。

おまえさえいなければ　　っ！」

兄がその言葉を発した瞬間、瞳に残っていた僅かな理性が霧散する。代わりに瞳に宿ったのは純然たる殺意。

生まれて初めて浴びせられた殺意に僕の生存本能が反応する。

気が付けば兄を突き飛ばし部屋から逃げ出していた。

背後から音を立て追ってくる兄に恐怖を煽られ、

転がるように階段を落ちる僕。

僅かに意識が途切れ、視界がシャットダウンする。

視界が戻った瞬間に瞳に映ったものは包丁を持った兄の姿。

兄は歪んだ笑みを浮かべ僕に向けて包丁を突き刺す。

スローモーションのようにゆっくりとした映像に、

一つの影が飛び込んでくる。

そのまま兄は影に包丁を突き立てた。

影の背中から鈍く光る何か飛び出し、僕の顔に赤い液体が付着する。

これはなに？

「あ、うあ、あああああ………」

兄が何か呻き声を上げながら床にへたり込む。

兄は何か赤い液体で全身を汚していた。

僕の前にあつた影がゆっくりと傾いていく。

影はそのまま、床にばしゃりと音を立てて倒れる。

これはなに？

「ち、ちがう…俺が望んでいたのはこんなことじゃない…」

お、俺は桜を殺すつもりなんて 「

桜？

そうだ僕たちの妹だ。

今日は帰りが遅いのかまだ帰っていない。

じゃあこれは？

僕の目の前にある赤い何かで汚れたこれは

なに？

「うわあああああ」

誰かの絶叫。

それは兄の口から放たれていた。

「ああああああ
」

次第に絶叫は治まっていき、兄が地面に倒れ伏した。倒れた兄の瞳には何も映っておらず、僕に死んだ魚の眼を連想させた。

「……………」

僕はこの狂った非日常の世界の中で一人考えていた。

何が原因なんだろう？

どうすれば良かったのだろうか？

どうして桜は死んで

死んで？

桜が死んでいる。

それを認識した瞬間、腹の底から嘔吐感がせり上がってくる。

そうだ、僕の前に倒れているのは桜だ…

倒れた桜は全身を赤く染め、光を失った瞳はかつての桜からは想像出来ないほど濁っている。

もはや動くことのない妹の姿に、何も考えられず

妹と目が合った。

それは錯覚や気の所為で有る筈が無い。

確かな意思を持った明確な動きだった。

次いで指が動く。

力を込めるかのように指が閉じられていく。

次に腕。

腕を胴体へと引き寄せ身体を持ち上げていく。

そうして少しずつ身体を動かしながら起き上る妹。

実は死んでなんていなかったの？

そう思ったけれど、それは即座に否定された。

妹の口から放たれた言葉によって。

「……………やあ、初めまして。一応、自己紹介をしておきましょう。」

私は悪魔です」

にこやかに告げるその姿に桜の面影は一切無い。

それが僕と悪魔の出会い。

第二十五話 契約

「 私は悪魔です」

桜の口から発せられた言葉はにわかには信じ難いことだった。

けれど、死んだ筈の桜が動いていることや、

今の桜が普段と全く違う雰囲気を感じていることから、僕はその言葉を疑わなかった。

非現実な惨状が僕の間接感を麻痺させていたことも一つの要因だっただろう。

「…その悪魔がどうして桜の中にいるの…?」

僕の言葉にはやや陰が含まれていた。

ただでさえ理解の追いつかない現状なのに、悪魔と来たものだから、自然と邪険になってしまう。

「ふふ、別に悪い様にはしませんから。」

あなたは悪魔をどんな存在だと思ってますか?」

「どんな存在って…そりゃ悪魔って言っくらいだから悪いんじゃないの?」

少なくともいいイメージなどは無い。

正直、今話しているこいつもどこか胡散臭い。

「いえいえ、そんなことはありませんよ。」

悪魔というものは契約を結ぶ存在なのです」

「契約…？」

「そう、悪魔は人の強い思いに呼ばれ世界に召喚されます。」

呼ばれた悪魔は対価をもらい願いを叶えます。それが契約。

つまり、私は七月様の願いを叶えに来たのです」

僕の願いを？

もしそれが本当なら全て元通りに出来るかもしれない。

僕は藁にも縋るような気持ちで悪魔に質問する。

「ねえ、桜はもう死んでるの？もし死んでるのだとしたら…」

生き返らせることは出来る…？」

そうだ、桜が死んだという事実さえなければまだやり直しは利く筈だ。

それが可能なら例え僕の命を対価にしてもかまわない。

「今、桜様は私が入る事で死ぬことは免れています。」

しかし私がいなくなれば、たちどころに死んでしまつてしょう。
それを願い事として回避することは可能です」

「ならっ！僕の命を対価に」

「……そんな簡単に投げ出せるものに価値など有りませんよ。

あなたは勘違いしているのかもしれませんが、

努力も無く願いが叶う程、世界は甘くありません。

願いには相応の苦勞や苦惱、対価として相応しいものが必要なので
す」

「じゃあそれを教えてよ！」

悪魔の回りくどい言い方に次第に腹が立つてくる。

「契約をすると約束して頂ければお教えします。

しかし、一度聞けばもう二度と後戻りできません」

「わかったよ！契約するっ！これでいいんだろっ！」

悪魔の言葉に深く考えず即答する僕。

そして悪魔は、今後僕を縛りつける最悪の対価を提示する。

「あなたの大切な人の命です」

…いま、悪魔は何て言った？

大切な人の命？

それは

「つまり、五月様の命です。簡単でしょう？

あなたには一切危害は加わりません。

それではさっそく契約を

「ま、まって！それ以外じゃ駄目なの！？僕何でもするから！」

僕の必死の制止に考える振りをする悪魔。

おそらく僕がこう言うのは予想通りだったのだろう。
にやりと笑って僕に代案を示した。

「では、私と賭けをしませんか？」

「賭け…？」

「賭けに勝てば命を奪わず願いを叶えます。しかし、負ければ五月様の命を頂きます。」

これが私の出来る最大の譲歩ですね。さて、七月様どうしますか？」
良く考えればこれは破格の条件なんじゃないか？

普通なら対価が必要になるけれど、上手くいけば何も犠牲にしない
ですむ。

兄が対価なのは決定事項のようなだし、断る理由なんて無い筈だ。
安直な考えで決断を下す僕。

どちらにせよ受ける以外の道なんて無かったのだけれど。

「わかった、その賭けに乗るよ。どうすればいいの？」

「私と鬼ごっこをしてもらいます。」

もちろん、ただの鬼ごっこではありません。

賭けるのは、先程提示した条件五月様の命です。

それでは、鬼ごっこのルールについて説明させて頂きます」

悪魔なのに鬼ごっここというのに違和感があるが、
今は悪魔の言葉に耳を傾ける必要がある。

僕は一字一句も聞き逃すまいと悪魔の話に傾聴する。

「鬼ごっこは七月様の学校の登下校中に行います。」

七月様の勝利条件は、私を鬼ごっこ中に十秒間動きを止める事。それだけです。

七月様の敗北条件は、一時間以内に学校に辿り着けない事です。

つまり、一時間以内に学校に着けば敗北は免れます。

鬼ごっこは七月様が勝利、もしくは敗北するまで行われます。

七月様、ここまでで何か質問は有りますか？」

僕の学校は比較的近いので、大体十分程で着ける。

つまり悪魔を捕まえるのに固執して、時間に間に合わないという事なんだろうか？

それに他の人にそんな姿を見られたら不審に思われたりはしないのだろうか？

僕がそう疑問に思い、質問をする。

「七月様には言い忘れておりましたが、鬼役は七月様だけではありません。

私も七月様を捕まえて学校に行くの妨害する鬼役なのです。

あと、鬼ごっこ中は他人に視認される事はありません。

七月様も私も、誰にも見られず安心して鬼ごっこに専念が出来ます」

悪魔の言葉に愕然とする僕。

僕が捕まえるだけならばまだ希望もあったが、悪魔が妨害するとなると可能性は限りなく低くなる。

それに他人に見えないということは、誰かの協力も仰げないということだ。

そもそも、この悪魔の力が未知数な時点で既に絶望的なのかもしれない。

僕がそう思っていると

「ああ、また言い忘れていましたが、

私との契約の事を知ってもらえば、誰でも鬼ごっこに参加して頂いても大丈夫です。

ただその場合、その人たちも契約に組み込まれます。

つまり、敗北すればその人たちの命も対価として頂きます」

悪魔は何でもない事のように言い放った。

結局、誰の力も借りられない。

僕一人でやり遂げるしかない。

「では七月様、いきなり始めるのでは七月様には不利でしょう。

ですので、これから一週間程はお試し期間を設けます。

これは私との鬼ごっこの練習のようなものですので、敗北条件は有りません。

ただ勝利条件は有効ですので、この期間に可能ならば達成して頂いて構いません。

準備が終わったら呼んで下さい。特別な空間に移動させて頂きます」

これはチャンスなのだろう。

悪魔も油断している筈だし、ひよっとすれば可能かもしれない。

僕は決意し悪魔に話しかける。

絶対に勝ってやる。

第二十六話 悪魔

悪魔と僕と兄は三人で見たことも無い空間にいた。

そこでは、疲れる事も痛みを感じる事も無く、お腹がすくことも無い。

ここは鬼ごっこに専念できる、最高の環境の筈なのだ。

その筈なのに僕は悪魔を捕まえるどころか、一度も触れることすら出来ない。

悪魔の逃げる速度は僕とほぼ同じ。

お互いに疲れる事が無いので永遠に鬼ごっこが続くのだ。

しかも、何も無い延々と続く、奇妙なマール模様の世界が精神的な疲労を蓄積させる。

僕が一度心を落ち着けるために止まると、悪魔が話し掛けてきた。

「七月様、そろそろ一週間が立ちますので通常空間に戻りますね」

もうそんなに時間がたっていたのか…

まだ全然捕まえないのに、一体どうしたらいいんだろう…

僕が不安に思っていると視界がぐるりと回る様な感覚。

気が付けばそこは僕の家だった。

「それでは、明日からは本番ですね。頑張ってください」

嫌味のような悪魔の言葉を聞いて、僕はある事に気付いた。

今の兄は何にも反応せずずっと黙っている。

その上かつての僕と同じだった銀の髪は白くなってしまっている。
このままでは学校を休ませるしかない。

それに、兄を心配しているだろう三月ちゃんには何と言おう。

悪魔のことは誰にも話せない。

となると、兄の事も何と説明していいのやら僕には分からなかった。
僕はこんなことになった兄の事を誰にも知られたくない。

兄は皆に尊敬される素晴らしい人だ。そのイメージを壊したくなかった。

悪魔にそのことで意見を求めると、とんでもない事を言い出した。

「私は一週間前に、桜様を事故死として扱うよう様々な人の記憶や記録を改ざんしています。」

これ以上の記憶の改ざんをすると更なる対価が必要になりますが、それでもよろしいですか？」

よろしい訳が無い。

しかし、桜の事はかなり助かった。

兄は生きているからいいが、いなくなった人間の説明なんて出来る筈が無い。

鬼ごっこが長期化すれば誤魔化しも利かなくなるだろう。

ならどうすれば……

「七月様が五月様になればいいのではないですか？」

悪魔の突然の提案に理解が及ばない。

僕が兄になる？

どうやって？

僕の疑問顔に具体案を示す悪魔。

「七月様が気にしているのは五月様の体面ですよね？」

でしたら、正常な七月様が五月様を演じればいいんです。

双子ですから見た目も変わりませんからね」

簡単そうに言う悪魔。だけど、僕なんか兄のようになれる筈が無い。

それに、そんなことをすれば本当の兄はどうすればいいのか。反応が無いのを利用して僕だと言い張るつもりなのか？

そんな僕の疑問に答えるように話は続く。

「七月様が五月様になる。」

そして、五月様には七月様になってもらえばいいんです。

まあ、五月様は記憶ごと七月様になってもらいますが」

記憶ごと…？

「先程は記憶の改ざんに対価が必要と言いましたが、五月様一人なら問題ありません。

そこで、五月様には自身が七月様であると認識してもらいます。

そうすれば、桜様を殺害したことも忘れ以前のように会話することも出来るでしょう。

ただ…シヨック状態を無理矢理解除する訳ですから、身体に何らかの異常が出るかもしれません。

しかし、これが最も誰にとっても問題のない解決策でしょうね。

それでは七月様、どうなさいますか？」

…確かにそれなら色々と誤魔化しは利く。

問題なのは僕が兄を演じきれるかということ。

(これは技術的な問題が多い。余程努力が必要になるだろう)

もう一つが全てが終わった後の事だ。

「…ねえ、もし僕が勝ったらお兄ちゃんの記憶も元に戻るの？」

例え僕が勝ったとしても兄が自身を七月であると認識していたら意味が無い。

「その辺りは安心して下さい。七月様が勝利すれば、記憶の改ざんは全て解けるようになっております。」

ついでに五月様の記憶から桜様の死についても取り除いておきますよう。

あと、桜様の事故死という事実も解けますので問題ありません」

胸を張って言う悪魔に疑問を覚える。

悪魔にそこまでするメリットがあるのだろうか？

「人間の方々には分からないかもしれませんが、

悪魔は人間に願われて初めて存在できるのです。

故に悪魔は願いに関しては真摯であるべきだと考えています。

過不足なく願いを完遂する。それが悪魔の存在理由です」

それは今まで見た悪魔のどの表情よりも真剣で、おそらく本当なのだろうと思った。

ただ、その瞬間に今まで気付かなかったことに気付いた。

桜を事故死扱いにしたが、悪魔が桜を演じれば早かったのではないか？

僕がそう伝えると、こともあろうくに悪魔はここのたまった。

「やですよ、めんどくさい。」

もとい、色々人の世界に入ると誤魔化しが利かなくなりますからね。世の中には勘の鋭い方がいますからね。ばれる可能性もあります」

最初の言葉が本音のように思えて仕方が無い。

僕がそう思って、じと目で悪魔を見ていると、

突然、頬に手を当て恥ずかしがるようにもじもじとし始めた。

桜の格好でそんなことをやられると途轍もない違和感がある。正直止めて欲しいのだが、そのまま悪魔は僕にとんでもない提案をした。

「賭けの勝利後のアフターケアは私のサービスですので、

対価は頂きません。代わりにお願いがあります。

私を妹として扱ってくれませんか？」

悪魔の訳の分からない提案に啞然とする僕。

それに一体何の意味が？

「私は今、桜様の身体をお借りしています。

それによって桜様の命は保たれていますが、精神はそうはいきませ
ん。

妹と認識されず悪魔と思われ続けると精神が歪んでしまうのです。

なので、私を妹扱いする必要があります。

だから私は七月様を兄と呼びたいのです」

明らかにこじ付け臭い上に、本音が最後に出ている気がする。

でも、悪魔の機嫌を損ねるのは得策じゃない。

だから、兄と呼ぶことは一応許可はしておく。

別に桜になり替わる訳じゃない。ただ僕を兄と呼ぶ存在が出来ただ
けだ。

「うん、分かった。好きに呼べばいい」

「…うん、じゃあよろしくねお兄ちゃん」

急に話し方が変わったな。

桜は僕をななちゃん呼ばわりしていたから、その顔で言われると違
和感がある。

「お兄ちゃん、私はななちゃんの治療をしてから準備しといてね」

…そうか、ななちゃんはもう兄のことなんだ。

だったら僕も春野五月として振舞う必要がある。

「ああ、分かった。俺も準備をしてくる」

「……お兄ちゃんは俺って似合わないね。

これからは、俺禁止ね」

無茶苦茶な事を言う妹。

一体どうしろと？

「頑張つて理由を付けて学校でも僕って言う事。

じゃないと……」

じゃないと……？

「殺しちゃつよっ」

首筋に冷たい感触。

後退り首に手をやるとすっぱりと切れていた。

「ふふふ、日和られても面白くないから、油断はしないでね。

いつでも、私はお兄ちゃんを殺せるんだから」

嬉しそうにそう言って七月を連れて奥に消えて行った妹。

僕は本当にこんな生活を続けられるのだろうか？

不安で堪らなかった。

けれどももう後戻りできない。

僕の世界は非日常に埋め尽くされてしまったのだから。

僕がこれ以上何も失わないよう、そして…

「僕の平凡な日常を取り戻すためにも………」

負けられない

第二十七話 作戦

夕日で染まる教室。ずっと話し続けていた僕はようやく一息つくことが出来た。

しかし、本題はこれからだ。

「……ここまで聞いてもらったら分かると思うけど、

僕は春野五月じゃない。春野七月なんだ。

その事を知っているのは今までは依緒だけだった。

依緒とはちょっとした事情があつて話すことになつたけど、

その原因について話すのは今回が初めてなんだ」

周りを見渡すが皆一様に口を噤んでいる。

でも、瞳を見れば皆が僕の話を書わすに聞いてくれていたことが分かる。

なので、僕は構わず話を続ける。

「僕は話す前に、皆に命を賭ける覚悟をしてもらつ必要があるって言ったよね。

今の僕の話信じるのなら分かってもらえらると思つ。

……僕は自分の都合で皆を巻き込んだ。

責めてくれても構わないし、全てが終わったらどんな罰も受けるつもりだ。

でも、その前に皆の力を貸してほしい。

こんな脅すような形になって皆には申し訳ないけれど

「

そんな僕の懺悔を遮るように三月が言葉を重ねた。

「七月。どうして私が君を責められようか。

原因は私に有ると言っても過言ではない。

むしろ罰を受けるなら私だけで十分だ」

三月は辛そうな表情で言う。

だから僕は今まで、三月にだけは知られなくなかった。でも、これは三月だけが責任を感じる必要なんて無い。

「違うよ、三月。三月だけの責任じゃない。

五月にも責任はあるし、僕にも責任がある。

けど大切なのはそれを論じる事じゃない。

これからどうしていくかが重要なんだ。

そう、全てを終わらせるために」

今は、罪悪感で自己犠牲になるうとする時じゃない。

皆で力を合わせて戦うべき時なんだ。

「そうだよ、三月ちゃん。

私たちはやっと五、えっと七月君を苦しめていた原因を知ったんだよ。

だったら、やるべきことは一つだけだよ」

結は三月を励ますように激しく首をつねらせる。

「……………！」

千早も励ますように肩を叩きながら頷く。

「……………それで春野七月に聞きたいのですが、

その悪魔というものはどのくらいの強さなのですか？」

剣野は、皆も気になっていたのだろう質問をした。

「僕と千早二人掛かりで何とか出来る位の強さだ」

「ずいぶんと具体的ですね」

「以前に千早と二人で戦って何とか助かったことがある」

一週間程前、僕は千早に助けられ共に悪魔と戦った。

しかし、話を聞いた剣野は疑問に思ったようだ。

「悪魔と戦えるのは契約のことを知っている人だけで、あなたと悪魔の姿は見えないはずでは？」

先程あなたは今回初めて話したと言っていましたか…？」

剣野の疑問ももつともだ。

しかし、僕もこの事についてはあまり理解していない。

「うん、そのはずだったんだ。でも、僕が危険になったとき

突然千早が現れて助けてくれた。悪魔は今回は特別だって言っていたけど…」

ねえ、千早はあの時僕の事が見えてたんだよね？」

僕の言葉に無言で頷く千早。

僕は悪魔の気紛れではないかと思っ
ているけれど、真相は定かじや
ない。

「……そうですね。分からないのならばとりあえずこの話は置いておきましょう。」

それより、あなたは今日中に決着を付けるつもりですか？」

「うん。僕が皆に全てを話したことは、悪魔ももう知っていると思
う。」

戦うならば本当は朝が良かったんだけど、登校の条件は自宅からのス
タートだから、皆バラバラで行かなくちゃならないんだ。

悪魔は鬼ごっこ中に命を奪う事は無いって言ってたけど、一人でも
敗北条件を満たせば負けになる。

それに皆の命が掛かっている以上一回で終わらせたい。だから、日
が暮れる前に始めたい。

僕はこのまま校門に向かいながら話すのが一番いいと思う。皆もそ
れで構わないかな？」

僕の言葉に皆が頷き、教室から出る。

歩きながらも会話は続ける僕達。

「先輩は何か作戦とか考えているんですか？」

「……いや、一切考えてない。」

登下校中は危なくて逃げるので精一杯だから仕掛けも出来ないし。

外に僕が出かけると悪魔も付いてくるから何も出来ない。

作戦といっても戦うための連携くらいだけど、

今日いきなりで付け焼刃を仕込んでも逆効果になりそうだから」

まあ、確かに今回のために色々準備出来たら良かったんだけど、

武器も気が付いたら悪魔に破壊されていて、結局諦めたんだよなあ。

「つまり、ぶつつけ本番という訳か。」

では戦闘隊形だが、前衛で戦うのは私と剣野で構わないな？」

確かに剣野は近接攻撃しか出来ないし、三月の耐久力と再生能力を後衛で腐らせるのはもったいない。

でも僕は？

「七月は……危ないから後衛だな。応援とかしててくれ。」

三上と磯木はリーチを活かして捕縛に挑戦してくれ。

米良は見たところ戦闘要員ではないようだし七月のバックアップだな」

僕のバックアップって応援じゃん。
というか僕の配置が気に食わない。

「三月、僕は六年間ずっと悪魔と戦って来たんだよ。

悪魔に一番詳しいのは僕なんだ。だったら、僕も前衛でサポートが出来るかもしれない」

「ああ、そうだな。だが七月がいたら剣野が思い切り戦えない。

私は切られようが平気だが七月には致命傷だ。

それに七月が倒れたとなると私たちの士気にも関わる。

辛いかもしれないが後衛で私たちの事を信じて待っていてほしい」

なんだかうまく言いくるめられた気もするが、三月の言う事は間違っていない。

剣野の戦闘能力は僕なんかよりも遥かに優れている。
それを発揮できないのは痛いだろう。

けれども、結局人頼みにしか出来ない現状がとても歯痒い。

僕が終わらせるべきことなのに…

これで負ければ僕は大切な人が誰もいない世界で一人で生き残る事になる。

それが堪らなく怖い。

だからこそ、絶対に負けられない。

三月はああ言ったが、それでも皆が危なければ危険も顧みず助けたと思う。

もちろん死ぬ気は無い。

そんなことしても誰も喜びはしない。

だから僕は、死なずに誰も死なせない決意をする。

そして、僕の願いを叶える。

それは、最高のハッピーエンドだ。

歩き続ける僕の視界に校門が映る。

あともう少して最終決戦の地へ辿り着く。

僕達は校門の外まであと一歩というところで足を止める。

その時、何も無い空間から桜の姿をした悪魔が現れる。

「……よく、来てくれたねお兄ちゃん」

これが最終決戦だ。

第二十七話 作戦（後書き）

今日中に全て終わらせたかったんですが少し無理みたいです。
頑張って明日の昼までには書き終えるようにします。
しばし、お待ちいただけると嬉しいです。

第二十八話 最終決戦

夕日を背負った悪魔は校門の前で悠然と佇んでいた。その表情は逆光で推し量る事が出来ない。

「お兄ちゃん、皆に協力してもらおうことにしたんだね」

「・・・」

「昔のお兄ちゃんだったらそんなこと思いつかなかっただらうね。本当に強くなったよお兄ちゃんは。」

「……でも、これでお別れだよ。これ以上は語る必要なんて無い。これで、最後にしてあげる。」

「じゃあ始めようかお兄ちゃん」

悪魔の言葉と同時に校門の外へ足を踏み出す。

皆も悪魔を捕らえるため肉薄しようとして

悪魔は逃げの一手に出た。

「なっ!?!」

まさか逃げるとは思わなかった僕は動揺してしまった。

お試し期間中は別にして、これまで悪魔が逃げる事など一度も無かったのだ。

悪魔は既に影も形も無くなっていた。

皆も悪魔の潔い逃げっぷりに戸惑っている。

とりあえず全員で追いかけてよととして、三月から制止が掛かった。

「待てっ! 皆で追えば一番遅いもののペースに合わせなければならなくなる。

それでは時間の無駄だ。だから、ここは四手に別れた方がいい」

三月の提案では危険だと反論しようとしたが、それを遮り言葉を重ねる。

「ここで一番危ないのは戦えない米良だ。だから米良は七月に家まで送ってもらおう。

米良はそのまま自宅で待機だ。その後、米良は七月に携帯を渡してくれ。

七月は携帯を持っていないからな。悪魔を見つけ次第連絡する」

「っ…分かりました。じゃあ電話番号を」

「七月の周囲の女の事は知り尽くしているから大丈夫だ！

三上と磯木は共に行動してくれ。どちらかを囿にしても構わないから連絡を頼む。

私と剣野は単独で悪魔を追う。行くぞっ！」

「って待つてよ！三月！そんなの危険すぎるよ！」

三月の無謀な提案に納得できず呼びとめる。

「七月！今はそんな事を言っている場合じゃないんだ！

明日になればおそらく米良が真っ先に狙われる。

米良じゃなくても三上が狙われれば結果は同じだ。

どちらにせよゲームオーバーだ。それじゃあ意味が無い。

だから、今日どれだけ無茶しようとも終わらせなければならぬ。

こうして話している時間すら惜しいんだ。

七月、頼む私達の事を信じて任せてほしい」

こんな風に頭を下げる三月を僕は初めて見た。

冷静になってみると僕には三月以上の案を持っていないことに気付く。

つまり、僕に出来る事は決断することだけだ。

だから僕も信じよう皆の事を。

「わかったよ三月。行こうっ、依緒！」

僕は依緒の手を取り走り出す。

皆も思い思いの方向へ走り出した。

「依緒の家ってこっちだったよね」

以前に依緒から聞いた話だと、僕の家と割と近かったので五分程で着く筈だ。

僕はその確認を取るも依緒から返事が返ってこない。

「依緒…？」

「…先輩、ごめんなさい。私がいなければ先輩も一緒に探せたはずなのに。」

私が足手まといだから

「

この期に及んで自分を卑下する依緒。

僕はそれが許せなくて言葉を遮った。

「ストロップ！それ以上は言ってもしょうがない事だから言っちゃ駄目だよ！」

僕は依緒に知って欲しいと思った。だから、話したんであって、

僕は依緒をそんな風に悲しませたい訳じゃない。今回はこれが最善だったってだけだよ。

依緒は絶対に足手まといなんかじゃない。分かった？」

言い含めるように依緒に言うが、依緒は無言で俯いてしまったので効果があったかは分からない。

でも、強く握り返された手を信じて、振り返らず走り続ける。

三分程走った頃、依緒が声を掛ける。

「どうやら、着いたようだ。」

「依緒、それじゃあ僕は皆に加わるけどそれを気にしすぎちゃ駄目だよ」

「ふふっ、分かってます。先輩：頑張ってください」

笑みを取り戻した依緒は、そう言って僕の頬に口付けた。

「帰ってきたらもつと凄いご褒美をあげます。だから……帰ってきてください先輩」

依緒は僕に悪戯つぱく笑いかけ携帯を手渡し、家の中に入って行った。

僕は踵を返し学校への道を引き返す。

再び学校に戻ってくる頃に電話が振動する。
おそらく三月からだろう。
僕は走りながら携帯に出た。

「もしもし、三月か？」

「ああ、そちらは無事に米良を送り届けたようだな」

「うん、三月の方はどう？」

「いや、まだ見つかっていない

どこに逃げるかの見当も付かないからな。

七月は何か心当たりは無いか？」

「ううん、悪魔が逃げるのも初めてだから見当もつかないよ」

「あの反応からしてそうだとは思っていたがな。」

まあ、焦っても仕方が無いゆっくりと

「三月？もしも三月？…三月っ！」

突如携帯からの三月の声が途切れた。

まさか悪魔に……？

っつ、そんな筈が無い！三月の無事を確認しなきゃ！

僕は三月を探すべく当て所も無く走り出した。

無事でいてよ三月！

「はあ、はあ……」

時間を確認する。後、十分も無い。

皆とは一度も会っていないし、悪魔も見つけていない。

でも諦める訳にはいかない。

悪魔を見つけて勝つ。

それで全てが終わる。

それだけが、僕の身体を動かしていた。

「頑張るね、お兄ちゃん」

後ろから声がした。

振り返り悪魔を視認。

同時に殴り掛かる。

「せっかちは嫌われるよ？」

僕の拳が当たる直前、身体が大きな何かに吹き飛ばされる。

受け身は取ったが身体にはかなりのダメージを受けてしまった。

しかし、構わずに悪魔に向かっていく。

悪魔の姿を目に捉え手に持つ物を確認する。

それは

「……なんで、お前がそれを」

剣野の大剣だった。

まさか、剣野がやられたのか？

「お前っ、剣野に何をっ

」

悪魔に問い詰めようとした瞬間、

悪魔の手が伸び僕の首を掴んだ。

「がっ…!?!?」

そのまま凄い力で引き寄せられる。

抵抗も出来ないまま悪魔の眼前まで来た僕は、

悪魔の背中から無数の触手が生えているの目にした。

それは、僕がよく見慣れている千早の

僕のその考えを遮るように触手の一本が首に吸いついた。

同時に首にチクリとした痛みを感じる。

悪魔は手の拘束を解き、僕はそのまま地に倒れ伏してしまった。

すぐさま立ち上がるうとして気付く。

身体が全く動かせない。

まさか、先程の触手が

「お兄ちゃん、知ってた？千早さんの触手には獲物を麻痺させる針があるんだよ」

……！やっぱり、あれは千早の触手だったのか！

ということはさっき手が伸びたのは結の力なのか？

こいつ……！皆に何を……！

「安心してよお兄ちゃん。少し皆の力を借りてるだけだから。皆の命には一切の別状は無いよ。」

ふふ、でもここまで上手くいくとは思わなかったよ。

私が恐れていたのは三月さんだけだったから、皆の力を手に入れて倒そうと思ってたんだ。

思ったより執念深かったから思わずやりすぎちゃったけどね」

逃げるのが目的じゃなくて皆を分散させるのが目的だったのか……

そうだ、こいつはこれで最後にすると言った。

初めから逃げるつもりなんて無かったんだ。

僕たちはまんまとこいつの考え通りの行動を取ってしまったんだ。
例え僕たちが固まって行動してても明日になれば悪魔の勝ちになる。
だからこそ、ここで終わらせなければならぬのに、
僕の身体はどれだけ力を込めようとも動こうとはしない。

「じゃあ、おわりにしようか？」

悪魔が一步步僕の方へ近づいてくる。

……これで、終わりなのか？

悪魔は僕の一步手前で足を止め

夢の終り

悪魔は僕の一步手前で足を止め、
そのまま一切の動きを停止した。

そのまま時間がたつ。

十

九

僕の勝利条件は悪魔の動きを十秒止める事。

八

七

僕の敗北条件までは後五分程ある。

六

五

動きを止めたまま

四

三

全く動こうとしない悪魔

二

一

そしてそのまま

零

「これで……終わりだねお兄ちゃん」

僕に近づき触手を再び首に当てる。

同時に首に痛みが走るが、身体が動かせる事に気付く。

「……なんで」

あまりの理解出来ない現状に言葉が出てこない。

悪魔はそれを見て、慈しむような表情で笑いかけた。

「お兄ちゃんの勝ちだよ。」

だから、お兄ちゃんの本当の願いを叶えてあげる」

僕の本当の願い…？

「お兄ちゃん、私は桜が死んだときにここに呼ばれた訳じゃないんだ。」

それよりもっと前にお兄ちゃんの願いに呼ばれてこの世界に来たの。

それは、五月お兄ちゃんみたいになりたい、という願い。

でも、その願いを叶える事は出来なかった。

強い願いだけけど、叶わなくてもいいって思いも強かったから。

それに私達悪魔は誰かの身体を借りなければ生きていけない。

生きた人間に無理矢理入れればその人間の心は壊れてしまう。

だから、わたしはずっと見ていることしか出来なかった。

でも、お兄ちゃん達の事を見ている内に、私にも少しずつ変化が出

てきた。

私も皆と遊びたい。傍にいてお喋りがしたい。そう思う様になったの。

そんな私はある日とても強い願いに気付いた。五月の強い願い。

それはお兄ちゃんへの強い願いだった。私はそれを叶える為に少し背中を押してあげたの」

それまで黙って聞いていたが悪魔の発言に見逃せないものが混じっていた。

五月の願いの後押し？つまりそれは

「つつ！お前がお兄ちゃんにあんなことをさせたのかっ！」

激情に頭が支配される。しかし、悪魔はそれに悲しそうに首を振った。

「初めの切っ掛けはわたしだよ。でも例え私が放っておいてもいつか同じ事は起きていた。

それだけの感情を五月は抱いていたんだよ」

その言葉に言葉を失う。

それじゃあどうやって回避できない事だったのか…？

「…お兄ちゃんの対応も関係が無いよ、あれは起こるべくして起きた事だから。」

でも、桜の死は違う。あれはただの不運だった。本当は死ぬ予定だったのは五月だったの。

私はただ、お兄ちゃんが死なないように確率の操作をしたの。それで、桜が犠牲になった。

私は初め五月の身体に入って願いを叶えるつもりだったけど、

予定を変えて桜の身体に入る事にしたんだ。

そして、私はお兄ちゃんの願いを五月を演じさせることで叶えようとした。

結果としては上手くいった。お兄ちゃんは五月という存在にとても近づけた。

だから、私はすぐに負けて桜を生き返らせようと思った。

……でも、お兄ちゃんを見てたらもっと幸せになって欲しかった。

これまでの辛い過去も無い、それでも沢山の人に愛される。そんな最高のハッピー・エンド。

それをあげたいと思った。でも、そのためには対価が足りなかった。だから私は

悪魔のその台詞に今までの事が繋がっていく。

今日の事でも分かるように悪魔はおそらく手加減をしていた。

僕に捕まらず、捕まえないぎりぎりを狙ったの事だ。

一週間前も僕が逃げるのを諦めてしまったから、千早を招き入れた。

そして、五月に接触することで僕の危機感を煽る。

イレギュラーこそ有ったが、結果として僕は皆に頼る事を決意した。

そして、今日の鬼ごっこで皆から対価を手に入れた。皆の力だ。

「七月様の大切な人達から対価をもらうことにしました。

そしてようやく私が全ての願いを叶えられるほどの力が溜まったんです。

以前に言いましたよね、願いには相応の苦勞や苦惱、対価として相応しいものが必要だと。

七月様のこの六年間は無駄ではありませんでした。七月様は強くなられました。

そして、掛け替えのない人達を手に入れました。

皆、七月様の為に命を掛けられるほど強い絆を持った人達です。

以前の七月様ではきつと成し遂げる事の出来ない願い。

ですが、六年もの決死の努力が願いを叶える対価となったのです」

悪魔は初めて会った時のような口調で嬉しそうに話している。

僕はそんな悪魔の話聞いていて気付いたことがあった。

悪魔は僕が五月になりたいという願いを叶えるため、五月の後押しをしたと言った。

でも、桜の身体に入った後の悪魔の言葉は、初めから全て計算尽くしたように思える。

特に鬼ごっこのルールで、契約について話した人を対価とする制度は、僕が人に頼れるようになるために追加したような節がある。

「……それでは、そろそろ願いを叶えましょうか。」

桜様の死も無くなり、五月の殺意も二度と湧かないようにします。

そして、七月様のこれまでの努力で得たものは失われません。

お友達もそのままです。七月様の能力もそのまま。まさにハッピーエンドです。

……まあ、私の記憶は一切無くなりますがそちらの方が幸せでしょう」

こんなに最高のプレゼントを貰っても本当にいいのだろうか？

ご都合主義のすぎる展開に思わず悪魔をじっと見る。

すると突然、頬に手を当て恥ずかしがるようにもじもじとし始めた。

なんだろう……前にも見たような気がする。

以前はこの後に訳の分からない要求をされたんだよな。

「……七月様、実は対価なんですけど余剰分がまだ有るんですよ。」

より良い悪魔は過不足なく願いを叶える必要があります。

なので、他にも何か願いは有りませんか？

ちょうど人一人の人生をどうにかできるぐらいなんですけどね……？」

ちらちらと僕を見ながら期待する様に言う悪魔。

そもそも、人一人の人生をどうにかできるって対価取りすぎだろうに……

僕がそう思っていると凄く恐ろしい事に気付いた。

こいつは先程の話で皆と遊んだり話したいと言った。

それは、人の身体を借りないと生きていけない悪魔には難しい事だ。

でも、人だったら、そんなの簡単だ。

もし、それを叶える為に今回の出来事を仕組んだのだとしたら？

……でも、この悪魔の姿を見ているとどうでもよくなった。

実際に、僕の五月のようになりたいという願いは叶っているし、こいつが人間になってしまえば、二度とこんな事も起こらないだろう。

……しかたないな。

「あのさ、僕達と仲良くなりたいたら今度は人間としてきなよ。

そしたら、僕が悪魔の友達になるよ」

「そ、それが願いでいいんですね！

わかりました！それでは願いを叶えますよ！

どっせ〜いっ！〜！」

言葉と同時に僕の視界は暗転。

暗闇の中で僕は祈る。

<願わくば、僕が目覚める時には平凡な日常が待っていますように！>

そして僕の世界は終わりを迎えた。

生徒達で溢れ返った教室の中、僕はぼんやりとしていた。昨晩は妹の桜とゲームを夜遅くまでやっていたので眠くて仕方が無い。

僕が欠伸をしていると後ろから声を掛けられた。

「おはよう、七月。君は相変わらず天使のように可愛いな」

とても美しい容姿をした僕の親友、三月ちゃんだった。

三月ちゃんは僕をよくからかってくるので、話し半分で聞いていないと恥ずかしい思いをする。

「うん、おはよ。三月ちゃんは今日もとても可愛いね」

三月ちゃんは意外と褒め言葉に弱い。

でも、僕の言葉に顔を赤くしている三月ちゃんは本当に可愛い。

「…こほんっ、あゝ今日は転校生が来るそうなのだが知っているか？」

僕から顔を逸らし強引に話しを変えようとする。

未だに頬が赤いままなので僕も思わず笑ってしまった。

三月ちゃんはそんな僕に気付き軽く睨んでくる。

おっと、そろそろ真面目に答えないと不味いかな？

「ううん、知らないよ。そういうのはお兄ちゃんが詳しいんじゃないの?」

「……五月は美少女マニアだからな。転校生と聞けばまずは男か女か調べるだろうな。」

まあ、私も同じだが」

三月ちゃんも美少年マニアだったのだろうか?
それとも美少女マニア?

……三月ちゃんと美少女が二人で

「つき、七月?おい、どうしたんだ?」

わっと、つい妄想の世界に飛び立ってしまった。
三月ちゃんに呼ばれていたのに気付かなかった。

「ええっと、転校生って女の子?」

直接的に聞いたのは不味かったかもしれない。
これじゃあ、お兄ちゃんと同類だと思われちゃう。

三月ちゃんも僕をじと眼で見ている。

「おい、全員席付け」

おおっ、ナイスなタイミングで担任が入ってきた。
三月ちゃんも渋谷席に戻っていく。

流石、独身貴族だ。一切貴族的要素は無いが。

「あゝ、もう知っている奴もいるかもしれないが今日は転校生がいる。」

それじゃあ、入ってきていいぞ」

そう言っ入ってきたのはとても可愛らしい少女だった。

そして彼女は容姿に不釣り合いな、風変りな話し方で自己紹介をした。

「……やあ、初めまして。一応、自己紹介をしておきましょう。」

私は「

Q・非日常は敵ですか？

A・はい

いいえ

夢の終り（後書き）

これで、シリアス編？完結です。

駆け足だったので読みにくい文章になってしまいました。すいませ
ん。

これからは、色々と変わった七月達の世界でラブコメを続けていき
たいと思います。

ここまで読んで下さった読者の皆様、本当に有難う御座います。

あとがきと没エピソードなど

「ここまで「非日常は敵ですか？」お読み頂き感激の至りです。本当に読者の皆様には感謝しても感謝しきれません。読者様のアクセスやご評価、ご感想でここまで頑張れることが出来ました。

ありがとうございます。

言いたい事は以上ですので以下は作者のどうでもいい話や、裏話的なことですのでそういった話に興味が無い方は戻った方がいいかもしれません。

それでもいいですよという、寛大な方は下へスクロールしてみてください。

なんか書いてあります。

・この話の誕生について。

この話は完全な思い付きです。
作者自身がこれまで小説というもの書いたことが無かったので、全然勝手がわかりませんでした。
いまでも、よく分かりません。

とりあえず、色々な文が書きたかったのでコメディイならなんでもありだと考え、
安直にコメディイにしました。結果カオスとの感想を頂きました。
どうもです。

一番驚いたのがこれを投稿した次の日にアクセスが凄い事になって

いたことです。

アクセスランキングに食い込んでいてバグかと思いました。
正直こんなに沢山の人が見てくれているという事実嬉しい反面、
滅茶苦茶怖かったです。

だって、こんな素人が書く小説です。

初めは勢いとかキャラでなんとかならないかと思ってましたが、
途中で路線を間違えました。二話のシリアスっぽい引きです。めち
や初期段階です。

しかも、それが主人公の自由をかなり束縛しています。

何を考えてるんだこの作者はと自分の頬をぱんぱんしました。ぱん
ぱんです。

初めは楽しく書いていたんですが、毎日更新を軽く掲げてたんで義
務みたいになってきました。

そしたら困っちゃいました。飽き性の作者は面倒になってしまっ
たんです。

こいつはどうしようもありません。とんでもないダストです。

結果、二十話と二十一話は作者的にはとっても遺体です。死んでま
す。

この後書きは書きたい事かいてますが内容は同様に遺体です。

違いは書いてて楽しいかです。ここなんてデレも読まなそうなんで
はっちゃけてます。

楽しいです。初めての後書きというやつです。

……話しの後にもある？あれは真面目TSの本気のお詫びとお礼で
す。

既に言いたい事は上で言ったんで今は若干ふりーだむです。

・そろそろ、本編に軽く触れときましよう。

これからは、いたって普通なラブコメが突然始まります。すっごい普通です。普通を通り越してカオスです。

本編は七月がキャラ替えしてから突っ込みが弱くなりましたし三月は普通のエロい人レベルです。

作者的にはもう少しエロくてもいいですが、そうすると年齢制限かけるのが面倒です。

結は折角の設定が意味を成さない上、最近空気みたいな存在になってきました。

もちろん、いて当然でつい忘れがちになってしまふ大切な存在の方の空気です。いてもいなくてもいいとかじゃないです。別にいいですけど。

千早は触手キャラですがエロい奴じゃないです。リアルに危険な触手です。

グロ触手です。決して七月に絡ませようとか思ってないです。

剣野は……まあ影が薄いです。

作者がとち狂って壊してしまいました。本来は可愛い物好きの純情少女です。

デユフフとか笑いません。錯覚か幻覚か妄想か夢です。想像上の生物けんのんです。

依緒は名前の時点で間違えました。伏線も回収してません。

メインヒロインぼくしようとして結局三月の方が目立っています。そういう役所です。適当です。

ゴリラはごりらです。

要は出した時はメインキャラにするつもりだったんですが、なんだか、ああいったキャラも美味しいかなと思いました。

初めは要が主人公の物語とか考えていました。

その世界では女の子の要が主人公で、七月に惚れるのですが、七月はもてもてで困っちゃうなって話です。

これだと、ラブコメというよりは純愛路線になるので止めました。

後もう一つが「非日常は敵ですか？」のその後を描いた物語です。

ただ、この話はバッドエンド前提のその後の話ですのでお蔵入りしました。

以下バッドエンド（しょぼい）が載ってますのでお気を付け下さい。

七月は誰にも悪魔の事を明かさなまま、高校を卒業。

その後、七月は悪魔に負けてしまい五月の代わりに命を差し出します。

結果、五月は記憶を取り戻しますが、桜を殺してしまった罪悪感と七月を犠牲にしたことへの償いとしてこれまで七月が演じていた五月として生きることを決意します。つまり、今までの七月を五月が演じます。

五月が七月になりかわったことに三月は気付いていますが表面上には出さず、内心では五月のことを憎んでいます。

五月も春野五月として周囲に扱われますが、それは七月がこれまで築いた五月のイメージであり、本当の五月は誰にも知られていない

ため、そのことに苦悩し続けます。

そんなこんなであった四年後。本当の五月と大学を卒業した要が出会う話。

要「……………はるの、くん……………」

五月「……………ひさしぶり」 五月は七月から話を聞いたり、写真を見て要のことはあらかじめ知っていた（というこじ付け設定）

この出会いがプロローグにあたります。

その後、要は変わった天使と出会います。その天使から、なんやかんやで変身ブレスレットをもらいます（地球を守るとかそんな感じの）

こうして、魔法美少女天使カナメンが誕生。カナメンは後に敵対勢力ぶらつくはんぱーぐ（以下ぶら）の幹部、“怪人ジャスティス”と恋仲になります。

……………しかしジャスティスの正体は七月と桜を生き返らせるため悪となった五月だったのです！

全てを知ったカナメンは苦悩しますが愛する人と悪の道に進むことを決意。しかし、ぶらの首領が嘘で五月を騙しているのに気付いたカナメンは基地を二人で襲撃し、ぶらを乗っ取ります。しかし、そんなカナメンを天使は許しませんでした。

天使は二人への対抗勢力として七月と桜の魂を使い天使を創り出しました。

天使となり記憶のない二人は容赦なく二人を傷つけます。そんなピンチに現れたのは三月でした。

五月の事は憎んでいましたがそれ以上に許せない事があつたのです。七月の魂を冒流したことです。

その後なんだかんだ戦闘が二十話ぐらいあつて、なんだかんだで七月も桜も生き返つてハッピー・エンド。かと思いきや、実は五月は改造によつて短い生涯を終える運命だつたのです。

五月の要望によりカナメンはそのまま五月の死を受け入れます。

おわり

びっくりするほど訳の分からない話です。

これを書いて得をするのは作者ぐらいのものです。

後、もう一つ「非日常は敵ですか？」の嘘設定を使った全く新しい主人公の話があります。

以下嘘設定です。

「非日常は敵ですか？」の世界は別に人外と人間が共存している訳ではありません。

七月達がいるのは隔離された空間「楽園」です。

そこには様々人外や特別な力を持つ人間のみが集められます。

七月は十二歳の時に悪魔の事をここの統括者に知られ連れてこられました。

三月は七月を追つて自らが人造生物である事をばらし「楽園」に入

ります。

この話の主人公は「楽園」に行く前の五月の友達で、ずっと五月（本当は七月）のことを気にかけていました。

そんな彼の前に自称天使が現れます。この天使、実は主人公だけが天使に見えてますが、他人から見ると腐乱死体です。

実は悪魔な天使は主人公を言葉巧みに操り、契約を結んでしまいません。

天使（悪魔）持ちの主人公は「楽園」に行き七月と会います。

主人公はその後、悪魔との契約で七月の命を奪わなくてはならなくて

といった感じの話です。

これも暗い話なので没りました。

……なんだか長いあとがきになってしまいましたね。

最後にこんな後書きまで読んで下さった稀有な読者様へ。

ありがとうございました

あとがきと没上ノ下など（後書き）

あと、すいませんでした

第二十九話 電波悪魔（前書き）

ここから二部のスタートです。

第二十九話 電波悪魔

僕の名前は はるの 春野 ななつき 七月。
神王高校に通うごく一般的な生徒だ。

そんな僕は今、学校を目指し一人で歩いている。
幼い時は兄や妹と一緒に学校に行っていたが、二人とも部活の朝練があるので別行動だ。

妹はバスケ部、兄は美少女同好会の名誉会長だ。名誉でも何でもない。恥を知れ。

大体、昔は爽やかで凜凜しかったのに今は何だよ。

美少女と聞くと目の色を変えるし、何だか鼻息は荒いし、動作が不審だし、

いるだけでウザいし、大気中の酸素を浪費するし、二酸化炭素を増加させるし、

身体から発する加齢臭は公害の一つに数えられ、

光化学スモッグを排出しながら水銀を吐きだすその姿はまさに

とそんな風に兄を心の中で思いつく限り罵倒していると、遠くの人影が目映った。

近づくにつれはつきりとしてきたが人影は小柄な少女だった。

少女は僕に気付くと嬉しそうな表情になり駆け寄ってくる。

僕と同じ銀色の髪が揺れて光を反射し、何の変哲もない通学路が少し幻想的にすら感じられた。

少女の見た目は、さながらファンタジー世界の妖精のように可愛らしい。

少女は僕の顔ぎりぎりまで近付き、にっこりと笑った。

「ふふっ、おはようございます七月様」

やけに丁寧な僕に挨拶をする彼女は、柊ひいらぎ 華憐かれん
二週間程前に僕のクラスに転校してきた華憐は、こうして毎日僕と
一緒に登校している。

しかし、知り合って二週間しか経っていない華憐と、なぜ一緒に登校することになったのか？

それは

「それでは七月様……願ひ事はお決まりになりましたか？」

そう、これを聞くためだ。

転校初日の日に、可愛らしい華憐は変な男たちに絡まれてしまった。そこに偶然通りかかった僕は、もちろんそのまま華憐を助け出した。結果、華憐はそんな僕に大層感謝し、とある提案をした。

それは <僕の願いを一つ何でも叶える> というもの。

僕は別に願ひなんて無かったので遠慮したのだが、華憐は諦めなか

った。

終いにはこうして一緒に登校するまでになってしまった。

困った僕は一度適当な願いを言ってみただが、

「それは七月様の心から望む願いではありません」

と言われ却下された。

今では可愛い華憐と一緒に登校するのも悪い気分じゃないので諦めている。

……別に僕は美少女同好会に属している訳ではない。

華憐は中々面白い女の子なので仲良くしているだけだ。

華憐が物凄く可愛いのは一切関係が無い。

………たぶん。

それに華憐は基本的に人当たりも良く、穏やかな性格をしている。

ただ、あまり人が華憐に近寄ろうとはしない。

それは華憐の転校初日の自己紹介に端を発する。

華憐は事もあろうにクラスメイト四十人の前で、ここのたまったのだ

「………やあ、初めまして。一応、自己紹介をしておきましょう。

私は前世が悪魔です」

瞬間教室が凍りついた。

今でもあの教室中の冷たい空気は記憶に新しい。

可愛らしい少女が突然電波を受信したのだ。しかも真面目な表情で言うものだから余計危機感を煽った。

もちろんクラスメイトはどん引き、一人空気の読めない馬鹿は大爆笑していた。

……しかし一緒にいる内に、華憐は少し変わっているだけのいいことだと分かった。

会話に関しても、突然電波を受信することなんて無い。

「七月様」

「ん、何？」

そっだ、彼女は少し変わったところはあるけれど優しい普通の

「私も元悪魔ですから、ちょっとくらい悪い願い事でも大丈夫です。

例えば　　世界征服とか！どうです、やってみませんか？」

両手を胸の前に持って来て、わくわくと期待した目で僕を見る華憐。

そっだ、会話に関しても、突然電波を受信することなんて無い。

華憐は、いつでも電波受信中だ。

第二十九話 電波悪魔（後書き）

唐突に始まりました。一応、第二部です。

ここからはシリアスはもうないです。らぶとこめだけです。多分。

七月のハーレム？はこれから更に拡大していきます。

とりあえず終わりは考えてないので気長な気持ちで読んで頂けると嬉しいです。

それでは、またよろしくお願いします。

そして、ありがとうございます。

第三十話 かたる悪魔

僕は現在、華憐と一緒に学校へ向かっている。

普通、美少女との二人っきりの登校ならば楽しくない筈がない。

けれど僕は若干、今の現状に疲れていた。

なぜなら、隣の華憐が先程から世界征服の素晴らしさについて延々と語り続けているからだ。

「七月様、世界征服は男性のロマンだとは思いませんか？」

この世のすべてを手中に収める。誰もが夢想し、なし得なかったことです。

その人類初の偉業を七月様が成し遂げるのです！どうです、やってみませんか！」

正直、どうですと言われるても興味がなとしか言いようがない。

僕は現状の生活に満足しているし、争い事はあまり好きじゃない。

「世界征服をすればハーレムが作り放題ですよ」

「……………」

何を言われようと僕の心が揺らぐことはない。

僕が望むのは純愛なのだ。そんな爛れた関係に一切興味はない。

まったく、華憐は僕のことをなんだと思っているのだろうか……！

「いきなり、ハーレムと言われてもピンとこないですか？

では、七月様の周りの方で想像してみてください。

七月様の周囲には様々なタイプの女性がいらっしゃいますよね。

そんな魅力的な彼女達全員を七月様の思うがまま好きなままにできるのです」

………

華憐の言動で僕の脳内が一瞬ピンク色に染まったなんてあるはずがない。

まあ、そんなありきたりな誘惑ごときに惑わされる僕じゃない。

ここは僕の名誉にかけてきっぱりと否定しておこう。

「……き…きよ、興味ないよ」

普通にともった。恥ずかしい。しにたい。

これじゃあエロいことを考えていたのがバレバレだ。

「……えっと、そうですか……あー……では、しかたがないですね
……」

「……うん」

おそらく、何かフォローをしようと思ったのだろうが、その華憐の
優しさが今の僕にはとてつもなく痛い。

「……」

「……」

長い沈黙により次第に空気が重くなっていく。

「……えっと……あつ……！な、七月様は悪魔をどんな存在だと思
っていますか？」

明らかに不自然な話題転換だが、華憐の厚意を無碍にしたくはない。

よし、ここは真剣に考えよう。

……悪魔か。

「……どんな存在って……そりゃ悪魔って言うくらいだから悪いんじ

やないの？」

結局、真剣に考えたものが出てきたのは漠然としたイメージだった。悪魔と聞くとどこか胡散臭い雰囲気がある気がするし、少なくともいいイメージはない。

「いーえいえ、そんなことはありませんよ。悪魔というものは契約を結ぶ存在なのです」

「契約……？それって、何かを対価に願いを叶えるっていうやつ？」

「ええ、そうです。悪魔は人の強い思いに呼ばれ世界に召喚されます。」

そして契約を結び願いを叶えるのです。むしろいいものだと思いますせんか？」

そう言われるといいもののように思えるけれど、物語とかだと願いを曲解したりして結果不幸になる話が多い気がする。

「それは空想の話ですよ。実際はそんなことはほとんどありません。」

七月様、空想と現実をこっちゃんにするのは現代っこのよくないところですよ」

少し怒った様に華憐は言うが、そもそも悪魔自体が眉唾物だから仕方がないと思う。

あと、華憐も現代っこだから、というツッコミはすべきなんだろうか？

「……ふむ、では七月様。なぜ、悪魔が眉唾物の存在だと認識されているかわかりますか？」

「それは……やっぱり存在が確認されてないからじゃないの？」

現代には人外や異能者と呼ばれる存在はいても悪魔という種は確認されていない。

だから、当然いないと考えるのが普通だと思うけど……。

「確かにそれもありますが、もっとも大きな理由は別にあります。

それは悪魔という存在がありえないと考えられているからです」

「……？」

「この世界には異能や魔術といった、物理法則を無視した力があります。

けれど、それらですら不可能とされていることを悪魔は実現出来るからです。

悪魔は空間と時間、そして確率の操作ができ、これらすべてを使う

て人の願いを叶えるのです」

たしかそういった力を持つ人は異能者にもいるし、魔術にもあった気がする。

けれど、その人たちにも出来ないことはある。

例えば

「死者、蘇生……？」

「そうです。死んだ人間を生きたように動かすことはできても、

死という事実を覆せるのは神と悪魔だけに限られているのです。

故に、親しいもの亡くしたものは異能や魔術に傾倒するのです。

けれど、そこに限界が訪れる。そんな時に人は望むのですよ。

『誰か助けてくれ』

と、ね……そんな人たちの願いを叶えてあげるのが悪魔の役目なのです」

そういつて華憐は僕にっこりと笑いかけた。

ここまで話し合ってきてなんてだけれど、

正直に言ってしまうえば僕は悪魔という存在は信じてはいない。

華憐は元悪魔だと言ってはいるが何一つとして証拠はないし、
今の話も華憐の考えた妄想だと考えるのが普通だろう。

けれど、華憐と接していると時折思うことがある。

僕に甘い言葉を囁き、誘惑する華憐の姿はまさしく物語の悪魔のよ
うで……

「どうかしましたか？」

「……ううん。なんでもないよ」

心のどこかで違和感を感じているはずなのに華憐を拒むことが出来
ないのは

僕の心が既に悪魔に魅入られてしまったからかもしれない。

なんて、覗き込んできた華憐を見ながら、僕はそんな馬鹿み
たいなことを考えていた。

第三十話 かたる悪魔（後書き）

約4ヶ月ぶりの更新となります。

期待されていた方やコメントをくださった皆様、遅くなりすいませんでした。

この4ヶ月間ほぼ小説を書いていなかったので色々と思い出すのが大変でした。作者ですらそうなのに読者の皆様には尚更だとおもいます。以前と文章の感じが変わっていたら申し訳ないです。いまから書く次の話では新キャラがおそらく出ます。出来れば楽しみにして頂けると嬉しいです。

ここまで読んで下さった皆様ありがとうございました。

第三十一話 苦手意識

学校に着いた僕たちは、途中で出会うクラスメイト達にからかわれながら

華憐と二人で教室に向かった。

出会うたびに色々言われるのは面倒だけれど、皆がからかうのもわからないでもない。

誰もが目を瞪るほどの美少女と突然仲良くなる奴がいたら気になるのは当然だ。

普通なら嫉妬されてもおかしくないのだけれど、

僕と華憐は傍から見ると、同じ銀髪ということもあって兄妹のように見えるそうだ。

あと僕の友達がそういったことを牽制してくれているのも大きな要因だろう。

こういう時に、持つべきものは友達だなあと心の底から思う。

そんなことを考えながら教室に華憐と一緒に入ると、

「…………おはよう、七月」

「お、おはよう……………」

扉を開けてすぐのところ仁王立ちしている友達が待ち構えていた。

……なぜだろう、何も悪いことはしていないのに思わず土下座をし
そうになった。

僕を不機嫌そうな顔で睨んでいる彼女は叶野 かのう 三月 みつき
彼女は僕の小学校からの友達であり、最も仲の良い友達なのだけ
れど……

「……………」

「ど、どうかしたの三月ちゃん……?」

僕の言葉には答えず、無言で僕を見つめ続ける三月ちゃん。
三月ちゃんは僕より身長が高いので、必然的に上から見下ろす形に
なる。

そのうえ、戦女神と呼ばれるほどきれいな三月ちゃんの目は鋭く、
それに睨まれた僕は金縛りのように体がすくんで動くことさえでき
なくなっていた。

うう…こ、怖い……

「どうかしましたか、七月様?」

なかなか教室に入らないことに疑問を抱いた華憐が僕に話しかける。
それにより、三月ちゃんの視線が華憐へと移行し、僕の金縛りが解
ける。

ほっとしたのも束の間、三月ちゃんから更に不機嫌オーラが放出された。

「……………柊、いい加減七月のストーカーをすることをやめたらどうだ？」

「ストーカーとは心外ですね。これは恩返しの一環ですし、七月様が拒んでおられない以上、

叶野様が口出しすることではないと思いますが？」

突然、喧嘩腰で話し始める二人。

「七月はやさしいから言い出せないだけだ。知りあって二週間で、登校の待ち伏せをするのはどうかと思うがな」

「七月様の身边を無断で監視して、邪魔な女性を排除している叶野様の方が

よほど異常だと思えますがね」

「七月に害をなすものを排除するのは当然のことだろう。お前も例外ではないがな」

「七月様に、ではなく叶野様にとって害のあるもの間違いではありませんか？」

こ、怖っ！

というか僕を間にはさんで争うのはやめて欲しい。

間に挟まれた僕は、二人の放つとてつもないプレッシャーに押されて今にも気を失いそうだ。
僕の意識は次第に朦朧としてきて、二人が何を話しているのかもわからなくなっていた。

……ああ……まず……い……いしき……が……

「周りの皆に迷惑だし、そろそろ醜い争いはやめたら？」

どこからか放たれた声が教室全体に響き渡り、教室が一時静寂に包まれる。

と、同時に二人のプレッシャーは霧散し、
三月ちゃんと華憐は、ばつが悪そうに互いに視線をそらした。

気絶寸前だったが、先的一声で復帰した僕は視線を教室内に巡らせた。

ん？

そこで目についたのは、一人のクラスメイト。
地面に付くかというほど無造作に長く伸びた黒髪が特徴の女生徒。
先程の声はおそらく彼女が放ったものだろう。

彼女は

「君は本当に情けないな。僕としてはもっと君にしっかりして欲しいんだけどね」

「う、ごめん」

早速のダメ出し。

呆れたようにダメ出しをする彼女に、脊髄反射で謝ってしまう僕。

僕と目が合うなりダメ出しをした彼女は 神無 かんな 六月 むつき
彼女とは三月ちゃんより長い付き合いなのだが、友達というよりは
姉と弟の関係に近いかもしれない。
僕は小さい頃から彼女のお世話になってきたので、彼女には全く頭
が上がない。

「……………謝られても、ね。まあ、いいや……………それより二人とも、喧嘩をするのは自由だけど、

やるなら他の人に迷惑がかららない外でやってくれないかな？」

僕の返答はどうでもいいのか適当に流すと、億劫そうに二人に注意を促す。

あれだけヒートアップしていたのだからそう簡単には終わらないんじゃないかと

思っていたのだが、

「……………いや、これ以上七月の前で醜態をさらす気はない。柎、その…すまなかった」

「いえ、私も言い過ぎました。ごめんなさい」

あつという間に仲直り？してしまった二人。まさに鶴の一声だ。

三月ちゃんは誰に対しても強気だけれど、六月には相談などを聞いてもらっているらしく、

僕と同様に頭が上がらないそうだ。

華憐も割と我を通す方なのだが、すぐに折れたところを見ると六月が苦手なのかもしれない。

……………まあ、六月を得意としている人なんて見たことがないけれど。

六月といると本当に同じ年齢なのか疑いたくなる時がある。

どこか達観とした雰囲気、同年代にはない異様な落ち着き。

そのうえ、文武両道ときたものだ。今まで六月に勝てた試しがない。

けれど僕はそんな彼女によく似た人物を知っている。

僕は六月にその影を重ね、思わずじっと見つめてしまう。

そつ……見た目ではなくて雰囲気か

「……七月、柊の次は六月か……？」

「七月様、気のない男性は嫌われますよ。それとも……ハーレムをご所望ですか？」

何を勘違いしたのか意味不明なことを言い出す二人。

そんな訳のわからないことを言い出した二人を見て、六月が呆れたように溜息をついた。

その溜息には僕への不満も含まれているのだろうなと思うと、僕は無性に申し訳ない気持ちになった。

ほんと……学習しない人達ですいません……

……

あと、へたれですいません……

第三十一話 苦手意識（後書き）

新キャラ登場の三十一話です。

過去の変化によって、七月だけでなく周囲にもなんらかの影響が出ています。

それによって登場したのが今回の新キャラです。

もとい後付けともいいます。

一部では出てなかったけど、実は親しかった的なキャラは今後も出てくると思いますが、そこは深くつつこまないでスルーでお願いします。

次の話ぐらいまではなんとなく思いついた話があるので書けるとは思いますが、その次はほぼノープランなので更新がどうなるかわかりません。

更新は出来る限り頑張ります。読者様、ここまでお読み下さりありがとうございます。

登場人物紹介その2

〜人物紹介＋設定など〜

以前の紹介からほとんど新キャラはでていないのですが、4ヶ月も間が空くと

この人誰？どんな人？いつでた？と、そう思われる読者様も多いと思いますので、

前より詳しいキャラ紹介と設定をまとめてみました。

読まないと今後困るということはおそろくないので、興味のない方はとばして頂いて構いません。

むしろ、キャラのイメージを崩壊させるような設定などもあるのでお気を付け下さい。

・春野 七月 はるの ななつき (始まりの夢)

この物語の主人公。神王しんのう高校二年。身長は160程度。少し長めの

銀髪と緑眼。

見た目は、私服の場合だと9割方女性と間違われるくらいの女顔と女性的な体つき。

基本的に女性には甘くへたれのうえ鈍い。かなりのむっつり。女性の胸に興味津々。

基礎能力は水準よりかなり高く、大抵のことはそつなくこなせるが、周囲の人間が凄すぎて、本人も気付いていないし、若干霞みがち。

そのせいで幼いころは卑屈になりがちだった。

双子の兄、五月にはツンデレ気味のブラコン。本人は知らないが男女混合のファンクラブがある。

部活動や委員会などには所属せず、帰宅部一筋。

・春野 五月 はるの さつき (始まりの夢)

七月の双子の兄。わずかながら身長が高いが、見た目などはほぼ七月と同じ。やや髪が短いぐらい。

けれど、七月とは違いあまり女性と間違われることはない。基本的にやや顔の変態。

美少女同好会の名誉会長であり、美少女にたいしてただならぬ執念

を見せる。

基本的に可愛い、綺麗な女性が好き（二次、三次問わず七月含む）。
変態故の奇行や言動が目立つため女性からは毛嫌いされている。

あらゆることに関してトップクラスの才能を持つ。

幼いころはその能力と大人びた物腰に加え、誰に対しても分け隔てなく接していたため、

七月曰く今の千倍は人気があった。過去に彼に心酔していたものは現在の変わりようを深く嘆いている。

・春野 桜 はるの さくら （第一話 狂妹）

七月、五月の妹。神王高校一年。身長は155程度。腰上まである金髪と青い眼。

スタイルは出るべきところを出て、締まるべきところは引き締められている。性格は割と普通。

天使がいたらまさしく彼女のような外見だろう、とは男子の総意である。

運動に関しては七月を上回り、勉強に関しては若干下回る程度。

バスケ部に所属。今のところはほとんど出番がないので影が薄い。

今後の活躍に期待。

・叶野 三月 かのう みつき (第三話 痴情の戦女神)

七月と五月のクラスメイト。身長は175程度。一つに括られた、腰より下まで伸ばした黒髪と黒い吊り眼。

親衛隊曰く、地上に降臨した戦女神。豊満な体つきをしており、七月の視線を釘付けにする。

被虐的欲求の強いものは彼女の鋭い眼光に惹かれるが、実際は本人に被虐的欲求がある(七月限定)。

七月の周囲を常に監視しており、障害となりそうな人間は本人に気づかれないように排除(警告など)している。

出自に何か秘密があり、それゆえ人間では考えられない程の高いポテンシャルを有する。

それに加え高い耐久性と、再生能力を持つ。

小学二年の時に七月の通う小学校に転校してきて以来、ずっと七月のことを思っているが、

意外と奥手なため、なかなか素直に自分の気持ちを伝えることが出来ない。

・三上 結 みかみ ゆい (第四話 小さな癒し)

七月のクラスメイト。身長は120程度。短めの少しカールした桃色の髪と同色の眼。

見た目はどう見ても小学生で、マスコットの扱いと一部の危ない方々から多大な人気を得ている。

精神年齢は見た目と違って年齢通りなので注意。趣味はぬいぐるみ集め。

身体の異常発達により、首が常人よりも長い造りになっている。

生まれた時から、その兆候があり成長するにつれて長くなっていった。現在は130もの長さに及ぶ。

よって、全長は250程度。首は興奮すると長くなるが、自分の意志ではほぼ長さは変えられない。

首は筋肉の塊で、本気になればドラム缶すら潰せる。それ以外の能力はいたって常人の範囲。

七月とは一年の時にクラスメイトになって以来の仲。バスケット部所属。

・磯木 千早 いそぎ ちはや (第五話 僕を捕える君)

七月のクラスメイト。身長は160程度。肩口まである黒髪と黒眼。顔は整っていて、スタイルは標準的。無口、無表情だが七月とその周囲の人間には反応する。

基本はいいこ。ただ、十本の太く長い触手が生まれつきお腹あたりから生えている一族。

触手には獲物を食べるための口があり、中にある小さな針からは神経毒が分泌されている。

触手はある程度の伸縮が可能で、切られても一日あれば再生する。食べ物は上の口からでも摂取できる。

でも、触手のほうがよく使う。一年の時にクラスに馴染めずよく屋上にいたが、

偶然屋上に来た七月と出会い色々あった結果、次第にクラスに馴染んでいった。

異性で触手を触っていいのは七月だけ。千早の一族にとって、許可なく触手に触れることはセクハラにあたる。

・ 剣野 薫 つるぎの かおる (第十一話 剣聖)

五月のクラスメイトのクラス委員長。身長は165程度。三月より少し短い黒髪のポニーテールと黒眼。

着やせするタイプ。責任感は強いが時々行き過ぎて暴走する（特に七月相手だが多い）

きびきびとした言動や行動だが、実はかわいいものが好きで、一見すると脳内が危ない妄想で満たされる。

家が剣術道場をやっており、剣の腕はかなりたつ。魔剣？“タイケーン”と契約を交わしており、いつでも召喚出来る。

どちらかと言うと、女性から多大な好意を寄せられている。二年になり七月と同じクラスになったが七月の女性関係が目に残り

度々注意を促すうちに仲良くなった。成績は上の下あたり。

・米良 依緒 めら いお （第十二話 運命に抗う者達）

神王高校一年。身長は150前後。左右に括った長めの茶髪と黒眼。体にそぐわぬ大きな胸。三月未満、桜以上。

男子は思わず視線を向けてしまうが、彼女の無邪気な笑顔に罪悪感を覚える。

とても明るい性格をしており、クラスのムードメイカー的存在。相談事をよく持ちかけられる。

普段は隠しているが、どうしても叶えたい願いがあり、一時期そのせいで体を壊すまで酷使し続けることがあったが、

七月と出会い諭されることで現在は若干抑えられている。どんな願いかは七月は知らない。

名前に関しては知ってる人も、知らない人もスルー推奨。意味は無い。

・斎賀 要 さいが かなめ (第八話 黄昏の君)

七月のクラスに転校してきた男子。身長は155ぐらい。見た目は、少し幼い以外は普通の黒髪黒眼。

不良？に絡まれていたところを七月に助けられて以来、七月に懐いている。

ただ、友情が行き過ぎて若干危ない人になっている。七月も引き気味の時がある。

やや天然。ノーマルのはず。

・剛田 五里子 ごうだ ごりこ (第八話 黄昏の君)

七月のクラスの転校生。要の前日に転校してきたゴリラ。身長は大人のメスゴリラぐらい。見た目ゴリラ。全裸。

とある事情から七月にシャイニングウィザードをくらう。意味不明。

金さえあればゴリラも入れる神王高校。

ゴリラ界のお嬢様。ゴリラの中ではトップクラスの美貌を持つ。性格はお嬢様故気高い。

今まで甘やかされて育ったうえ、能力もかなり高いので人生を少し単調に感じていた。

しかし、七月との出会いにより人生観に変化が現れる。

ある意味純愛路線の正ヒロイン的ポジションだが、ゴリラ故そのルートは無い。

番外編やリクエストでもあれば別だが、本編では絶対にありえないルート。

あえてのゴリラルートとかは考えたこともない。でも桜ルートよりはるかにありえる。

・窓手 群子 まどて むれこ (第二十一話 嘘は良くない)

七月のクラスメイト。二本の女性の腕の形をとっている生命体。

普段は床に溶け込んでいる。結の親友。喋れはしないが、言葉は理解できる。

実は手タレとしてCMなどに出るぐらい綺麗な手をしているが、あ

まり気付かれない。

群子ルートは若干面白そうだけれど、本編ではきつとやらない。

番外編やリク（以下略）。あえての群子ルート。桜よりありえるから困る。

・悪魔　あくま（始まりの夢）

悪魔。誰かの強い願いに応じて生まれる存在。

対価と引き換えに願いを叶える。対価は物、命、時間などによって支払うことが出来る。

本人がもつとも叶えたい願いを叶えるか、対象者が死ぬとこの世に存在出来なくなる。

性別、姿は特にない。嘘はつくが願いは必ず叶える。

・柊　華憐　ひいらぎ　かれん（第二十九話　電波悪魔）

七月のクラスに転校してきた。身長152、3。腰あたりまで伸びた銀髪と緑眼。

胸はほぼない。ファンタジー世界の妖精が大きくなったら彼女になるのではないかと噂されている。

自称、前世が悪魔。転校初日に不良に絡まれていた所を七月が助け、その恩返しに

七月の願いを一つ何でも叶える、と言って一緒に登下校までするようになった。

実際に前世が悪魔なのかは不明。どうやって願いをかなえるのかも不明。

電波の可能性も考えられる。口調はやけに丁寧で、ほとんどの人を様付で呼ぶ。

性格に関してはどこか捉えどころがないが、七月曰くいいこ。

・神無 六月 かなな むつき (第三十一話 苦手意識)

七月のクラスメイト。身長155前後。地面に付きそつなほど長く伸ばされた髪と黒眼。

化粧つ気がなく、周りの女性が高レベルなので異性から恋愛対象として見られることはほぼ無い。

肉感的な体ではないが、しなやかで美しい体つき、とは五月の言。

能力は七月以上らしいが未知数。というか出番がまだ一話しかないので割愛する。おまけ程度の紹介。

以上で登場人物の紹介を終わります。

次回の人物紹介は新キャラが5〜10人程度、増えたところにやろうと思います。

登場人物紹介その2（後書き）

新キャラはあまり増えてないですが、名前がややこしくて混乱するので今回は人物紹介でお送りしました。
流石に〜月というキャラはもう出さないと思います。たぶん。

あと、少し前に総アクセス数が20万を突破しました。本当にありがたい限りです。

（09/08/05現在）

全話修正予定のため更新停止中です。

話の大筋の流れやキャラの名前などは変更するつもりはありません。描写の増加や改行などの文章修正が目的で、次話の投稿は全てが終わり次第にしようと考えています。

一応最終話（第二部）までの話は考えてあるので、気長に待っていただけると助かります。

どれだけかかるかわかりませんが、完結を目指して頑張りたいと思います。

ここまでお読みくださりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6920e/>

非日常は敵ですか？

2011年4月24日21時48分発行